
CHERRY

のの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C H E R R Y

【Nコード】

N 2 5 2 4 C

【作者名】

のの

【あらすじ】

高校生にして恋もキスもしたことがないおれは、皆からチェリーと呼ばれていた。そんなおれの初恋は、一番身近な人に捧げられることになる。おれの純愛と周りの誤解、おれの明日は一体いずこへ？あ、ちなみにおれはホモではないのであしからず。

0 (前書き)

別に泣けません。

よくわからない話です。

BLではありませんが男同士でのキスはありますのでご注意ください。
い。

0

恋は愚か者を賢くし、賢い者を愚かにする。

昔誰かが言った言葉らしいが、おれは自分が人間の中で賢者に属すのか愚者に属すのかわからないので、果たして恋をしてもよいものなのかどうか、ええと、判断しかねるのだよ。

どうせ返事は期待しない。

返事を期待しないのだから、無駄に大声を出しても、それは無駄以外の何物でもなくて、だからおれは、誰にも聞こえないような小さな声で、ただいま、と言った。予想通り返事はなかった。

当たり前だ、気付かないように言ったのだから。

いや、でも考えてみれば、おれの声には気付かなかった。それはいい。けれども、玄関の扉を開く、及び閉める、といった音にも気付かないとは、一体どういうことなのか。

玄関とリビングは、そんなに、というか、ほとんど、離れていないのだ。詳しく説明すると、玄関に立つ。で、前方右手を見ると、リビングの扉がある。といった具合に、玄関とリビングは、近いのである。

にもかかわらず、この時間ならばリビングにいるはずの、母、そして妹は、玄関の扉が開閉する音にも気付かない。

これはまずい。

何がまずいのかというと、たとえば、この家に、泥棒が目を付けたとする。目を付ける、というのは、盗みに入るターゲットとして見る、という意味である。で、泥棒は、この家について、徹底的に調べる。すると、この家のこの時間、玄関の扉が開閉されても、リビングにいる、母、そして妹は、そのことに気付かない、という穴を泥棒は知る。

こうなるとまずい。

何がまずいのかというと、当然、泥棒は、その、この家のこの時間玄関の扉が開閉されてもリビングにいる母そして妹はそのことに気付かない、という穴を突いてくる。よほどバカでない限り。

で、泥棒が家に侵入する。母も妹も気付かない。泥棒が父母の部屋にある、預金通帳、高価な装飾品や時計、父母それぞれのへそくり、

などを盗る。母も妹も気付かない。泥棒が家を出る。母も妹も気付かない。

これで泥棒は盗みに成功。

これはまずい。

非常にまずい。

もし父母の部屋から預金通帳、高価な装飾品や時計、父母のへそくり、などが盗まれたとする。

父の収入は少ないわけではない。が、それでもやがて諸々の支払いに追いつかなくなる。生活は苦しくなり、ついにはサラ金に手を出す。借金返済に追われ、生活はますます苦しくなる。もとはといえばてめえが泥棒の侵入を許したせいだろうがこのボケえ、と父母の関係も最悪なものになる。一家は崩壊、おれと妹は兄妹そろって路頭に迷うことになるのである。

ああ、そんなことになる前におれがなんとかしなければ。

そうだ。

妹がそんなことを気にするわけがないのは目に見えているが、母、そうだ、おれが母に、今後玄関の開閉する音に敏感になるように警告すれば、あの母のことだ、素直におれの言うことを聞いて、結果、最悪の事態は避けられるだろう。

いやまてよ。

今まで泥棒の被害に遭った時のことを想定したことはなかったが、考えてみればこれまでもそうだったわけで、つまり、父母からは何も聞いていないが、父母が気付いていないだけで、これまでに泥棒の被害に遭ったことが無いとは言い切れないのである。

ああでもどうしよう。

もし何かを盗まれていて、父母がそれに気付いていないだけだとすると、今この神波家の平和を保っているのは、父母の鈍感力である。つまり、おれが、母さん泥棒の被害に遭ってはいないのか、などと余計なことを口走り、泥棒の被害が露見し、結果、先程述べた最悪の事態に陥らないとも限らないのである。

どうしよう。困った。

「おかえり、お兄ちゃん」

「うわっ、……て、なんだ母さんか」

あーもうびっくりした。

「?どうしたの、お兄ちゃん」

だって、いきなり、あーもうびっくりした。

「いや、何にもないよ」

おれが笑ってみせると、母さんもいつものように優しく笑った。

ちなみに言くと、おれは母の兄ではない。なのに母はおれを、お兄ちゃん、と呼ぶ。なぜだろう。いや、別に名前と呼ばれたいとかそういうんじゃないくて、単純になんでだろうって、そう思ったただけなんだけど。

「何してるの、早く上がって。ご飯にしろ」

友達のような口調で、母さんはおれを促した。

って、いやいやいやいや。

「それどころじゃないよ母さん!」

言ってしまったから、はっ、と両手で口を押さえた。

「?」

キョトン顔でおれを見る母さん。どうしよう。あー、ええい、言ってしまえ。

「母さんっ、泥棒が来てない!?!」

「……は?」

……あれ。

なんかあんまし、なんか、危機感的なのが、伝わっていない?

「は?じゃなくて!母さんの、あるいは父さんの高価な装飾品や時計やへそくりは盗まれていないっ!?!」

おれが必死に泥棒の被害について説明しているというのに、母さんはけらけらと笑い出した。

「何言ってるの、お兄ちゃん?そんな盗まれるようなもの、うちにあるわけないでしょ?」

「ええ？何言ってるんだこの母親！」

「……………本人目の前にして、この母親はないでしょうよ」

盗まれるものが無いなんて、いや、そんなはずがない。絶対に。母さんが父さんに内緒で買った高価な装飾品が、または父さんが見栄をはるために買ったロレックスが、必ずあるはずなのだ。

いや、たとえそうだったものがないとしても、へそくりぐらいあるだろう。無いわけがない。

「あのね、母さん。これは深刻な問題なんだよ、母さんが思っているよりもずっと。だからね母さん、ちゃんと聞いて。隠さなくてもいいんだよ。大丈夫、父さんには絶対に言わないから。あるんですよ、へそくり」

「無いってば、そんなの。ほら、お兄ちゃんもお腹すいてるでしょ、ご飯の準備手伝って。あいりちゃんもお腹すかせてお兄ちゃんが帰ってくるの待ってたんだから」

うっ…………。

「……………わかった」

妹の話をされると弱いおれなのだった。

「ただいま、あいり」

「ふえ？あ、おにーちゃんだあ」

あいりはたった今おれの存在に気付いたように、おれを見上げてにぱっと笑った。

「お兄ちゃん、箸出してくれる？」

「ん」

母さんに言われて、おれは素直に従った。

そういえば、今ソファで膝を抱えて一心にDSをしているあいりは、手伝う素振りすら見せない。

この世はなんて不公平なのだろう。生まれた順番で、こんなに差が生じるなんて。

「あいり、ちょっとは手伝えよ」

なるべくあいりの方を見ないように文句を言ってみる。

「う？」

とぼけた声を上げたあいりを、あ。

見てしまった。

「あっははは、じょーだん！」

くっそおおかawaiiなあ！！

そうなのだ。この差は生まれた順番などではなく、この可愛さ、愛らしさ、憎めない笑顔。おれとあいりの差はここなのだ。

たとえばおれがあいりよりも先に生まれたとして、現在の母のおれとあいりに対する扱いの差に違いが生じるかというと、それはまったくもってありえないことである。

あいりは甘え上手なので、幼少時代より周囲の大人たちから非常に可愛がられていた。

一歩家から出れば、あいりの愛らしい容姿に、おお、かわいいな、

おいでおいで、おお、きちんとあいさつもできるのか、お嬢ちゃん
はかしこいな、かわいいな、といった具合に、あいりが遭遇した大
人の約8割が骨抜きにされ、阿呆のようににまにまと笑みを浮かべ
猫なで声を上げあいりに飴玉などを献上する。

それにひきかえおれはというと、暗い。根が暗い。

根が暗いので、この世に楽しい事など何一つ無い、この世に面白い
ことなど一欠片としてナッシング、というような表情で道をゆく。
もちろん大人は、そんなどんよりとした雰囲気、プラスイオンに
満ちた子供を可愛いと思うはずがない。あいりに出会っては飴をく
れる近所のおっさんは、おれに出会っても近寄ろうとすらしない。
いや、あのくそおやじのことだ、きつとあいりに近付くのも、幾分
かの下心があつてのことに決まっている。くそあのエロおやじ、あ
いりに何かしたらぜってえ許さねえ。いや、何かされてからでは遅
い。次に会った時には許さねえ。

話は逸れたが、そんなかんじで、ええと、なんだっけ。そうだ、あ
いりがどのように周囲の大人から可愛がられているのか。じゃねえ
よ、おれとあいりの違いだ。

たとえあいりがおれの姉だったとしても、きつと周囲の大人たちは
あいりを贔屓する。

あいりは生まれた時からそうだったので、手伝いはもちろん、自分
の部屋の掃除すらしたことがない。

あいりは絶対に自立できない。

おれはそう確信している。

それと、将来あいりの面倒を見るのはおれだ、とも。

「あいり、ご飯食べよ」

母さんがゲームに熱中しているあいりに声をかけると、あいりは、
はあい、と可愛らしく返事をした。でもDSをやめる気は無いらし
かった。

「ねえ、お兄ちゃん」

食卓を見ると、母さんはもう既に夕食に手をつけていた。いただき

ますはちゃんと言ったのだろうか。

「この前のテストはどうだったの？」

「ん、まあまあ」

本当はどのテストのことを言っているのかわからなかったのだが、どれもいつもと変わらない結果だったので、母さんには悪いが適当に答えた。

おれが席に着いて合掌すると、母さんは口に物が入っているのに、無理矢理おれに続いていたきますと言った。どうやら言っていないかったらしい。

「んあー」

がしゃん、とあいりは乱暴にDSを床に叩きつけた。どうやら負けたらしい。

「もおエンドロールかあ」

違った。昨日買ったソフトを早くもクリアしてしまったようだ。

これって、考えてみればすぐわがままだ。気に入らないとすぐに物にあたる、というわけでもないはずなのだが、今日のあいりは機嫌が悪いのかもしれない。

でもこんなわがままも、ああ、世の中不公平だ、あいりだから許されるのだ。

おれの反抗期は、全てあいりに奪われた、と言ってもいい。あいりがわがままを言い放題なので、おれはあいりに手を焼きっぱなしで、いつのまにやら反抗期なるものを過ぎていた。

もしもあいりがこんな性格でなければ、おれは今頃、万引き、喫煙、自転車泥棒、リポDを一日に3本飲み巨大化して街をめっちゃめっちゃにする、などの非行に走っていたかもしれない。

それを考えると、母さんはあいりに感謝するべきなのかもしれないかった。

「あいり、ご飯食べよう」

おれが言うと、あいりはいつものように、嬉しそうにぱっと笑った。

けれどおれは、あいのあの笑顔が、必ずしもあいの喜びを表しているとは限らない、ということを知っていた。

「ねえチェリー、最近どう？」

朝からそのクラスメートは、いつもとまったく同じ質問をしてきた。最近、と訊くなら、そんな毎日毎日同じ質問をするな。せめて週1とか、そんなくらいにしてほしい。

そもそも最近というのは、一体いつからいつまでのことを言うのだろうか。

辞書を引くと、近頃、とか、このごろ、とか出てくる。いや、だからその近頃っていつからいつまでのことだよ、とツツコミを入れてもいいのだが、まあ、それは仕方ない、と心の広いおれは、素直に、近頃、を辞書で引くわけだが、近頃、のところには、このごろ。最近。と書いてある。

畜生。

まあいいよ、このごろを調べればきつと答えにたどり着けるはずさ、と、おれにしては珍しく楽観的に物を考え、よし、やっと最近の範囲が判るぜ、と多少なりともわくわくを覚えてしまったおれにとつて、

「いくらか前から今まで。」

という文字は酷く冷たいものに見えた。

「……どうしたの、チェリー？」

辞書を見つめて絶望にうちひしがれるおれの視界に、クラスメートの日野がぬつと顔を出した。

「な…何、どうって？」

「え、えっと……いきなり辞書持ってきてばらばらめくって、唐突にこの世の最期を見たような顔するから……何があったのかなって」

日野は戸惑いともとれる苦笑をその美貌にたたえた。

日野は可愛い。あირいほどではないにせよ。

勘違いされては困るので言っておくが、日野は女子である。下の名

前はたしか、ええと、ゆ……あれ、や…ゆ？や？ゆ？よ？

ああ忘れた。だめだなおれ、もう、だめだ。

「何調べてたの？」

ひよい、と日野は小さな辞書を覗き込んだ。普通の男ならそれなりにどきどきするのだろうが、おれの心臓は活動を活発化することにはなかった。単調なリズムを刻むだけ。はは、さすがおれの一部。このまま死ぬまで高鳴ることなどないかもしれない。おれみたいにな。

「ねえ、日野、このごろってさ、いつ？」

「え？」

日野はキョトンと顔を上げた。顔が軽く近いな、とは思ったが、他の思い、抑えるのが最も困難だと思われる感情、つまり、怒り、がおれの思考を一瞬で支配した。

もとはといえば、おれがこの絶望を覚えたのは、このごろ、を辞書で引いたからであり、このごろ、を辞書で引いたのは、近頃、を辞書で引いたからであり、近頃、を辞書で引いたのは、最近、を辞書で引いたからであり、最近、を辞書で引いたのは、この日野が、最近どう？などと、曖昧模範な質問をおれに投げかけたせいなのである。

「おいイイイイそのチェリーボーイ！！マイプリンセス彩香さんから離れろオオオオ！！」

彩香さん？

あ。

そうだ、彩香だ。日野彩香。そういう名前だった。

「う……宇垣くん」

日野は宇垣を振り返り、困ったように苦笑した。

「おはよう宇垣、今日もうるさいね。ああごめん間違えた、今日もうるさいくらいに元気そうでなによりだ」

「んなっ、先制攻撃とはチェリーのくせに生意気な！！」

宇垣はさっとでたらめに構えた。前に視線を戻すと、日野は宇垣のテンションにひいていた。心も体も。

「ああわかったよ、しょうがないなあ宇垣は。あとで遊んであげるから、今はあっちに行っていようねえ」

「てめえになんぞ遊んでもらいたくねえよッ」

「日野、宇垣が遊んでほしいって」

「え、あたし!？」

日野はものすごく嫌そうな顔をした。ちよつとだけ宇垣が可哀想に思えた。

「あつ、ていうかチェリー! またはぐらかしたね?」

「え、何を」

「最近のこと!」

それは完全に完璧に濡れ衣である。はぐらかしたのではなく、質問が曖昧すぎるので、答えられずに流したのである。

だが日野は、もとを辿れば自分の過失であるにもかかわらず、おれを責める。まったくもって不条理である。

おそらく日野は、おれが日野の質問に答ええない、いや、答えられない理由が、判らないのであろう。つまりどういうことかというところ、日野は、教師に向いていない、ということだ。生徒が、わかんない、と言うと、わかるでしょ、なんで解らないの、と、自分の説明の下手を棚に上げ、生徒を叱るのである。まったくもう。

「だって、だってね日野、おれ、どう? なんて訊かれてもさ、ねえどう答えればいいの」

日野は目を丸くした。やはり気付いていなかったらしい。

日野は可愛いが、それに反比例するように人の感情を汲み取れない。期末テストの順位はたしか、おれよりも下だった。天は二物を与えず。昔の人は上手いことを言うなあ。

いやまてよ。

もしそのとおりに、顔と頭脳が反比例するのであれば、あいろいはバカであるか、もしくはブスでなければならぬ。なのに、あいろいはあんなに可愛いくせに、頭も良い。

天は二物を与えず。昔の人は何を言っていたんだ。

おれだって、何かしらの長所があってもいいはずである。なのに天は何一つ与えず。やはりこの世は不公平だ。

「えっと、それは」

「あとさ、はぐらかしてるのは日野も一緒だと思うけど」

「え？」

日野の背後には宇垣がいた。日野は、あ、と声を上げた。宇垣は放置されものすごく寂しそうにしていた。

「えっと、宇垣くん……」

「……いえ、いいんです!!」

宇垣はびしっと手のひらを日野及びおれに見せた。日野は言葉を失ったようだ。おれは人知れずため息をついた。

宇垣が何やら日野に言っている隣で、おれは辞書に目を落とした。チェリー。

おれのあだ名。

あだ名、親しみもしくは軽蔑の気持ちを込めて、その人の特徴をとらえたり、本名をもじったりしてつけた名前。

チェリー、さくらんぼ。桜桃。

「おれはさくらんぼか」

「ねえチェリー」

おれの呟きと日野の言葉は同時におれの耳に届いた。けれど日野の耳には、おれの呟きは届かなかったようだ。

「最近、どう？」

さっきと同じ質問だった。おれは黙ってかぶりをふった。日野は諦めとも安心ともつかないため息について言った。

「これ、チェリーにあげる」

日野の背後には、もう宇垣の姿は無かった。日野はおれの手のひらに、飴玉を一粒落とした。

「何？」

「人を好きになる種」

おれが顔を上げると、日野と目が合った。

日野はにこ、と笑った。
でもやっぱり、おれの心臓はいつもどおり単調なリズムを刻んでいた。

おれは図書委員である。

各クラスから必ず男女一人ずつ選出しなくてはならない図書委員の候補に、特に理由も無くおれの名前が挙げられてしまい、他のやつらは当然面倒な図書委員などやりたくはないので、一人推薦されると、おれ以外の男子の票がおれに集中し、押し付けられる。お決まりのパターンである。

まあ、別にいいんだけどさ。本は嫌いじゃないし。

いや、本を読むのは特に好きというわけではないが、おれは、図書室の匂いが好きなのだ。教室では感じることはない、あの本の匂い。あの空気の中にとくとく落ちて着くから。

「あれ」

がらんがらんの図書室に、珍しく人を発見してしまった。

おかしい。

今の時間に、人がいるはずがないのに。

何故なら、今は授業中だから。

うん、やっぱりサボりはよくないよ、おれが言うのもなんだけど。その姿を追うと、彼は文学の棚の前で、ぱらぱらと本をめくっていた。彼のことは知っている。委員会の集まりで見たことがある。隣のクラスの図書委員だ。たしか名前は、ええと、や……ゆ？や？ゆ？よ？ええと、たしかなんかそんなかんじの名前だった気がするぞ。そうだ、山口だ。

うん、きつとそうだ。そうに決まってる。

「山口！」

おれは山口に声をかけた。だが、聞こえていないはずがないのに、山口は本から顔を上げようともせず、というか、微動だにせず、うう、無視されてしまった。

「や……山口？」

おれがもう再び声をかけると、山口はやつと顔を上げ、一度向こうを見たあとに、おれのほうを見てくれた。本に集中すると周囲が見えなくなるタイプなのかもしれない。あいりみたいに。

「どうしたんだ山口？サボりか？」

「……吉原だ」

あれ、違った？

「おいしいっ、おれ」

「どこがだ」

言いながら、吉原、は、読んでいた本を棚に戻した。

“僕って何”

……題名からして純文学作品だった。

「吉原ってこういうの読むの？」

「ん？ああ……」

吉原はそっけなく肯定した。無愛想なやつだ。おれが言うのもなんだけど。

「純文学系？」

「ああ……夏休みの読書感想文、何を書こうかと」
え。

だとするとかなりのチャレンジャーだ。文学作品の中でも、純がつくものは非常に感想を書きにくい。というより、感想を抱きにくい。結構前の話だが、おれも、純文学本で夏休みの読書感想文を片付けようと試みた経験があった。挫折した。やめておけばよかったと後悔した。

ちなみにそのときの本は、町田康。きれぎれ。2000年の芥川賞受賞作品。やめておけばよかったと後悔した。

いや、面白くないことはなかった。むしろ面白かった。かなり面白かった。

いや、話自体は意味がわからなかった。非常に理解し難い内容だった。が、面白かった。いや、話自体は、主人公が、妄想して、妄想して、妄想して、終わる。という、起も承も転も結も無い、という

か、あるのかもしれないけど判らない、意味不明の話なのであるが、その意味不明の中に散りばめられた、面白さ。崩壊した世界の中に散りばめられた、面白さ。崩壊した世界だからこそ散りばめられた、面白さ。

いや、話自体は意味が解らない。例えるならば、デスノート面白い、と言うのと、銀魂面白い、と言うのでは、違う。面白いのベクトルの方向が違う。で、この、きれぎれの面白い、とは、銀魂の面白い、と同じ方向である。

よくわからない所は適当に流し読みして、面白いなあという所だけ、面白いなあ、と思う。これが、町田康の読み方なのであり、面白い所なのである。

で、おれはその町田康に、ハマった。残念なことに、ハマった。あの独特な、作者の正気を疑いたくなるような、クレイジーな文章は、強い依存性を持つ、ということを知らなかったばかりに。

ん？
あれ、そういえば、きれぎれの、悪役の名前は。

「吉原だあ」

「うん？」

吉原はふとおれを見た。見下ろした、と言ったほうが正しいかもしれない。

「吉原はさ、純文学をよく読むの？」

「よく読むってわけでも無いけど」

「きれぎれって、知ってる？」

「ああ……題名だけなら」

ああ。

もしかすると、ああ、が吉原の口癖なのかもしれない。

「芥川賞とった本なら大体わかる」

「ふうん」

「それがどうかしたのか？」

「ええと、きれぎれの悪役がね、吉原だよ」

「……………」

あれ。

怒った？

「……すごいな、お前」

ん。

すごい。

何が？

「さすが、特進クラスのベスト3だ」

ベスト3？

何の？

「知名度？」

「知名度ならナンバーワンだろ」

いや。

いやいやいや。

おれはナンバーワンよりオンリーワンがいいのだ。あ、でも、初恋がまだのヤツオンリーワンはあんまし嬉しくない。

前々から思っただけののだが、チェリーというおれのあだ名は、宇垣が言うには、チェリーボーイのチェリーらしい。

が、チェリーボーイ、という言葉の意味は、俗語で、童貞、という意味である。で、おれはまだ童貞であり、まあ、それはいい。が、考えてみれば、おれはまだ高校生である。そして、おれをチェリーボーイと呼ぶやつらも、同じく高校生である。で、何が言いたいかというと、高校生ならば、童貞なのは普通のことなんじゃねえの。ということだよ。

「違う、成績の話だよ」

「成績？」

「お前、特進クラスの中でも上だっただろ、この前の期末」

ん……………。

そうだった。

いつもどおりだったと思うんだけどなあ。

「さすがに、頭の回転が早いな」

「どのへんが？」

吉原が図書室の椅子に座ったので、おれもその正面に座った。吉原は笑った。

「お前、自分で気付いてないの？」

理系クラスの吉原、といえば、かなりの有名人だ。

この学年で一番、格好いい。と聞いたことがある。おれはそのへんよくわからなかったけど、この笑顔を見たら、まあ、大抵の乙女は恋に落ちるかもなあ、と思った。

そっか。こういう男がモテるのか。

「な……何？」

「自分で考えてみるよ。お前ならすぐに気付くか、あるいは永久に気付かないかのどっちかだ」

そう言って吉原は、大きな飴玉をおれの口に押し込んだ。いや。

これは、さっき日野にもらった、

「飴なんて持ち歩くなよ、しかも落としてるし。図書室では飲食禁止なんだぞ、絶滅危惧種のチェリーくん？」

おれの口に入れたのは自分だというのに、吉原は軽く咎めるような口調で言った。

でもおいしい。

もらった時もあったが、口に入れたら一層、その大きさを感じた。あირりが近所のくそじじいにもらった、いちごみるくとか、ミルクーとか、そんなのの二倍くらいの大きさがあるのではないかと思うくらいに大きい。

しかも泡玉だ。おれの好きなやつ。

「しかしでかい飴だな」

おれが右頬に飴を移動させたのがよほどおかしかったのか、吉原はけらけらと笑った。

「ひがうよ、あめやないよ」

「は？」

「人を好きになる種らよ」

吉原はキョトンとした。

おれが日野にそう言われた時も、こんな顔をしたのかもしれない。

明日は晴れるかな、というのと、明日は雨るかな、というのとでは、一体どっちが当たりやすいのだろう。

まあどっちでもいいんだけど、明日は曇るかな、が一番当たりやすいのではないか、とおれは思う。

たしか曇りの正確な基準は、空の8割以上が空でなく雲が見え、かつ雨が降っていない状態、が曇りだったはずだ、が、おれは、4割が雲ならもうそれは曇り、と判断してしまう、言うなればせっかちさんなので、おれの場合、明日は曇るかな、が一番当たりやすい、という、おれの見解である。どうでもいいけど。

「チェリー、さっきの体育サボったでしょ」

「違うよ、サボったんじゃないよ、どうせ前回と同じハードルだから、もうこれ以上良い結果は出ないと判断して休んだんだよ。無断で」

「それを世間ではサボりって言うの！」

日野は腰に手を当てて言った。

「何で体育は男女別々なのに、日野はおれが体育抜けてたってこと知ってるのさ」

「え！？や、それは」

日野はよく言葉を濁す。

なのでおれは、日野の将来がちよっとだけ心配だ。

日野が将来、たとえば、そうだなあ、教師になったとする。あ、さつき教師は向いていないってことになったんだっけ。じゃあ、大学教授になったとする。

教授の日野は、心理学を教える。

男は嘘をつくときに、目を逸らす。だが女が嘘をつくときは、じつと相手の目を見つめる。何故なら、男は浮気が露見した時のことを考えながら嘘をつくが、女の浮気は命がけである。身籠ったら一大

事である。そのため女は、浮気は絶対に露見してはならない、と考える。だから女は、嘘をつくとき、つい相手の目を見つめてしまうのだ。

そこまで言うと、生徒は日野に質問をする。

「じゃあオカマはどうなんですか？」

日野は答える。

「えっと、それは……あつ、それはそうとねチェリー、あたし昨日ね、」

「これはよろしくない!!」

おれが机を叩くと、日野がびくつとする気配がした。いや、でもダメだって、このままだと、びくつとするぐらいじゃ済まない、大変な目にあうのだ、他でもない、日野が。

「それじゃあダメだよ日野、誤魔化すのはよくない!ね、日野、言葉を濁すのは政治家だけで十分だ。あ、そっか、日野は政治家になるのか」

「え?せ……政治家?」

「政治家は大変なんですよ?がんばって、おれ応援してる。ところで日野」

「なっ、何?」

日野はまあいい目でおれを見つめる。

おかしい。

これはおかしいぞ。

おれは日野に、人を好きになる種なるものをもらい、さつき吉原にそれを食べさせられた。だからおれは、人を好きになるはずなのである。で、一番おれの近くにいる異性、といえば、この、日野である。だからおれは、自分は日野を好きになってしまうのでは、と考えた。

が、実際に日野を目の前にしても、やはりおれの心臓は単調なリズムを刻むだけである。

あのしゅわしゅわと口の中で弾けた種は、偽物で、つまり、人を好

きになる種ではなかったのか？ いやそれはない。だって、初恋はしゅわしゅわしてるって、宇垣が言ってたもん。……あれ、そういえば。

「宇垣は？」

「え？ あれ、そういえばいないね」

日野はキョロキョロと辺りを見回した。
むう。

やはりあれは単なる飴玉だったのか？

「いやない、それはない」

「そういえばさっき宇垣くん、なんか、俺の想いはやはり届くことなど無いのですね俺は旅に出ます探さないでくださいいいとか言ってるってどっかに……体育もそういえばいなかったかも」

「旅？ 何、宇垣、旅に出たの？」

「そうかも」

そうかあ？

「でもカバンあるし、多分昼休みには帰ってくるでしょ」

「え、そんなに早く？」

「宇垣の根性の無さをなめるな」

どうせ屋上あたりで泣いているに違いないのだ。

おれが言くと、日野はくすくすと笑った。

むう。

やはりあれは単なる飴玉だったのか？

「まあ、宇垣はどうでもいいや。それより日野、さっきの、人を好きになる種のことなんだけど」

「えっ？」

日野はなぜか顔を赤らめ、どもりながら、あれがどうかしたの、と言った。

「あれって、もういっこない？」

「へ？」

日野は間の抜けた声を上げた。

「無いかな？」

おれが聞くと日野はやはり言葉を濁した。
日野はきつと良い政治家になる。

チャイムと共に皆が散り、教室ではお決まりのグループがお決まりの場所を陣取る。

昼休みである。

おれがいつものように母さんお手製のお弁当を広げていると、おれの正面を日野が陣取り、日野の隣を宇垣が陣取った。これもお決まり、いつもどおりの現象である。

「いただきます」

おれが手を合わせると、日野も同じようにした。宇垣は手を合わせずに、口だけで、いただきますッ、と言う。これもお決まり、いつもどおりの現象である。

「ねえ日野」

「ん、なあに、チェリー？」

食べながらの雑談。

人によっては、行儀が悪い、と言われ、人によっては、楽しむためには必要不可欠だ、と言われる、使っていいのかダメなのか風邪薬のようなよくわからない、行動。ちなみに我が家では、母さんが積極的に食事中に会話をしようとする。

食事中の会話というのは、マナー的には、やはりあまりよろしくないことなのだろうが、最近の社会問題の一つとなっている、家庭崩壊、の原因は、そこにあるのでは、と考える者がおり、母は、その説を信じ、積極的に食事中の会話を勧めているのである。

だがしかし考えてみれば、神波家では食事中の会話を推進しているにもかかわらず、昨日のシュミレーション、もしも神波家に泥棒が侵入し預金通帳及び高価な装飾品や時計及び父母のへそくりが盗まれてしまったらパート1、では、神波家は、木っ端微塵に崩壊してしまったのであり、だから、そう、食事中の会話の有無は、別に、家庭崩壊とは、何の関わりも無いんじゃないかねえの？

「親ってさ、絶対にへそくりとかあるよね」

「へ……へそくり？」

「そう、へえそくり。宇垣、箸の持ち方違うよ」

「いいじゃんそんなの、ちゃんと食べれてるんだしさ。いつもこれだぞ」

「そんなんじゃないや社会に出たとき恥ずかしいよ？」

「う……大体チェリー、今まで何も言わなかっただろ。なんで急に箸の持ち方なんか」

「へそくりかあ………」

日野は軽くにやけている。主婦になったら絶対にへそくりハマるタイプだろう。将来日野を嫁に貰う男は大変だなあ。

「まあ、へそくりくらい、あってもいいんじゃない？」

日野はそう答え、さくらんぼを柄ごと口に放り込んだ。さくらんぼだって。

チェリー。

おれじゃん。

「あれ、日野、さくらんぼは柄まで食べる派？」

「う、違うよ！」

日野は口をもごもごさせながら否定した。

「口の中でね、さくらんぼの柄を結ぶの。舌を巧く使って。結構難しいんだよ？」

「へえ、何のおまじない？」

「んっと、おまじないじゃなくて」

「キスの上手い下手の話だ！」

横から宇垣が口を挟んだ。キス？とおれが聞き返すと、宇垣は得意気に言った。

「口の中でさくらんぼの柄を結べたら、キスが上手いんだぜッ」

「だぜって………」

宇垣の隣で、日野が苦笑した。軽くひいているようだ。

「キスが？なんで？キスに上手いとか下手とかあるの？口同士が触

れるだけなのに？」

ぶほっかしゃん。

宇垣が吹き出すのと、日野が箸を落とすのは、ほぼ同時だった。

「ち……チェリー……」

「ごめん、俺チェリーのことなめてた」

「え、ホントに？」

「チェリーすぎるぜえ……」

？

なんで？

「チェリー！」

教室の扉の方から、クラスメートの女子がおれを呼んだ。ええと、名前はなんだったかな。確か……ええと……杉……杉元？吉原のこともあることだし、おれの記憶力は頼りにならないからなあ……。

「お客さんだよ」

杉元（暫定）はそう言うと、そそくさと退いた。杉元（暫定）の向こうにいたのは、3限に図書室で共にサボタージュした男。

「吉原？」

おれが首をかしげると、吉原は扉に背を預けたまま、左手を軽く挙げた。

「ちょっと行ってくる」

おれが言うと、日野と宇垣はこくこくと頷いた。

大分呆然としているようだ。

なんでだろう。

「どしたの、吉原？」

「図書当番」

こっん、と吉原は手の甲でおれの額を軽く叩いた。ノックをするな、ノックを。

「知らなかったか？昨日から俺とお前が当番だったんだぞ」
「知らなかった。」

てか図書当番って何？

「そんなのあったんだ……」

「……………」

吉原は大きなため息をついた。あわわ、呆れられた。

「昨日来なかったから、まさかとは思ったが」

言うなり吉原は、おれの首根っこ、襟首、を掴み、行くぞ、と囁いた。

「あっ、ちよっ、待って吉原、まだおれお弁当食べてないんだよう」「なら向こうで食べばいい」

「図書室は飲食禁止なんでしょっ」

「飲食スペースがあるんだ。図書委員なのにそんなことも知らないのか？」

「ええ？知らないよそんなの、誰も知らないよおれのお弁当持ってってえ」

「昨日はおれが一人で二人分働いたんだ、今日はお前が働け」

ずるずると引きずられるおれを皆が見てる、見てるよ吉原、おれら見られてるっ！

「とおっ、りあえず放してっ、吉原あ」

おれが必死に言うのと、吉原は意外とあっさり放してくれた。う、普通に言えばよかった。

普通に言ったら放してくれないかと思って結構がんばってるように聞こえるように言ったらぽっと放してくれた。普通に言えばよかった。

「ごめん吉原、本当に知らなかったんだ。ごめんね？」

「……………まあいい」

ふい、と吉原は先を歩いた。もちろん行き先は図書室である。おれも大人しく吉原についていくことにした。

「ねえ吉原」

「何だ」

「……………やっぱり怒ってんじゃないの、この人？」

「キスってさ、どういうのが上手いの？」

「……………は？」

吉原はぴたりと歩を止めた。

吉原を追い越してから、おれも立ち止まって吉原を振り返る。

「おれ、キスに上手いも下手も無いと思うんだけど」

「……………」

吉原はこめかみに手を当てて少し考えるようにしたあと、再びおれの先を歩き出した。

「……………そうだな。俺もキスの上手い下手を判るような奴にはなりたくない」

……………質問と解答が微妙にかみ合っていないような気がするが、おそらく、吉原なりに考えて答えてくれたのだろう。

「どういう意味？」

「……………それは自分で考えろ」

うわあまたか。

日野と違って、吉原は教師に向いているのかもしれない。

「んう……………」

あ、そっか。

「わかったあ」

おれがそう言うころには、もうおれたちは図書室にたどり着いていた。

「わかったって？」

「キスの上手い下手を判るような奴にはなりたくない理由」

吉原は少し驚いたようにおれを見下ろした。

やだなあ。

やだなあこの身長差。

「お前、ずっとそれ考えてたのか？」

「好きな人とのキスだったら普通、上手い下手を判別する余裕が無いんだ！」

おれが言っていると、吉原はますます奇妙なものを見るような目でおれを見た。

まるで、絶滅危惧種の珍しい動物を見るような目で。

「だから上手い下手を判るような奴ってのは、好きじゃない人とキスできるような奴ってわけで、だから、吉原は、好きじゃない人とキスできるような奴にはなりたくない、ってことだ！そうでしょ？」

「…………お前、よくそんなこと大声で言えるな」

吉原の声には苦笑が混じっていた。

吉原の言葉の意味がわからずに、おれは首をかしげた。

「ねえ吉原」

「何」

「これって必ず2人でやらなきゃいけないの？この、図書当番って別に、そういうわけでもないと思うけど」

「じゃあどっちか1人でよくない？」

「交代制で？」

「え、交代制で？」

「お前、俺に一週間ずっとやらせるつもりだったのか？」

「いや、まあ、ええと、じゃあ、こうしよう。ええと、今日は何曜日だっけ」

「火曜」

「じゃあ、こうしよう。火曜日はしょうがないから、2人で出るとして、月・木と水・金に分けよう。で、吉原は月・木に当番に出る。で、おれは水・金に休む」

「お前それ火曜しか出て無いぞ」

「あ、ちくしょうバレた」

「ふざけんなよ」

おれと吉原がこんなことをくっちゃべっているのは、暇で暇で仕方がないからであり、暇で暇で仕方がないのは、図書当番の仕事が、ほぼ皆無に等しいからである。

図書当番の仕事、というのは、図書室の本の貸出し、及び返却、には、それなりの手続きが必要なのであって、その手続きの受付。これが、図書当番の仕事である。

しかしこの図書室、市立図書館並みの広さであるが、いや、利用者はたしかに多い。がしかし、こんなに利用者がいるにもかかわらず、この図書室の、貸出しシステム。返却日を忘れていても、親切に図書室の方からお知らせをしてくれる。予約制もアリ。という、非常

に便利なシステムを、この多くの図書室利用者たちは、いかなあ、有効利用しようとしないのである。

図書室利用者たちは、実際はあんまり面倒ではないのだが、本の貸出しシステムの手続きは面倒、年金をもらえるようになる手続き並みに面倒、と決めつけ、貸出しシステムを避け、図書室の一角には、ご丁寧に机と椅子が並んでいるものだから、その並ぶ席のどれかに座り、その場で本を読んでもしまう。

図書室利用者たちは、大抵それで済ませ、家でもこの本が読みてえわ、という考えには至らないのである。

したがって、この、図書当番の仕事は、暇で暇で仕方がない。

吉原なんて、ほらね、本読んでんじゃん。ね、だから1人でも十分なんだってば。てかむしろ、1人も必要無いんじゃないの？

「吉原あ、おれ帰りたい、おれ教室に帰りたいよ」

「帰しません」

「違うんだ吉原、ここじゃないんだよおれの居場所は」

「いいや、お前の居場所はここだぞ、神波」

吉原はにっこり笑った。

ううむ、やはり一筋縄ではいかぬか。

「ねえ吉原」

「何」

「なんか視線を感じない？」

「……………ああ」

ああ。

久々に聞いたぜ、吉原の口癖。

いや、久々に聞いたぜ、ってんなら、これ、別に吉原の口癖でもなんでもないんじゃないの。とおれは気付いた。

「うお、なんじゃありゃ」

図書室の入口に目をやると、女子生徒。しかも5人。あれ、6人？

「ねえ、あれって、吉原目当てなんじゃないの？」

「…………俺はそうでもないと思うが」

吉原は本から目を離さずに言った。
クールだ。

なんか少女マンガの主人公の憧れの人みたいな、なあんか、完璧な
んだよなあ、吉原って。

本当に、羨ましいことこの上ない。

女子生徒の一人と目があつたので、手を振ってみようかなと思った
が、いやしかしこれで彼女が吉原を見ているのだとしたらおれ、超
恥ずかしくね？と思慮深いおれは考え、とりあえず、ごまかせる程
度に、にこ、と彼女に笑いかけてみた。

すると、きゃあ、笑った、きゃあ、と彼女は唐突に叫び出し、え、
もしかしておれのせい？おれの笑顔の不気味さに彼女、発作を起こ
してしまったのかしら、と吉原に救いを求める視線を向けるが、吉
原はやはり本に熱中しているのである。まったくもう。

「ねえ吉原あ、どうしよう、おれのせいで一人の尊い正気があ」

「まあ、女の考えていることなんて、男にはわからんものだよ」

なんか吉原が難しげなことを言うので、おれは、そうなの？と聞き
返すが、薄情なる吉原は、もうだめである。完全無視である。

さてよ。

今の吉原にとって、群れる女子生徒たちのことで喚くおれなど眼中
にない。つまり、どういうことなのかというと、このノリで行けば
おれ、解放してもらえるかもしれないんじゃない？

「じゃあ吉原、おれもう教室に」

「こら」

やっぱだめですかそうですか。

「あの」

不意に降ってきた声に顔を上げると、カウンター越しに、一人の少
女が立っていた。

「はい？」

「えっと、本を、借りたいんですけど」

「え」

なんですと。

「じゃあカードかして」

珍しすぎる貸出しシステムの利用者に、おれが少なからず動揺している隣で、吉原は手慣れたように少女に指示した。

って、おれ、もしかしてこの、図書当番の仕事、つまり、本の貸出しの受付、の手順なるものを、知らないんじゃないの。

これはマズイよお、って、おれはすぐに吉原にそれを報告することにした。

「ねえねえ吉原」

「どうした？」

「あのさ、おれ、手順わかんないんだよねえ」

「何の」

「この、貸出しと、返却の」

「わかんないって……お前、本借りたこと無いの？」

「そういえば無いんだあ」

「よく図書室にいるの見てたから、てっきりそういうのわかってるんだと」

「や、おれ、図書室で読んじやうタイプなんだよね、家で読もうって気になれないっていうか」

「そうか。でも今の見てただろ」

「今のって？」

「貸出し」

「あ、さっきの女の子の？」

「そう」

「あのさ吉原」

「見てなかったんだな」

「うん、ごめん」

「まあ……いいさ」

「待って、がんばって思い出してシュミレーションしてみる」

「うん、シュミレーションな」

ええと、まず、利用者が、あの、本借りたいんですけど、と言う。
おれは、吉原のように、じゃあカードを、と言う。すると利用者は
おれにカードを差し出す。おれは傍らのコンピュータにカードをか
ざす。そしたら、ええと、何だ。

「とりあえずカードを洗って」

「待て待て待て待て待て」
む。

「何故洗う」

「汚れてたらいけないでしょ」

「洗ったら機械が読み取れなくなるだろ」

「そなの？じゃあなんでここに都合良く水道と洗剤があるのさ」

「これは手洗い用。そしてそれは洗剤ではなくハンドソープ」

「ええ？こんなところで手なんて洗わないでしょ」

「知らねえよそんなこと、この図書室設計した人に聞けよ」

「だよねえ、吉原、しがない図書委員だもんね」

「なんか無性にむかつくぞ」

「もういいよ、シュミレーションの続きね」

「だから、シュミレーションだって言ってるだろ、ばか」

「あつ、吉原は今おれの心を傷つけた」

「はいはいそうかよ。で、何がわからないんだ？」

「あぁつとね、カードかざすところまでいったよ」

「じゃあこのスタンプを本の最後のページ、ほら、紙が貼ってある
だろ、これに押す。この日付が本の返却日な」

「へー」

「本当にわかってるのか、お前？」

「大丈夫だろう、そんなにバカじゃないもん」

「そーですか」

「じゃあシュミレーションに戻ろう」

「ああ、もういいよ、シュミレーションでいいよもう」

「おっけえ、貸出し完了だぜ、イエーイ」

「……。そんじゃ、次は返却な」

「ええ、まだやんの？」

「返却もできなきゃ、明日お前一人でできないだろうが」

「え、明日おれ一人なの？」

「お前が言ったんだろ、水・金は神波の当番だって」

「まじで？」

といったかんじのやりとりが昼休み中続いた結果、おれは雰囲気をちゃんとふんいきと読むから偉い、そして吉原は天然である、という結論に至ったのだった。

玄関の扉を開ける。

そして閉める。

……。

……………。

これはやはりよくないんじゃないの。

「母さん!!」

おれはがぱつとりビングの扉を全開にし、叫んだ。

「言ったでしょ母さんっ、玄関の扉の開閉の音には敏感になりましたようううう……って、あれ、母さんは？」

「あつ、やつ、あああもうばかあポーション使っちゃったじゃんもお、ロビンにあげないといけないのにい」

「あいり、母さんは？」

「村長さんに頼まれて洞窟に葉草取りに行った」

「ふうん」

あいりの言ったことを訳すと、役員会か何かだろう。多分。

「あつ、言っとくけど、あいりもなんだからね？」

「う？なにがあ？」

「玄関の開閉音には敏感になりましたよ」

「それっておかーさんにもいったの？」

「うん、昨日言ってただろ」

「きのう？おにーちゃんそんなのいってなかったよお？」

「それはあいりが聞いてなかっただけです」

「えー、ぜえったいにいつてなかったよ、そんなビミョーなちゅうこくう」

「……まあ、いいけどさ。ちゃんと守ってよ？家族の平穏がかかってるんだから」

おれが言うと、あいりはぱたんとDSを閉じて、上目遣いにおれを

見た。

そんな目でおれを見るな。

可愛い。

「おにーちゃん」

「な……何デスカ」

「おなかすいた」

作ってあげよう。

こんなにかわいくお願いされてしまったら、老若男女どころか魍魎魍魎だって、何でも作ってあげよう、と思うに違いない。

「ええと、何が食べたい？」

「ぱふえ」

「それご飯じゃないだろ」

「じゅーぶんおなかいっぱいになるもん」

「幼稚園児みたいなわがままをいうんじゃない」

「いーもん、バスこどもりょーきんでのれるから」

「お前中学生だろ、ちゃんと大人料金払いなさい」

「ぶうー、ぜったいバレないのにい」

たしかに、あいの幼児体型なら、小学4年生くらいでも通用するかもしれない。多分身長140センチも無いし。いや、それは言い過ぎだろうか。

「あいり、身長何センチ？」

「んー？135くらいかな」

予想以下だった。

いつからだったか、あいの成長が止まったのは。

「あ、母さんちゃんと晩ごはん用意してくれてんじゃん」

食器棚の中の二人分のハンバーグ弁当を発見して、おれはあいを振り返った。

あいはソファにうつぶせて寝ていた。

「おーい……あいりちゃん」

返事が無い。ただの屍のようだ。じゃなくて、おやすみ三秒って、

のび太かよ。ん？のび太だっけ？いや違うな、絶対違う。のび太ならもっと早く寝れるはずだ。

「おれはのび太を信じている」

「だれがのび太？」

「うおっ、起きてた」

「おきてるよお」

あいりはごろん、と仰向けになり、両手を上げてぶらぶらと振った。それを見たおれは、それがあいりの

「どうか私が起き上がるお手伝いをしてくださいませんかお兄様」というメッセージだと瞬時に汲み取り、さっとあいりに手をさしのべた。

「んうーっ」

あいりが腹筋に力を入れた様子はまったく無かったが、あいりはすんなり起き上がった。軽い。

「あれ、この前違うゲームやってなかった？」

「あーアレ駄目つままない。やっぱ今の時代はコンタクトだよ」

「ふうん」

何故いきなりコンタクトレンズの話になったのかわからないまま、おれは適当に相づちを打った。

「おにーちゃん、なんできゅーにコンタクトレンズのハナシになったんだろうっておもってるでしょ」
バレた。

「まー、おにーちゃんに話したってコンタクトの面白さなんてわかんないだろうからいーよ」

諦められた。

「ねーおにーちゃんおなかすいたあ、はやくごはんー」

「あーご飯ね、うん、今準備するからね」

あいりに急かされて、おれは夕食の用意をしようと立ち上がって、

「おにーちゃん」

とあいりに呼び止められて振り向いた。

目があった。

あれ？

何か、変だ。

「おかえり」

にぼっ、とあいりは笑った。

ああ、

そっか。

やっぱりあれは、人を好きになる種、だったんだ。

あの種を食べたおれが好きになったのは、日野じゃなくて。

「あいり」

「なあに？」

「好きだ」

しゃがみこむと、目線の高さがいりとあった。

手を伸ばしてあいりに触れて。

「おれはあいりが好きだ」

言ったこともない言葉が、言うとも思ってた言葉が、まるで何度も練習したみたいに、すらすらとおれの口から出てきた。

「おれはあいりが好きだよ」

あいりのまんまるい瞳に、おれの顔が写って、それだけでなんとなく嬉しくて。

あいらがいつものように、嬉しそうににぱっと笑って。

「しってるよお、そんなこと」

人を好きになるって、こういうことなんだ。

別におれの心臓は、活動を活発化することなんてなかった。
鼓動はいつもの単調なリズムを刻んでいる。

ただ、

その音は、バカみたいに大きく頭に響いていて。

おれはあいらとキスをした。

ファーストキスだった。

青い空、白い雲。

うふふ。

うふふふ。

「そんじゃ、いってきます母さん！」

「行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

母さんに手を振って、おれはさわやかに家を出た。

うふふ。

うふふふ。

「よお、桜ん坊」

おれがにやけながら行こうとすると、不意に背後から声をかけられた。

さくらんぼ。

チェリー。

違う、違うよそれは。

おれはもうチェリーじゃないんだよ。っていうか、チェリーなんて呼ばせねえ。

と、そこまで考えて、いや実際はそこまでどころではなく、一発お見舞いしておれがただのチェリーではなくなったということを力の限りアピってやるぜ、まで考えたのだが、あれっ、皆は通常おれを、チェリー、と呼ぶのであって、桜ん坊、なんて漢字で呼ぶのは、絶対に、クラスメートではなく、というか、学校の誰かではないんじゃないの。ということにおれは気付いた。

で、考えられる可能性、今思いつく限りの可能性は3つ。

1, おれはパツと見さくらんぼ

2, 後ろの誰かは英語と日本語を間違えるような日本人失格

3, そもそも桜ん坊というのはおれのことではない

振り返った先にいたのは、4, お隣の家に一人で住む、お兄さんだ

った。

そういえば一人だけ、このお兄さんだけは、おれのことを、桜ん坊と呼ぶのだ。理由は多分、おれの名前から取って桜ん坊、であり、決して、チェリーボーイのチェリー、とかいう軽く下ネタっぽい理由ではないはずである。

「おはようございます、ええと、ジュンさん？」

「あーおいしい、リョウさんだ」

「あれ……すみません、いつも間違っちゃって」

「いいさ、名前ぐらい。それよりお前、何かいいことあったの？」
リョウさんに言われて、おれはつい、うふっ、と笑ってしまった。
いや、しょうがないよ、これは。いいことがあったってのは、事実なのだから。

「わっ、わかりますう？」

「何、すげえ嬉しそうじゃん。何があった？」

いつのまにかリョウさんは、おれと一緒に歩き始めていた。

リョウさんはまだ20代だというのに、無精髭のせいで10歳くらい老けて見える。いい人なんだから、ヒゲさえ剃ればモテるだろうに。もったいない。

「ふっふっふっ、聞きたいですか？」

「ん、いや、それほどじゃねえけど、言いたいなら聞け」

「じゃあ言います」

「おう」

おれは目一杯、体感的にはみのもんだなんて比じゃないくらいにためて、隣を歩くリョウさんに言った。

「チェリーを脱出しました」

「え」

うふふ。

驚いている。

リョウさんは驚いている。

「ってことはお前、まさか、童貞卒業？」

「あ、いえ、童貞はまだ卒業してませんけど」

否定すると、リヨウさんは安心するでもがっかりするでもなく、あつ、そうなの、と相づちを打った。

「ってことは、何？チェリー脱出っなのは」

「あのね、恋をね。したんですよ」

「ほーお」

「で、昨日、キス、しちゃいましたっ」

「ほーお」

きやあ、恥ずかしい、とおれが手で顔を覆うと、リヨウさんはぐしやぐしやおれの頭をなでくりまわし、そりゃよかったなあ、と祝福してくれた。いい人である、ホント。

「ほーかほーか、よかったなあ桜ん坊」

「はいっ」

おれが返事をする、とんじや俺あここで、とリヨウさんは片手を挙げた。それじゃあまた、とおれが返すと、ニカツとリヨウさんは笑った。

「おう、またな、桜ん坊」

リヨウさんが見えなくなるまで、おれは手を振り続けた。

「いーひとつ」

ぽつりと呟いて、おれはきびすをかえした。

宇垣がいた。

「うおっ、びっくりしたあ」

「な、なんだよ、その反応は。まじで気付いてなかったの？」

「気付くわけないだろお」

「どんだけ手エ振るのに集中してんだよッ」

言いながら宇垣は歩き出した。おれが追いつけるように、歩調をゆるめている。

「宇垣い」

「ん？」

「どうかしたの？」

「何が？」

何が？

その受け答えが、だよ。

「なんか、テンション低いなあと思って」

「そおか？いつもどおりだけど」

宇垣は苦笑した。

いつもどおり、なんて、日野が見ても、そんなわけが無い、と思うに決まっている。

けれど。

確かに、宇垣のテンションがものすごく高くなったのは、高校に入ってからのような気もする。中学のころはもっと普通の、むしろ落ち着いた雰囲気を持っていたような。

「なあチェリー」

「何？」

「お前さ、本っ当に、初恋、まだなの？」

う？

いや、いやいやいや、まだじゃないよ。もう、おれの初恋は、うふ、あいりに、うふふふ、やだもーどーしよ。

「ど……どうしたチェリー？」

「えっ？」

「超にやけてる」

「うひっ」

あっなんか変な声出ちゃった。

ん？

あれ？

そういえばおれと宇垣は、中学のころからの付き合いであり、おれは宇垣に、中学のころから、チェリー、と呼ばれていた。

でもチェリーって、あれ？チェリーボーイのチェリーでしたら、あれ？中学生でチェリーって、あれ？

「ねえ宇垣」

「んー？」

「なんでおれはチェリーなの？」

「はぁ？」

何を今更、と宇垣は言った。

「まあ、今さらっっちゃ今さらだけどさ、いいじゃん別に」

「悪いなんて一言も言っていないだろ」

「そっか」

「そうだよ」

うーむ……なんかやっぱり変だ。

宇垣はなんかこう、ひゃっほう、みたいな。んで、お前病院行けよ、っていう。そういうキャラが定着していたはずなのである。にもかかわらずのこのテンションの低さは、一体何なわけ？

いやでも中学のころはこんくらいが普通だったわけで、それを考えると、やはり今の学校での宇垣のテンションは、誰だよお前、というかんじなのだよな。

「へーんなのっ！！」

「はぁ？お前が変だよッ！」

「いやあ宇垣のほうが変わって！」

「いんや、チェリーのほうが俺の2.5倍は変だぞ」

「でも宇垣のほうが変わもん」

「ってか何だよこの会話は」

宇垣が笑うので、おれもつられて笑った。

「もういやだお前、なんか、チェリーと話していると、会話が逸れすぎるんだもんなあ」

「ええ？なんだっけえ？」

「お前本当に初恋まだなの？」

「その前に宇垣のテンションだよ」

「だから、これがデフォルトだって」

「じゃあなんで学校ではあんなにテンション高いのさ」

「え？そりゃあ」

宇垣は言葉に詰まって、

「チェリー……!……と、宇垣くんっ」

前方からの声に顔を上げ、ものすごく嬉しそうな顔をした。

「あッ、彩香さああああん!!」

気が付けば学校の前まで来ていた宇垣は、昇降口前で手を振る日野に、おお、いつものテンションで絶叫した。

「おはよお、二人とも! 珍しいね、二人が一緒に登校なんて」

「おはようございます彩香さん!! 今日もお美しゅうございますねッ」

「おはよー日野」

いつものあいさつを交わして、おれたちは仲良く教室に向かった。

そういえば、おれがチェリーになった理由、聞いてないや。

どうして話が逸れたのだろう。

忘れちゃった。

吉原が怒っている。

けれどおれは知らなかったのだ。本当に。第一、吉原だって何も言
ってなかったじゃないか。

放課後も図書当番の仕事があるなんて。

「でも放課後も図書室が開いているってことはお前でも知ってただ
ろう？」

「そりゃ知ってたけどさ」

「どうして当番のことには頭が回らないんだよ」

「どうして当番のことにまで頭が回るのさ」

あつ、反論なんてやめとけばよかった吉原がすげえ殴り飛ばしてや
りたいって顔してる。

「違うよ吉原、これは言い訳じゃないよ。理由なんだよ。言い訳と
理由は違うでしょ？」

「この場合なら言い訳と理由は類義語になるんだよ」

そんなの理不尽だ。知らなかったんだからしょうがないじゃないか。

「でも吉原あ」

「何だ、まだ口答えるつもりか？ あん？」

「うっ……」

だんだん吉原の口が悪くなっている気がするのはおれだけで
はないはずである。

「おっ、おれね、バス通なわけよ」

「当番で遅くなったらバスが無い？」

「そうそうそうそうそう」

「歩いて帰れ」

「うわっ、なにこいつ鬼ですか悪魔ですか」

「おれは鬼でも悪魔でもなかっただの図書委員だ。そしてお前も図書
委員だ。図書委員としての仕事をする義務がある。意味が解るな？」

「…………つまり、おれは夏休みまでに学級文庫の本を図書室に返さなければならぬ」

「そう、夏休み中に本の整備やら入れ替えやらをせにやらんからな。…………って違うだろ！なんで今学級文庫の話になるんだよ！？」

吉原のノリツツコミだった。

期待以上だった。

「困ったことにこれは癖になりそうな気持ち良さだ」

「何の話だボケ」

はうあつ、ついに吉原はおれを罵倒するようになってしまった。吉原は乙女たちが憧れるさわやかジャニーズ系のクールガイだったはずなのに。

「一体何があったんだ吉原……一体何が吉原をこんな鬼キャラに……」

「てめえだろうが！」

おれらしい。

「まあまあ吉原、もういいじゃん過ぎたことは」

「お前が言うな」

「日野だってそう思うでしょ？」

「えっ、あ、あたし？」

少し離れた場所にいる日野に聞くと、日野は困ったように吉原を見た。唐突にふられて戸惑いを隠しきれないらしい。吉原は、関係の無い人を巻き込むんじゃない、とおれを叱った。

「っていうかチェリー、オレにや聞かねえのな」

「宇垣は頼りにならないからなあ」

「ああっ、ひどい」

「お前、旧知の相手には本当に強いんだな……」

本当のことを言っただけなのに、吉原は呆れたようにおれに言った。

「…………まあ、過ぎたことをぐちぐち言っても仕方がないのは確かだが」

「なあんだ吉原、ちゃんとわかってんじゃん」

「なんかお前いちいち腹立つな」

「えへ」

「えへじゃねえよ。今日はお前が一人で当番なんだから、サボるなよ」

よく言う、自分だって授業サボってたくせに。

「でもさあ吉原……」

「あああああああああ！！」

……………。

なんだ今の叫び声は。おれが反論しかけていたというのに。

吉原の背後から、一人の女子生徒が、おれたちのうちの誰かを指差しながら、こちらに駆け寄ってきた。

「みいつけたっ、よっしい！」

宇垣並みのテンションである。

何者？

「も……望月」

「おはろー」

吉原が望月と呼んだ女子生徒は、吉原にピースして、含みのありげな笑顔を見せた。

ほんとに誰？

「吉原のカノジョ？」

「はあ？冗談じゃないな。単なるクラスメートだ」

吉原に耳打ちすると、全力で否定された。吉原は望月のことがあまり好きではないらしい。

そんなやりとりが望月には聞こえたらしく、望月はけらけらと笑った。

「ナイナイナイ、安心してあたしよっしいよりもチェリー派だからあ」

何の派閥だよ。

「なんでヨッシーとおれを比べるのさ、次元が違うじゃん……いくらなんでもひどすぎる」

「言うと思った」

吉原は、だめだこいつ、と言わんばかりにため息をついた。

「あはは、チェリーおもしろー！噂通りの天然くんだねっ！」

天然くんと言われてしまった。

悪かったな。

悪かったな天然記念物で。

悪かったな特別天然記念物で！

悪かったな絶滅危惧種で！！

「違うおれはもう絶滅危惧種じゃないんだ、絶滅危惧種は卒業したんだあああ！！」

「え？なにそれ、どゆこと？」

「……………どうしたんだ神波？」

望月は首をかしげ、吉原はおれの様子を伺うように、うつむくおれの顔をのぞきこんだ。

そうだった、おれはもう絶滅危惧種じゃないんだ。
ん？

いや、そもそも絶滅危惧種って何だよ。別におれは動物なんかじゃ、パンダとかトキとかメダカじゃないんだよ。おれは人間なんだよ。

「ねえ吉原、おれはなんで絶滅危惧種なの？」

「はあ？」

吉原は間の抜けた声を上げた。

「チェリーがキスも初恋もまだだからじゃない？」

「んー、そこはむつかしいトコでさあ」

日野の答えに、望月が付け足した。望月は結構なおしゃべりらしい。秘密をすぐにバラすタイプだろう。気を付けなきゃ。

「キスしたことない男子高校生なんて、そこいらにいっぱいいるよね。初恋もまだなヤツだって、珍しくはあっても、稀少価値はそんなに高くない。だけどねチェリー、そんな男どもとキミとの間には、決定的な違いが、越えられない壁があるの。何だかわかる？」

なんか熱弁し出した望月に、おれは首をかしげてみた。望月はにや

り、と不敵な笑みを浮かべた。

「ルックスよ」

……。

「その顔の良さでその純情さ。その二つがあってチェリーの価値があり、その二つが、キミが絶滅危惧種である所以なワケ」

……………。

「はいチェリー、そんな露骨に何言ってるんだコイツってカオしなあい」

「あ、うん」

「いやそこは否定しようぜ？」

宇垣が苦笑した。

宇垣に苦笑された。

よりによって宇垣に苦笑された。

「チェリー、あんた自覚無いみたいだけど、可愛いんだよ」

それは褒め言葉なのだろうか。

と迷うと同時におれは、男相手に可愛いなどという形容詞を使う望月の人格を疑った。

可愛いなんて言われても。

「あんまし嬉しくないし……」

「そりゃそうだわな」

吉原が同調してくれた。

「あ、もしかして吉原も可愛いって言われたことが」

「無い」

無かった。

でも考えてみると、おれが可愛いのであれば、もっと、周囲の大人たちに、可愛がられてもいいんじゃないの？

あのあいを狙うしろじじいだって、おれなんか見向きもしなかったじゃないか。それどころかあれは絶対に、おれを避けていた。なるべくおれと関わりあいにならずにすむ方法を常時考えていたに違いない。

「ねえ、やっぱおれは可愛くないんだと思うよ。っていか可愛げがないんだよ。ねえ吉原もそう思うでしょ？」

「……可愛げがないというのは同感だな」

「だあよねっ」

おれが笑ってみせると、吉原はおれを見下ろして、ため息をついた。
「この学校にはチェリーファンが多いっての、知ってる？」

望月は再び口を開いた。こいつ絶対にチェリー派じゃないぞ。なんか企んでるよ、絶対おれを貶めようと企んでるよ。そういう顔してる。

「…………いやいやいや、ファンって」

「ああ、多いな」

「ええ!？」

吉原まで何を。

「あのさチェリー」

おれの背後から、宇垣が口を挟んだ。

「世界一可愛い人って、誰だと思う？」

「あいり」

「うん、そう言うよなお前は」

「宇垣くん、あいりって……？」

日野に質問されて、宇垣はきらつきらと目を輝かせ、チェリーの妹ですッ、と元良く答えた。

「……神波、お前、シスコンだったのか」

違うおれはシスコンじゃない。シスコンっていうのは妹として、もしくは姉として相手を好きなのがシスコンなのであり、だからおれは、シスコンじゃない。

「あのなチェリー、お前はあいりちゃんの兄貴だよな。血を分けた兄貴だ」

……………。

そうなのだ。

おれは、あいりの兄なのだ。

血のつながった、兄妹だ。

「兄妹ってさ、少なからず顔が似るだろ？」

「でもあいろいは母さん似だ」

「お前、自分が親父さん似だと思ってるの？」

「え、違うの？」

「どう見たってお袋さん似だろ！」

そうだったんだ…………。

でもやっぱり可愛いって言われることに喜びは感じないよなあ。

「そっか、おれって可愛いんだ」

「チェリー…………本当に知らなかったの…………？」

日野が目を丸くしている。

ううむ。

じゃあなんでおれは可愛がられずに育ったのだろう。

あいろいが可愛すぎて、みんなそっちに目が行くのかもしれない。うん、そう考えると納得がいく。

「吉原、おれ可愛いんだって」

「…………俺6組に帰るわ」

吉原の声には、呆れたような色が混じっていた。

「あつ、吉原…………」

おれの声が聞こえなかったのか、吉原はすたすたと行ってしまった。聞きたいことがあったのに。

時計を見ると、もう始業時間が迫っている。望月はいつの間にか消えていて、教室にはクラスメートたちが登校していた。

また次に、吉原に会ったら。

「きょうだい」

誰にも聞かれないように呟いてみた。

兄妹。

あにいうと。

「やっぱり…………なあ」

倫理的に…………問題が、ある、よ、なあ。

そんなの。

「おれにだって、わかるよ」
けれど。

「おれは……あირりが好き、だ」
昨日は、自信を持って言えたんだ。
言えたんだよ。

「……………」

「……………」

「……………なあ」

「はい？」

「えっと……………本、借りたいんですけど？」

「あ、はい、それじゃあカードを」

「いやもう出してんだろ」

「あっ、そうですね、ええと、なんだっけ」

「……………なああんた、大丈夫か？」

そう心配する、おそらく上級生であろうお兄さんを、おれは見上げた。

「大丈夫って？」

「いや……………なんか、見てるこっちが不安に……………ってちよい待て少年！」

「？」

「あんたは一体何をしようとしているんだ？」

カードを洗おうとしているおれの手首をがしっと掴み、お兄さんはひきつった笑みを見せた。この人は何を恐れているのだろう。

「いや、普通に洗おうと」

「いやいや洗うことはちっとも普通じゃないと俺は思いますか？」

「へ？」

「何故洗う」

「あ」

思い出した。

「そのセリフ吉原も言っていました！」

洗ったら機械が読み取れなくなっちゃってよくないんだ。ええと、じゃあどうするんだっけ、カードを……………カードを？洗っ……………ちゃ

ダメだし、もうなんでこんなところに水道と洗剤が、まったくもって紛らわしいことこの上ない、で、カードを、ええと、うんと、う
あう？

「おいおい大丈夫かよマジで」

「大丈夫じゃないよ吉原助けて……………」

「あー、やっぱいいよ、俺自分でやっから」

「いやいやいやいやこれは図書当番の仕事なのでそんな！」

「いやいいよ！てか俺早くしないとまだ飯食ってねえんだよ、食いつばぐれんの！」

「あ、や、でも、まっ、ごめ、ごめんなさいおれがんばるから、もっかいやらしてください！！！」

「いやでもあんたわかんないんだろ！？」

「にやっ、うあ、あの、その」

「いーよ、大丈夫だから」

そう言ってお兄さんはおれを無理矢理座らせ、カードをひょいとコンピュータにかざした。

おお、そうだ。あとスタンプを押して、貸出し完了で。

お兄さんが、おれの思った通りに動いたので、おれは満足して、ありがとうございましたあ、と頭を下げた。

「まあ……暇なのはわかるけどさ、俺も一応図書委員だったし……とりあえず頑張れよ、少年」

お兄さんはおれの肩をポンと叩いて、本を持って行ってしまった。

「うう……また失敗した……」

これで三回目だ。

一回目は借りようとしていた知らない男子生徒を何故か怒らせてしまい、二回目は女子生徒を呆れさせてしまった。だめだなあおれ。やっぱだめなんだよおれは。

と、おれが段々ネガティブになりかけていると、図書室の入口で固まっている、女子生徒の群れが目に入った。
あれ？

あの人たちって、吉原目当てなんじゃないの？

おれが首をかしげると、女子生徒たちが、きゃあ、と喚いた。そういえば、おれは、可愛いのである。

吉原は昨日、吉原目当てなんじゃないの、とおれが聞いたら、そうでもないと思う、みたいなことを言っていたけれど、もしかしてそれって、あの女子生徒たちのお目当ては、神波なんじゃねえの、という意味だったのか？

おれは女子生徒たちに向かって、恐る恐る、小さく、ちいさあく、手を振ってみた。

振り返された。

にこ、と笑って振ってみた。

満面の笑顔で振り返された。

にっ、と笑って振ってみた。

ものすごい笑顔で両手を振られた。

おお。

おおおおおおおお。

もしかしておれ、もしかなくってもおれ、モテてるんじゃないの？

「うひひっ」

あっなんか変な声出ちゃった。

……………いや、だめだ。

だめだだめだだめだだめだだめだだめだ。

おれにはあいらがいるのだ。

「そおだよおれにゃあっ、あい……………」

……………あいら。

あいらは。

「……………おれの、妹なんだ」

あいらは、おれの、妹なんだよ。

……………。

やめよう、あいらのことを考えるのは。なんか……………暗くなるから。

「あの」

「うおっ!？」

がたたん、とイスが鳴いた。見上げると、入口でたむろっていた女子生徒たちのうちの一人が、カウンター越しにおれを見下ろしていた。

「だ……大丈夫ですかっ!？」

イスからずり落ちたおれに、女子生徒は手を差しのべてくれた。おれは、ありがと、と言いながら彼女の手を取ると、ひゃっ、と彼女は手を引っ込めやがった。おれは当然しりもちについて、つい彼女を睨んだ。

「ご……ごめんなさい……………」

「うー……………」

やばい、おれちょっと涙目になってる。

「な、…………んの手でございましょうかあ？」

半ば投げやりにおれが聞くと、おそらく一年生であろう彼女は、本当に申し訳なさそうに言った。

「…………えと、本を」

だよねえ。

「…………じゃあ、カードを……………」

「返しに来ました」

「あう」

このタイミングで返却ですと!？

返却の手順なんて教えてもらったつけ、あでもなんか聞いた気もするぞ、あでも忘れた。ごめん吉原。ええと。ええと返却は、なんだ、どうすりゃいいんだ、うぐぐ、あっ、洗…………いやダメダメ、洗ったら機械が読み取れなくなるのだ。あぶねえあぶねえ。

「困っておられるようですね、お兄さん？」

「う？」

背後からかけられた声に、おれが見上げると、にやり、と、望月が不敵に笑った。

「もっ…………もちづきいいい」

「どうどうどう、大丈夫だからねえ、あーほらあ泣かないのっ、うんうん可愛いやつめ」

助っ人の登場に、おれは脱力してその場にしゃがみこんでしまった。あろうことか、望月が女神に見えてしまったのである。

この時はまだ、おれの頭をなでくりまわす望月を、いい人だと思っていたから。

「ういす、これでおっけ」

望月は女子生徒にカードを返して、おれの頭をよしよしとなでた。まるで犬にでもするみたいに。

「返却の手順はわかったかなあ？」

「はいっ」

「んー、よいお返事です」

むう、望月のペースに呑まれている。

「ねえ、吉原は？」

「よっしい？」

あれ、よっしいって、吉原のことだったのか？

「なあにチェリー、よっしいに会いたいの？」

「会いたいつていうか、聞きたいことがあって」

「ふうん」

望月は相づちを打って、含みのありげな笑みを見せた。

本当は含みなんて無くて、普通に笑っているだけなのかもしれないな、とおれは少し反省することにした。

やっぱ人を見た目で判断してはいけないよな。

「つていうかさ、おれ、あんまし図書室で望月を見たことないんだけど、なんで来たの？」

「えー？そんなん、チェリーに会いに来たに決まってんじゃん！」

「え、おれえ？」

「そうそっ」

望月はにつこり笑った。昨日同じ席で、吉原が笑ったのに似た笑いだった。

「そういえば望月って、吉原のカノジョじゃないの？」

おれは、吉原に力いっぱい否定された質問を、望月にもしてみた。

「だあから、違うってばあ」

羽のように軽く否定された。

「言ってんじゃん、あたしはチェリー派なんだよっ？」

短い髪を揺らして、望月はいたずらっぽく笑った。

だから、その派閥が何なのかわからないんだよ。

「でもなんか吉原と仲良さそうだったけど」

「んーん、全然だよ。ただおんなじ図書委員なだけ」

「え」

望月は図書委員だったのか！？

どおりでなんか見たことある顔だと思ったんだよ、そっかあ、6組の女子の図書委員は、望月だったのかあ。

「7組の女子の図書委員は安住だよ！」

「え？ いや、麻生ちゃんだよ」

ありや。

間違えた。

「麻生ちゃんだよね、麻生ちゃん」

「そだよん」

どうにかしなきゃな、この記憶力。

「じゃあさ望月」

「なあに？」

「女子の図書委員はさ、図書当番やなくていいの？」

「ああ、それはあ」

望月は爽やかな笑顔のまま、図書室の奥を指差した。

「女子は女子でお仕事があるの」

望月が指差した先には、

麻生ちゃんがいた。

「あ？ ……あれえ、麻生ちゃん、いたの？」

そういえば麻生をちゃん付けしたのは初めてかもしれな。

「……………ずっと。」

麻生の小さな声が、かろうじておれの耳に届いた。

麻生の声で届くんなら、おれの声は向こうに丸聞こえですか？

「やっべ」

本人の前で名前間違えるとか最悪だ。

もう嫌だ。人の名前間違えるし最近はいくらか前から今まで。だし母さんのへそくりは無かったし妹を好きになるし。何やってんだおれ。人間やめちまえ。

そうだ、人間なんてやめて猫になろう。

猫になってあいりに拾ってもらって可愛がられる幸せなセカンドライフを楽しもういや無理だ。句点すら挟めないほどに無理だ。

あいりに拾われて、幸せなセカンドライフなんて送れるはずがない。あいりに拾われてしまったらやばい。まじやばい。人生終わる。ん、猫なんだからにゃん生か？まあどっちでもいいけど。

あいりなんか拾われてしまったら、半殺しどころか四分の三殺しになるまで玩具にされて、挙句今朝のDSみたいに飽きられて壁に叩きつけられ粉々になってしまいうに違う。

そういえばあいり、バラバラになったDSの部品の一部で懐かしのゲームボーイ型に組み立て直してポケモンやってたけどあれってちゃんと遊べていたのだろうか。タッチペンで何やらバシバシしてたけど、ポケモンいじめたり、四分の三殺しになるまで玩具にしたりしていなかっただろうか。

あいりの可愛いポケモンたちが心配になってきた。

「……チェリー？」

「んあっ!？」

びびびびびびつくりしたあ。

「耳元で囁くなよっ!!」

「ふーってしないでいいじゃん」

ふーなんてされたら気絶しそうである。

「……あれ？」

なんかおれ、超どきどきしてる。
むう。

あいりを好きになる前だったら、これが恋だとかって勘違いしてい

たかもしれない。

「大丈夫？」

「あついや大丈夫じゃないよあいのポケモンたちが！！おれアドバンスになってからはポケモンやってなくて今何匹まで増えたのか知らないんだけどとにかくあいを止めないと可愛いポケモンたちがあああ」

「チェリー、落ち着きなさい」

望月の言葉に、おれははっとした。

「しまった……………気を付けていたのに」

おれってばまた現実逃避を。

「……………ああ！」

望月が何やら納得したように頷いた。

「これが世に言うチェリーの宇宙交信ね！！」

……………どうやらおれの現実逃避は宇宙と交信するためのものらしい。

「なるほどねー、ああそうなんだあ！」

「え、自己完結ですか？」

「お前が言うか？」

おお、この声は。そしてツツコミは。

「あつれえよっしい、今日はチェリーが当番なんじゃなかったの？」
望月は妙に嬉しそうな顔で言った。嬉しそうにというか、愉しそうである。

「……………望月が図書室に行ったと聞いて、神波が心配になってな。
来てみたんだよ」

「ご心配なく、あたしゃ可愛いコには優しいのよっ」

「神波、精神的に無事か？」

「もーまんたい」

「ならいい」

吉原にはつつこまれなかったけど、言ってしまったから、モウマンタイは古かったなあ、と思った。

「ちよつと吉原くうん、あたしのコト微妙に勘違いしてない？あた

し本当はかなり優しい人なんですけど」

「何しに來たんだお前？」

おお、完全スルー！

「仕事しに來たの！毎日麻生ちゃんにまかせっきりじゃかわいいそうだしね」

あつ、じゃあおれに会いにきたってのは嘘だったのか！！

「そのわりには麻生と違って暇そうだな」

「いやあそれは違ってね、チェリーに半泣きで助けを求められちゃったからさ。あんなカオで、おねがい助けてっ、なんて言われちゃあ、老若男女どころか魑魅魍魎だって、全力で助けてあげようって思わざるをえないだろうなあ」

ん？どっかで聞いたようなフレーズ。
まあいいか。

「あつ、それより聞いてよよっしい！チェリーってば宇宙交信のときさあ、キス待ちみたいなカオすんの！！超かわいい」

キス待ち顔ってどういう顔だよ。

「まあ、それは、見てたけど」

「キスしたくなったでしょ」

「なるか」

「あれ、ならない？」

「なりません」

「あちゃあ、あたしだけかつ」

「……お前……」

「まあ？彼はみんなのチェリーですし？ここで初Kiss奪っちゃダメでしょと思って抑えましたがれど？」

「ハイハイ良くできました」

「なんかさ」

おれが口を挟むと、二人は同時におれを見た。

なんか、注目されると照れるなあ。

「やっぱ二人、仲良いよ。ただ同じ委員ってだけって感じじゃない

感じ」

ん、なんか感じて使いすぎた感じがしなくもない感じ。

「いや、恋人はこんな会話しないだろ」

「そうそ、よっしいとあたしが恋人だったらよっしいとチェリーも恋人だよ」

「え、そうなの？」

「そうなのっていうか、よっしいとチェリーの会話もこんなもんなんじゃないの？」

「……そうかも？」

「なんでお前、俺と神波の会話の内容知ってるんだ？」

「え？ 陰から密やかに二人を見ていたのさ」

「ストーカーかお前は」

「……やっぱおれと吉原はこんな会話しないぞ。」

「あ、そういえばチェリー、よっしいに聞きたいことがあるんじゃないの？」

「……………あ」

おれが見上げると、すぐに吉原と目が合った。

望月の前であいりのことを話すのもどうかと思い、吉原にテレパシーを送っていると、奇跡的に吉原は受信してくれたようで、あっち行っか、と遠くを指差した。

「うん……ごめんね、望月、当番……」

「おっけおっけまかしといて」

「あっ、ありがと望月!!」

「うん、ごゆっくり」

やっぱり望月はいい人だ。

おれはそう思いながら、吉原と飲食スペースに向かった。

「つまりそれは」

吉原は凄まじくざつくばらんに、おれの悩みを要約した。

「近親相姦ってことか？」

「やっ、それは違って、まだやってなくて、キスしただけでね」

「ああ、そう」

「うん」

吉原の表情を伺うが、おれに吉原の感情は読めなかった。

「ねえ、おれ、どうすればいいんだろ」

「どうすればって言われても……」

吉原の言葉には、戸惑いなど微塵も含まれてはいなかった。むしろ他人事である。

「俺には妹も姉もないから、そんなことを考えたことも無いしな」
「……………」

なんだよ。

なんだよ友達がこんなに悩んでいるというのにその態度は。せめてもう少しさあ、フリだけでもさあ、もう少し考えてくれたっていいじゃない。そんなんじゃ嫌われちゃうぞ。なんて。

吉原がそんなの気にするわけないか。

「その、妹……あいいりだっけ？あいいりはさ、どんなかんじなわけ？」

「どんなかんじって？」

「反応。したんだろ、キス」

「うんうん」

「そんなときの反応は？」

「反応は、……別に」

「別について……」

「だって、別に、普通だったよ」

「まったくの普通？」

「まったくの普通。普通に、お腹空いたって言うから二人でハンバーグ弁当を食べました」

「ハンバーグ弁当？」

「ジャスコのやつ」

「ああ、ジャスコのは安いよな」

「うん、安くて美味い」

「で、あいりはお前に対してどうなの」

「どうって？」

「ええと、あいりがお前を、好きであるか否か」

「わ……っかんない」

「わかんない!？」

「わかんないよ。あいりが考えてることなんて、あいりにしかわかんないよ」

「じゃあお前、一方的に好きだからキスしたの？」

「でも、あいりは嫌がらなかったよ？」

「そう……だとしても」

吉原は、さっきとうってかわって、慌てるようにおれに言った。どうしたんだろう。

「拒否できなかったとか、そういうので、嫌がれなかったんだとしたら、どうすんだよ」

「……は？」

「拒否……できなかった？」

そんなの……あいりに限って。

「ありえないよ、それは」

眉をひそめる吉原に、言われた言葉を理解出来ぬまま、おれはぼんやりと否定した。

「ありえないよ」

あいりは嫌ならはつきりイヤって言う子だ。腕は細いけど、抵抗するくらい力もある。

「どうしてありえないなんて言い切れる？」

吉原はおれの肩を掴み、顔を覗きこんだ。

そうされてやっと、おれは自分がうつむいていることに気付いた。

「どう……しよう」

どうしよう。

どうしようどうしようどうしよう。

「あ……あいに」

視界がぼやける。吉原の顔が歪む。おれの声が震えている。声を。

「あいに、嫌われたら、どう、どうしよう」

やっと、声を絞りだした。

絞りだせた。

「あいに……嫌われたら、おれ、どう……どうし、よ」

「落ちて神波、……ちよつ、おい泣くなよばか、俺が泣かせたみたいだろ！」

吉原は困り果てたように、おれの頬を強くこすった。

「よっ……吉原に泣かされたんだもん」

「……ほう、言うじゃないか」

「うそだよ、怒るなよう」

「……」

おれの髪をぐしゃぐしゃにして、吉原は困ったように言った。

「まあ、その……ごめん、神波を責めてるわけじゃないんだけど」
責めてるじゃん。

「俺はあいがどういう子なのか知らないけどさ、多分お前のことだから、……お前のことだからって言うほど俺はお前を知ってるわけでもないんだけど」

そういえば、おれと吉原がこんなに話すようになったのは、つい昨日のことである。

なんでかおれも、吉原のことを何でも知っているような気がしていた。

どうしてだろう。

まるで吉原が、昔からの友達みたいに思える。

「無理矢理キスしたってわけでもないんだろ？」

「うっ、うん、多分」

「多分ってなんだよ多分って……」

「あირიは、おれのこと好きって言ったことない、から」

「まあ、普通は言わないかな」

普通は。

やっぱりおれは、普通じゃないのか？

「ねえ、吉原」

おれは吉原に聞いた。

一番聞きたかったこと。

「ヘン、かな」

吉原が目を丸くした。

「妹を好きになるなんて、やっぱり、ヘンかな？」

不安になって。

吉原にさっき、シスコンだったのかって言われて、不安になって。だから聞いてみたかった。

「変じゃないよ」

吉原は笑った。

初めて会った時みたいに。

大抵の乙女は恋に落ちるのであろう、綺麗な笑顔で。

吉原は答えてくれた。

「少なくとも俺は、変じゃないと思う」

応えて、くれた。

「ほっ、本当？」

うなづく吉原に、おれは心底安心した。

おれはあირიが好きだ。

好きで、いいんだ。

今日は曇りだ。

天気予報では、お日さまを雲が隠しているマークが表示されていたけれど、おれはやはり、この雲の量は、もう曇りだと言ってしまってもいいんじゃないの、と思う。

「最近晴れ続きだったのになあ」

独り言は、独りで出てくるから独り言と呼ぶのだろう。気が付けばおれは、さも曇りは嫌だと言うようにつぶやいていた。別に晴れでも雨でもどっちでもいいんだけど。

しかもおれは、特に空を見るでもなく、黒板に文字を列ねる教師の背中に向かって、最近晴れ続きだったのになあ、などと呟いてしまったのだから、きっと周囲の人々から見れば、それはもう不可思議な人間に見えたのだろう。目の前の教師は、何だコイツ、という顔でおれを見つめていた。

「どうしたんだ神波？」

数学。

数学は面白い。

数学者は何か気付くと、いちいちその法則に名前を付ける。

友愛数とか、220と284はもしかすると特に仲が良いわけでもないかもしれないのに、勝手に友愛の情で結びつけて。

「か……神波？」

「別に、ただ、曇りだなあって」

「あの……今は数学の時間だからな、天気は、今はどうでもいいんだぞ？」

「そうでもないですよ、そろそろ雨が降らないと、水不足でトイレが流れなくなりますから」

「え、でも今お前、曇りを嘆いていなかったか？」

「そうでしたっけ」

「空がどんよりだと心もどんより、というかんじの言いぐさだった気がするが」

「先生結構ロマンチストですね」

「そ……そうか？」

つまんない。

数学なのに、つまんない。

なんでかわからないけど、とにかくつまんない。

早く帰りたい。

早く帰って、あいりに会いたい。

「まだ5限かあ……」

そして放課後は図書当番。

「……まあ、か、神波は聞いていないふりをして、しっかり聞いているからな……」

何をだよ。

あ、授業か。

べつに、聞いてないふりしてるつもりはないんだけど。

「……せんせえ」

「なっ、なんだ神波？」

「お腹痛いんで帰らせてください」

「何!？」

数学教師はオーバーリアクションをして、保健室に行くか?と優しく言った。

だから、帰りたいんだってば。

「チェリー、どうせサボりだろお？」

後ろの方から、男子生徒の声が聞こえた。誰だよおれの心を読むやつは。

そういえばあいりは、いつもおれの心を読むよなあ。でもだからって何かしてくれるわけでもないんだけど。

きっとあいのそういうところを、おれは好きになったんだと思う。おれは欲しいものをもらえずに育ったから、そんな簡単に欲しいも

のをくれる人を好きにはならないのだろう。

それに対してあいりは、欲しいものを遠慮なく欲しがると、欲しくないものも欲しがると。

あいりは、

あいりは、欲しいものをすべてもらって育ってきた。

あいりはどうなんだろう。

欲しいものをもらえることに、喜びを感じるのだろうか。

そもそもあいりが言う欲しいは、本当に、欲しい、という意味なのだろうか。

あいりの欲しいものって、何だ？

「あいり……」

おれはあいりが好きだ。

何度も思った。言葉にもした。

けれどあいりがおれに、好き、だなんて言ったことは、一度も無い。

あいりはおれがいなくてだめなんだ、と、思っていたのに。

あいりはおれがいなくても、大丈夫なのかなあ？

あいりはおれのこと、好きじゃないの、かなあ？

「ど、どうしたんだ神波？あいりって……」

「別にどうもしません、ちょっと、保健室……行ってきます」

そう言い残して、おれは教室を出た。

教師を含む他の人の、心配やら何やらの声は無視して。

おれは、あいりに必要とされていないとしたら、何のために生きればいいのか。

おれなんか死んだって、誰も悲しまないような気さえする。

「……だめだ」

マイナス思考はだめだ。

味方なら吉原がいるじゃないか。

……………。

味方、だよな？

変じゃないと思うって言うてくれたし。

いやでもおれがあいりについてこんなにもいいじ考えているのは、吉原が、あいりはお前を好きじゃないんじゃないの、という意味の脅しをしたからなのであって、たとえばもしあいりがおれのことを好きであるとして、それで吉原があんな大袈裟に言っただとしたら、いたずらにおれを脅かしたとしてこれはもう訴えるべきなのではないの？

ああでもそうしたら何故そんなことをするのかという疑問が生まれるよな。

なんでだろう。

はっ、まさか吉原………！！

「吉原もあいりのことが好きなのかあああああ！！？」
なんということだ！！

吉原は味方だと思っていたのに、油断させておれに近付きあいりをおれから奪おうという、そういう魂胆か！？

なんたる非道、なんたる不義、なんたる無法者であろうか、吉原……ええと、下の名前は知らねえや、吉原めえ！！

「ちくしょう、あの笑顔に騙されかけたぜ理系の吉原！」
っていうかもう8割騙されてたんだけど。

「吉原はどこだあ！？」

静かな廊下で叫んだ後、しばらく歩いて思い当たり、おれは降りかけていた階段を再び昇った。

早足で渡り廊下を渡って、着いた先に、

図書室に、吉原はいなかった。

「あ……あれ？」

いると思ったのに。

「あ、そっか」

考えてみれば、今は授業中である。

たしか昨日は吉原もサボっていたのだけど、そういつもいつも吉原

がサボるとも限らないし、サボるとしても、おれとぴったりタイミングが合うとも限らない。

「あちゃあ」

ぺちん、とおれは額を叩いて、誰もいない図書室を見回した。窓が開いている。その窓から校庭を覗くと、体育、サッカー。

「……………あれ、いた」

5組対6組らしき試合で、吉原が丁度シュートを決めたところだった。

……………うわあ。

「超かっきー……」

どうして人間というものは、こんなにも不平等に作られているのだろう。

おれなんかシュート決めたことないぞ。

いっつもアシストばかりで、吉原みたいに黄色い声援なんて浴びたことない。

女子生徒たちはアシストの偉大さを解ってはくれないんだなあ、シュートを決めるヤツにばかり恍惚の視線を送る。

……………

やっぱり攻めの姿勢って大事だよなあ。

次の体育では頑張ってシュート決めよ。

というか次の体育はサボらずに出よう。

あ。

吉原と目が合った。

黄色い声援を送り続ける女子生徒たちには目もくれず、吉原はおれに向かって、あの綺麗な笑みを見せた。

吉原……一体今までにその笑顔で、何人の少女を……いや、おれも騙されかけたのだ、きつと少女だけではない。それこそ老若男女どころか魑魅魍魎さえも、騙してきたのだろう。

だがしかし格好いい。

まったくもって、この世は不平等である。

吉原に笑顔を返すのはなんとなくためらわれ、おれはずるずるとその場にしゃがみこんだ。

吉原の、何だあいつ、というような表情に、おれの顔は火を噴きそうだった。

明日の体育は高跳びらしい。

せつかくサッカーをやる気になったというのに。

これではモチベーションが根こそぎ奪われてしまうじゃないか。

「少なくとも今週はサッカー無いってことかあ」

ため息をつきながらおれは、放課後の図書当番に向かっていた。

今度カラオケに行こうよ、と日野に誘われた。

当然のごとく、宇垣も一緒だ。

おれは三人で十分だったが、日野は、人数が多い方が楽しいからと、おれに、吉原も誘うように言ったのだ。

吉原がカラオケなんて、どんな歌をチョイスするのか想像もつかないが、その分、吉原の歌を聞いてみたい気がして、日野のそのお願いを聞くことにした。

だが今思うと、吉原がそんなところに来てくれるか、わからないよな。

吉原はそういうの、付き合ってくれるタイプだろうか。

「ちえーりいッ!!」

ばし、とおれの背中を叩いた誰かに、おれは反射的に身構えた。

「あ、れ、望月」

「いよっす！図書室行くんでしょ？一緒に行こ！」

「うん……あ」

望月の、やはりどこか含みのありげな笑顔を見て、おれはひらめいた。

「望月さ、カラオケって、好き？」

「カラオケ？超すき」

「ほんと？だったらさ、おれと、宇垣と、日野と、まだ誘ってないけど吉原と、五人で行かない？今度の土曜日。多分、夜なんだけど」おれと宇垣と吉原、三人の中に、日野だけ紅一点は、かわいそうか

な、と思い、おれは、望月も誘うことにしたのだ。

「いくー!!」

良いノリだ。

「じゃあ、時間とか場所とか決まったら、また教える」

「楽しみにしてるねえ♪」

そう言うとき望月は、何の前触れもなく走り出した。

しかも全力疾走である。

どうしたんだろう。

まさか、望月、壊れた？

「もっ、もちづきい!？」

「なーあにつ、チェリー？」

おお、大丈夫そうだ。

望月は、もうすでに図書室の前で止まって、おれを待っている。おれはかけ足で望月に追いついて、望月よりも先に図書室に入った。

「いきなり走り出すから、望月が壊れちゃったのかと思った」

「あははあ、あたしゃもうとっくの昔に壊れてるさッ!」

カウンターに向かうおれの背中に、望月は比喩めいた発言をした。

これが比喩なのかそうでないのか、おれにはわからない。

「そんじゃチェリー、あたしはあたしの仕事をするよ」

「うん」

おれもおれの仕事をするよ、と望月の真似をしてみるが、とはいえ放課後の図書室。客の姿は多けれど、カウンターにまで用のある人はそういない。

本の貸し借り目当ての利用者は、大抵昼休みに済ませ、放課後は部活に専念したり、さっさと帰ってしまう人ばかりなのだ。

暇だ。

昼休み以上に暇だ。

「帰りたいなあ……」

おれはカウンターに伏せて、ぼんやりと図書室の入口を眺めていた。と、ふいに長身の男前が入ってきた。

あれえ……絶対に知ってるんだけどなあ、顔も見たことあるし、ただ、名前がね、思い出せない。

「や、や、やま……山口？」

違うような気がする。

ってか、山口って、吉原のときとおんなじ間違いじゃね？

「あー……だめだ、思い出せん」

「何がだ？」

「あのイケメンの名前がぁ……って」

おれは閉じていた目を開いて、真上を見上げた。
さかさまの吉原が視界に入った。

「吉原、なんでいんの？」

いつのまに背後に回り込んだのだろう、吉原、気配がまったく無かったぞ。

「本を返却しに来ました」

わざとらしい敬語で言い、吉原はおれの顔面に本を直撃、させた。

「んぶ」

僕って何、という文字にキスしてしまった。

いーもん、おれのファーストキスはあいりだもん。

「んう……ごへんきやくですねえ？」

ちよっと不機嫌なかんじに言ってみると、吉原は、ぷつ、と、何かおかしいんだこのやろう、吹き出しやがった。

「…………。てかさ、これ、昨日借りてなかった？」

「ああ、昨日借り……」

吉原は、何かに堪えきれなくなったように、再び吹き出し、口元を押さえて、声を殺すように笑った。
おれから目を背けている。

ということは、つまり、おれが吉原を笑わせてるってことかぁ？

「一日で読み終わったの？」

「あ……ああ……っく」

だから、何がそんなにおかしいんだよ!？

「……………」

「あ、いや、ごめ……思い出し笑い……くっ、くはっ」

「何だよお、……思い出し笑いするヤツはえろいんだぞ！」

「ばあか、お前以外の男はみんなそうなんだよ」

「えっ、そなの!？」

「ぶはっ」

吉原はついに爆発したらしく、カウンターの影に隠れるようにしゃがみこんで、けらけらと笑い出した。

こうなると、吉原が一体何を思い出して笑っているのかが気になってくる。

「一体何を思い出したらそんなに笑えるの」

「や、いいよ、気にするなよ！」

意味がわからない。

なんでおれがなんか吉原に悪いことしたみたいなかんじになってんの？

「まあ……そういうことだから」

どういふことなのかさっぱりだが、吉原はそんな自己完結の合間に、おれがあんなに苦戦した本の返却の手続きを、さらりとこなしてしまった。

「あっ、今日はおれの当番なんだぞ!!」

「はあ? 何、お前、やりたいの? なら明日もやれよ」

「それはやだ」

「わがままなやつだなお前」

「負けず嫌いなだけだもん」

「あまり変わりは無いだろう?」

そんなことを言いながら、吉原はおれの隣に座った。

……………ん?

「吉原、もしかして、おれの代わりに……?」

「代わりにじゃない。一緒にだ」

「そおれじゃあ意味ないじゃあんっ!」

「……………」

おれの嘆きは完全に無視し、吉原はカウンターに頬杖をついた。

「……あ、そうだ吉原」

「どうした？」

「一緒にカラオケ行かない？」

吉原は一瞬固まって、ゆっくりとイスの背もたれに体重をかけ、

「何だそれ」

と言った。

「思いつきか？」

「違う違う、日野がさ、ええと、宇垣と望月も行くんだけど、日野が、吉原も一緒にどうかって」

「……………へえ。まあ、別にいいけど」

それは実にあっさりとした答えで、おれは軽く拍子抜けしてしまった。

もしかすると吉原、カラオケとか、嫌いじゃないのかもしれないな、と思った。

あっさり吉原と望月を道連れにすることに成功し（この成功のおかげで後々大変酷い目にあうのだが）、時刻は19時13分、場所はこのあたりで一番安いカラオケボックス。メンバーは、おれ、宇垣、日野、吉原、望月、そしてきちんと髭を剃り、歳よりも若く見えてしまうくらいに格好良くなったりリョウさんの6人。

何故リョウさんが混じっているのかというと、まあ言ってしまうと、おれの保護者役である。

夕方6時ちょい過ぎ、そんな時間から一人で家を出たのは初めてであり、母とは対照的に妙な厳しさを持つあの父親にだけは見つかるまいと、こっそり自分の部屋の窓から抜け出したおれは、コンクリートの地面に華麗に着地する際、髭を剃ったばかりらしいリョウさんに偶然その姿を見られてしまい、あちゃあ、どうかこのことは父さんには内密に、と言うとリョウさんは、にかつと笑って、

「おう、ところで桜ん坊、ドコに行くんだ？」

と何気なくおれに質問し、おれが何気なく

「カラオケです」

と答えると、うちの門限が今どき高校生にもなって7時という異例の早さであることを知っているリョウさんは、

「ふうん……一人じゃ帰ってきたとき言い訳がメンドーだろ、リョウさんがかわいい桜ん坊のためについてっちゃる」

と優しく言ってくれたので、たしかにこのまま消えたらひよっこり帰ったとききつと父さんに大目玉をくらうに違いない、よし、ここはリョウさんの好意に甘えよう、リョウさんなら頼れる、ということでおれは、その場で宇垣にメールを送って了承を得、リョウさんに同行してもらうことにしたのである。

そうしてたった今、日野が浜崎あゆみという人の歌を歌い終わったところであるが、吉原の歌声はまだ聴けていないのであるが、盛り

上がってきた宇垣や日野や望月の隣で、おれはリョウさんに恋愛相談を持ちかけていた。

「だから、だからねリョウさん、おれ、おれはあいりにきらわれたくないんすよお」

「ああああ解るよその気持ちちは。そうだよなあ、なんかこう、暴走しちゃうんだよなあ、気持ちちが先に先につて突っ走ってつて、ああ解るよ、うん、押し倒さなかっただけ偉いぞ桜ん坊」

そう言っておれの頭を撫でるリョウさんの顔がほんのり赤いのは、リョウさんがお酒を飲んでいいるからである。
焼酎というやつらしい。

「…………あの、リョウさん？」

「おう？どーした、吉原くんとやら」

「その…………いえ、なんでもありません」

「あん？そうか？」

と、吉原はしきりにリョウさんと会話をしようと試みている。だがその度に、おれに気を使っているのか、おれのほうをちらっと見ては言葉を止めるので、こちらとしてはこの恋愛相談を止めるべきかどうか悩むところだが、吉原はなんでもありませんと言っているの
で、まあいいか、とおれは相談を続けている。

で、

まあそんな調子でおれが一度も歌わぬままに二時間くらいが過ぎ、また吉原も一回しか歌えず（やっぱ普通に上手かった）、リョウさんはかなり出来上がっている様子、そして宇垣と日野は最近知り合ったとは思えないほどに望月と仲良しさんで、もうボックス内の熱気はすごいことになっている。

「そーお、おれはあ、ええとお」

「ほーお、そおかあ」

まだおれは何にも言っていないというのにリョウさん、赤らんだ顔でへらへらと笑って相づちをうつ。そばで宇垣がめちゃくちやに歌

っているため、おれもリヨウさんも叫びあうように大きな声で話をしなければ、会話が成り立たない。

いや、叫んでも叫んでも会話は成り立つ様子がないのであるが、伝わらないと会話は絶対に成り立たないしね。いや、というかこのリヨウさんを見ている限りじゃこれ、ちゃんと伝わってんのかあ？つてかんじなんですけど。

で、もうだめだこりゃ、みたいな、長さんみたいな、で、吉原のほうを見てみたら、吉原、ものっすごくシケたツラしていやがりますから、ふふ、吉原ったら、つまんなそお（笑）

と、吉原は唐突に、おれを見て、首をかしげて、はは、なあんかいンコみてえ、ふふふふ、んで、吉原は唐突に、おれに近寄って、おれの顔をまじまじと見て、言った。

「神波、お前……酔ってる？」

「はあん？寄ってねえよ！！」

「寄っ……酔ってんじゃねえかどう見ても」

「寄ってないってえ」

「ハイハイお前は寄ってないなあ、お前は弁当じゃねえもんなあ」

「うひひひ、ひのまるべんとーかッ」

「なに欧米かみたいなのツツコミ入れてんだ、意味わかんねえよ」

「そもそもおれが寄るりゅうーがないじゃないですかあ」

「りゅう？理由？ああ……って」

吉原は一度きよとん顔をしてみせてから、んふ、おれが飲んでた、にがいじゅうすをとりあげた。

「これ酒だぞ！？」

は？さけ？

「あひゃん」

なんだよーこれ、ミヨウにニガイにゃあと思ったら、なんか喉に熱が残るなあ、と思っ、たら、なんだよー、リヨウさんの酒かよお？「うひっ、みせーねんいんしゅ？おれえ、もしかしてーいけない子れすかっ？」

「……………」

「っすよねーえ、ぼくってばもお、お酒はのむしい、門限はやぶるし、プラスチックかもしれないだすし、リポDを一日に3本飲んで巨大化して街をめっちゃめっちゃにするし」

「安心しろ、最後のは絶対にしてない。俺が保証してやる」

「えへ、ありがとっ」

「いや、可愛く礼とか言われても」

吉原、なんか焦ってる。ふふ、おもしれー。吉原が焦ってる。どうやらこのへんが吉原の焦点らしい。

焦点？

焦点ってなんだっけ、なんか社会か理科か国語か数学か理科か英語でできたことあるきがするぞ。

まいっか。

「吉原さあ、吉原はあ、お酒は呑んだことあるのかい？」

「な……………無い」

「だったらあ」

その時は、なんか、テンション上がっちゃったんだ。

なんでか知らんけどめっちゃ楽しくてさ。

だから、まあ、それは、しょうがないよ。

「はつたいけん、だなっ！」

そう言っておれは、

吉原の喉に、おれが飲んでいたにがいじゅうすを、ぐいと流し込んでみた。

そのときの吉原の表情といったら、もう、……………。
コトバにできねえ。

「かき氷食ったらさあ」

吉原は、まるで明日がノストラダムスの大予言で地球が爆発すると言われた年月日だとしても打ち明けるかのように、絶望に満ちた瞳で言った。

「頭がキーンってなるんだよなあ……………」

知るか。

「かき氷食ったらさあ、頭がキーンってなるんだよなあ」

「……………」

「かき氷食ったらさあ、頭がキーンって」

「だからあ、知らねえって言ってんだろオ！」

ついにおれの堪忍袋の尾はぶちギレて（あれ、堪忍袋にはしっぱな
んてないはずなのにどうして堪忍袋の尾って言うのだろう？）、意
味の解らないフレーズを繰り返す吉原に、温厚なこのおれが、珍し
く怒鳴った。

大体おれは、かき氷を食べて頭キーンってなったことが無いのであ
る。だから、かき氷食ったらさあ、頭がキーンってなるんだよなあ、
なんて言われても、知るか！！というかんじなのであるよ。わかる
かい？

しかも吉原、かき氷のくだり以外にも、絶望先生のくだりが存在し、
それがまた意味不明なのである。というか、絶望先生という言葉自
体が意味不明。何、絶望先生って。どんだけ反面教師だよ、と言
いたい。というかさつきから言ってるんだけど完全にスルーされて
いる。寂しい。

で、その絶望先生のくだりというのは、

「絶望先生のさあ」

これである。

「第七集のさあ、最後のピクロスさあ」

この時点でもう銀河のレベルで理解不能である。

「あとでコピってゆっくり解こうって楽しみにしてたのにさあ、友達に貸してさあ、返ってきたらさあ、解かれてたんだよおおおおおおおおお」

頼むから病院に行ってくれ。

「絶望先生のさあ！」

「なんで人に貸す前に解いておかなかったんだよおつ、ばか！」

「第七集のさあ！！」

「せめてコピっておけばよかっただろお！！」

「最後のピクロスさあ！！！！」
だめだ。

今の吉原には日本語が通じない。通じる気配がしない。

「あとでコピってゆっくり解こうって楽しみにしてたのにさあ！！！！」

しかもその声が半涙声なのである。聞いていて鳥肌が立つくらい
の同情を買う美声なのである。もうそろそろ勘弁してほしいのである。
「友達に貸してさあ、返ってきたらさあ、頭がキーンってなるんだ
よなあ！！！！」

「ならねえええよッ！！！！」

「かき氷食ったらさあ、最後のピクルスさあ！」

「かき氷にはピクルスなんて入ってねえよ！！！」

「友達に貸してさあ！！！」

「ピクルス入りのかき氷とかどういうのをモティーフにして生み出
されたのか皆目見当もつかねえよ！！！」

「返ってきたらさあっごほっげほ」

「ベジタリアンをターゲットにした新商品かッ」

「げほ、う、むせちゃった」

というかんじで意味不明のフレーズを繰り返しては吉原、けらけら
と陽気に笑うのだ。

なんてこった。

吉原は笑い上戸だったのか。

誰かに助けを求めようと周囲の人間に目を配ってみるが、だめですわ。

宇垣も日野も望月もリョウさんも泥酔状態である。

まあ酔わせたのはおれなんだけど。

いや、ノリで。

飲ませたら飲ませたで、なんかおれ自身は、みんなに反比例するみたいに酔いがさめはじめ、さてどうしてくれようこのぐだぐだな空気に。と、でろんでろんなボックス内の中心で綾波レイ並みの冷静さを取り戻しつつあるおれは、重大な問題に、気付いた。

泥酔した5人の高校生。

その中でただ一人、成人した男が焼酎をちびちびと口に運んでいるこの光景。

どう見ても、

どう見てもこの状況、リョウさんの招いた惨事ってことになるんじゃないの？

「どーしょ」

悪いのは勝手にリョウさんのお酒を飲んだ挙げ句に全員をめっちゃに酔わせてしまったおれなのに。

リョウさんが捕まったらどうしよう。

「い……今のうちに、言い訳考えとかないと」
なんて。

えへ。

おれ、着実にズルい大人に近づいていつてら。

ごまかすことばっか考えてさ。

これじゃあきつと、あいに嫌われちゃうなあ。

あいは大人が、大っ嫌いだから。

「かああんなみいい」

と、

さっきまでおれの背後で、絶望先生の頭がキーンだの、かき氷食ったらピクルスが返ってきたのだと、ますます意味の解らない言葉を繰り返していた吉原が、後ろからおれを羽交い締めにし、おれの口に焼酎の瓶をそのまま突っ込むものだから、おれはがぼっ、と吹き出しつつ、喉に冷たくて熱い液体が流れていくのを感じて、ふふ、なんかまた酔いが回ってきたかもしれないよこれ、ふふ。

というふうにおれがまた気持ち良くなってきたところで、は、

なんだこれ。

吉原はけらけら笑いながら、絶望先生のかき氷食ったらピクルスがキーン、ともうとつくの昔に何かの歯車が狂ってしまったフリーズを繰り返し、しまいにはおれに脱げよこのやろうと一見何の脈絡もなさそうに見えて実は何の脈絡もない要求を突きつけてきやがります。

おれがやだよなんでだよと抵抗する間もなく吉原はけらけら笑いながらおれの服を有無も言わず剥ぎ取りはじめ観衆、つまり宇垣や日野や望月やなんかがそんな吉原の一挙一動になんて知らんがめっちゃウケている。

ウケてる。

おれ、ウケてるよ。

とおれが軽い快感を覚えたのと同様、おそらく吉原もつい調子に乗ってしまったのだろう。しょうがない。気持ちはよく解るのだからおれは何も言えないのだが、あろうことか、あろうことか吉原は、おれの頬にキスをしやがったのである。

普段のおれならば、うわ、キモい、なにしやがるあっちいけ、と吉原を殴り倒すところであるが、あいにく今のおれは吉原と同じように酒をのみ、吉原と同じようにいい気分になっているのであり、おれ、ノリノリである。

しょうがねえやつだなまったくもう、ノってやるか、なんちって、おれは、おれの服を脱がす吉原の唇に、キスを、してしまったのだった。

あーあ。

ゆっくりと意識が現実世界に戻されて、まばゆい光におれは、両手で顔を覆った。

同時に、おれの視線の先にあった天井が、見慣れないものであるということに気付いて、んう、と声をもらしながら、重たい両手をどけてみる。

おれの部屋じゃない。

なんかすげえ和風なかんじの天井だ。

忍者とかいそう。

きつというだろう。

いるに決まっている。

「お代官や……そちも悪よのう……」

なんか違うような気もするが、大体正解だろう。

そうだ、そういえばおれの部屋には、布団が無いのだ。つまり、今おれが布団に仰向けで寝ているということ自体、不可解で不可思議で、非日常と言っている、結構重大な事件だということだ。

実はおれ、生まれてこのかた、自分の部屋以外で寝泊まりしたのなんて、小学校と中学校の修学旅行の、二回だけなのだ。

「ふぁ……あ」

しかし、こんな急な大事件に体がついていけないのか、思いっきりあくびをする余裕、というかのんきさを保っているおれは、特に理由も無く寝返りをうった。

吉原の寝顔が目の前にあった。

「あー……思い、出したかも」

ここは、リョウさんの、家だ。

お酒を飲むと記憶が飛ぶ、と母さんは言っていたけど、おれはそうでもないらしい。昨夜起こった一部始終を、比較的鮮明に憶えている。

あのあと、高校生がカラオケにいられるギリギリの時間までどんちやん騒ぎは続けられ、その後リョウさんがタクシーを呼び、宇垣と日野のことは、5人のうち一番意識がしっかりしていた（けどテンションの高さは宇垣さえ抜いてダントツだった）望月に任せて、住所のわからない、訊いてもロクに答えてくれない吉原と、未成年飲酒なんて父親にバレたら本気で勘当されてしまうであろうと容易に想像がつくおれは、リョウさんの家に泊めさせてもらうことになったのだった。

そんなわけで、8畳の和室に、おれと吉原は並んで布団に寝ていたのである。

「あーあ……」

ファーストキスはあいり、セカンドキスは僕って何、サードキスは吉原。

妹と本と男。

だめだ。

おれの人生もうだめだ。

スタートして16年で派手に転んでしまった。

もう追いつけねえ。

誰にだよ。

「ちくしょー、吉原が悪酔いするのがいけないんだぞお……」

とか、人のせいにしてみたり。

「うう……リョウさん……リョウさん探さなきゃ……」

結局抜け出したまま外泊してしまったのだ。母さんはどうにかなるとしても、あの父親をごまかす自信など、おれには無い。

憂鬱。

だけど、早く帰らなきゃ、もっとややこしいことになる。

リョウさんにお礼言って、そうして、帰って謝ろう。

さすがに、お酒を飲んでしまいました、なんて言えないけれど。

だるい体を無理矢理起こすと、頭にズキンと痛みが走った。二日酔い、というやつだろうか。

まだなんとなくブーツとしていて、それでもふらふらと廊下を歩いた。

「リヨウさん……？」

リビング、にはいない。

台所にも誰もいない。お風呂に入っている様子もない。

「あれ……リヨウさん、二階？」

のろのろと、手すりに頼りながら階段を上って、階段に一番近いドアをノックしてみた。

「……うん？」

中から声がした。

けど……リヨウさんの声じゃ、ない？

「……どしたの、あんたがノックなんてめずらしー……」
と、

言いながら出てきたのは、上半身裸で、髪を茶色に染めた、20歳前後のお兄さんだった。

「……あれえ？」

お兄さんは頭を掻きながら、キョトンとおれを見下ろした。リヨウさんや吉原ほどではないが、おれよりも少し背が高い。

「……誰？」

それはこっちのセリフだった。

「ええと……」

どう答えるべきか迷っていると、お兄さんはその間に全てを察したらしく、ああ、と納得したように頷いた。

「あーあーあーやだもうリヨウさんったらこんなカワイイ子連れこみやがっちゃって！あの性悪サディストになんかヒドイことされなかった？」

「し……性悪？」

それって、リヨウさんのことだろうか？

だとしたら大変な誤解である。リヨウさんはとてもいい人で、性悪だとかサディストだとか、そんな言葉とは無縁の人なのに。

「り……リヨウさんは、性悪でもサディストでもありませんからっ
言ってもいいのかとためらいつつ、おれがお兄さんの言葉を否定す
ると、お兄さんは、

「え……あ、はあ」

と目を丸くして、首をかしげた。

「んーっと……まあ、キミにとってあの人がそーゆーヒトだってん
なら、じゃあ、キミにとっては、そーゆーヒトなんだろうな、あの
人は」

お兄さんは困ったように、よくわからないことを言った。

それからしばらく、おれとお兄さんの間には気まずい沈黙が流れ、
もう、もういや、耐えられませんか、ということでおれは、

「ええと、リヨウさんを、探してるん、ですけど」

と言うと、お兄さんは、

「あー……ゴメン、知らね」

と答えたので、あ、そうですか、と頷き、おれはそそくさとその場
から離れた。

……本当に誰だったのだろう、あの人。

雰囲気からして、ここに住んでいるか、少なくとも昨夜おれや吉原
と同じようにここに寝泊まりしたらしかったが。

「リヨウさんの……弟、とか？」

弟がいるなんてきいたことなかったけれど、そもそもリヨウさんは、
兄弟どころか両親の話すら話そうとしなかったからなあ。

あのお兄さんが知らないということとは、リヨウさんは二階にはいな
いのだろう、と若干しっかりしてきた思考回路でおれは考えて、と
りあえず一階に降りてみた。

「おお……かなみ」

おれがお兄さんとの気まずい沈黙に耐えている間に起きていたらし
い吉原が、和室に戻ったおれに声をかけた。
ものすごく顔色が悪い。

大丈夫なのか？

「ね、吉原、リョウさん見なかった？」

「いや……知らない」

おれよりは飲んだ量が少ないはずの吉原は、おれよりも二日酔いに苦しんでいる。そのあたりも体質による、といつか何かで聞いたことがあるが、吉原は酒にことごとく弱い体質らしい。

「うーん……どうしようかな、帰れないや」

「ここ、リョウさんちなのか？」

「え？ 吉原、憶えてないの？」

「ん、いや……ああ、ほとんど記憶が飛んで……神波の家かと思っただ」

このやろう、人のサードキスを奪っておいて、記憶が無いとは何事ぞ、と思ったが、少し考えて、言わないでおいてあげることにした。多分吉原、知ったら泣くから。

それに、よくよく考えてみたら、アレはおれのほうからしたような気もしなくはないし。

その辺はうやむやのままにしよう。

「今日日曜でよかったなー、吉原あ」

「ああ……学校あったら、多分、死んでた」

吉原はぐったりと答えた。ううむ、本当に何にも憶えていないらしい。

「まったくだよ。あ、宇垣たちは帰れたかなあ？ 望月に任せたんだけど」

「望月に？……大丈夫なのか？」

「え、なんかまずかった？」

「いや……まあ、大丈夫……かもしれない」
かもしれない。

とてつもなく頼りない断言である。

と、

ガラガラガラ、と玄関の扉が開く音がした。

そういえばリョウさんちは引き戸だったっけ。

築何年だろう……………。

「リョウさんっ」

「お、起きたか桜ん坊……吉原くんも」

リョウさんはスーパーの袋を手に（チームマイナス6%な母さんはいつもエコバッグを使うから、買い物袋なんて久々に見た）、いつもの優しい笑顔を見せた。

やっぱりこの人は、性悪でもサディストでもない。

「リョウさん、おれ帰……」

「朝メシ食うか？」

「いただきます！」

はっ、しまった。

帰らなきゃいけないのに……。

まあでもお腹空いてるし、リョウさんはおれたちの分の朝食まで買ってきてくれたようなので、リョウさんの厚意に甘えることにしよう。

「あの……………、リョウさん、すみません、泊まってしまって……」

「ん？ ああ、いいよ、別に」

袋から色々なパンやジュースを出しながら、リョウさんは吉原に答えた。

「それよりあんた大丈夫かあ？ 酒弱そうなのに、結構飲んでたけど」

「あ……、いや、大丈夫じゃないんですけど……」

「おう、動けるようになるまで居ていいからな。あ、それとももう帰らないといけねえとか？」

「そうなんですっ」

おれが言うと、リョウさんと吉原は同時におれを振り返った。

「あー……そっか、すまん桜ん坊。あ、ちゃんと俺が言い訳してやっから」

リヨウさんは全然悪くないのに、なんだか申し訳なさそうに、眉をハの字にして言った。

「あ、や、そういうんじゃない……ええと、なんか、一晩泊めさせてもらった上にご飯まで食べさせてもらった上にそんなアフターケアまで気にしてくれて、その、何から何までどうも」

リヨウさんは笑って、いえいえ、と答えた。吉原はため息をついた。「言いながらちやっかりパンかじってるし……」

おそらくリヨウさんがおれのために買ってきてくれたおれの大好物・メロンパンは、いつも母さんが買って帰るやつほどではないものの、やはり美味であった。

「いーよ、それ桜ん坊の分だし。他に食うヤツいねえから」

「あ、やっぱり？ あいたッ」

思ったことを言っただけなのに、おれは吉原に叩かれた。ただでさえ二日酔いで頭痛いのに。

リヨウさんはそんなおれらを見て、

「夫婦漫才かお前ら」

と笑って、右手に菓子パン、左手にいちご牛乳をつまんで廊下に出た。

「いってえなあ！ なにすんだよう」

「調子乗りすぎだ馬鹿」

吉原を見上げて睨みつけると、吉原は呆れたようにため息をついた。同時に廊下で、リヨウさんが叫ぶ声がした。

「おいマキい！ 朝メシい」

マキ、というのは、さっき二階で会ったお兄さんのことだろうか。

……女みたいな名前。

おれには聞こえなかったけど、あのお兄さん……マキさんはリヨウさんに返事をしたらしい。リヨウさんは何やら返してから、菓子パンを食器棚に、いちご牛乳を冷蔵庫にしまった。

「ねえリヨウさん、マキさんって、リヨウさんの弟さん？」

「え、マキが？ まさか、ただの迷惑な居候だよ」

弟じゃあないのか。

「……っと、桜ん坊と吉原くんは、別に迷惑じゃないかな？ 氣イ遣うんじゃないぞー」

「あ、はい、ありがとうございます」

答えたのは吉原だ。おれはたいらげたメロンパンの袋をどうしようか考えるのに必死で、それどころではないのである。

「どうした、桜ん坊？」

おれがキョロキョロしているのを見て、リョウさんはまんまるいパンをかじりつつ尋ねた。

「あ……ええと」

無いのである。

探しても探しても、ごみ箱が見当たらないのである。

「あ、一つじゃ足りねえだろ、それちっさいもんなー。もいっこ買つてあるから食っていいぞ」

「あつ、ありがとうリョウさん」

とりあえずふたつめのメロンパンを手に取り、それでもごみ箱を見つけれずに、あるわけがない場所まで探しだしたおれを、吉原は心配してくれているらしく、おれの肩を叩いた。

「ど……どうしたんだ、神波？」

「あつ、アイヤー」

「……何なんちゃって中国人みたいになってんだよ」

「特に理由は無いぜ！」

はっ、なんか今のテンション宇垣みたいだった。

「そ……そうか？」

「うっ、うん……」

答えながらおれは、リョウさんちのリビングの青いカーテンをめくった。

すぐ向かいの窓に、あいりがはりついていた。

「あ……………」

「……………どうかしたか？」

吉原の声に、空気抵抗でぶわっとなるカーテンを無理矢理窓に押し当て、おれは吉原に何気ない笑顔で振り向くことに成功した。

吉原は奇怪なものを見るようにおれを見つめてくるけれど。

「ベベベべつになんにもみてないよお？」

「何か見たのか？」

「リヨウさん色々ありますがどう迷惑かけましたおれもう帰るねさよなら吉原もまた明日な！！」

「おお？ 親さんへの言い訳は……………」

「ヘーキですっ」

「そうか？ じゃあ、何か困ったことあったらいつでも来いよ、桜ん坊」

振り向くリヨウさんに答えると、リヨウさんはおれに手を振った。

おれも靴に足を突っ込みながら、メロンパンが入っている未開封の袋と、メロンパンが入っていた空の袋とを持った手を振って返す。

リヨウさんの向こう側で、吉原が呆然としているのが見えた。

あいは可愛い。

いつも変わらないにぱっという笑顔とか、あからさまにだるそうなゆうっくりとした動きとか、とんちんかんなタイミングの挨拶とか、何にも知らない子供のような拙い喋り方とか、大好きなゲームの話をするときだけはすらすらと難しい言葉を使ってしまうところとか。それら全てが揃ってあいで。

そんなあいだからこそ、おれは好きになったのだと。

そう信じる反面、

それは違う、と。

何かが違う、と。

一体何がどう違うのかもわからないまま、

おれの中の誰かが、そう訴えている。

「あ……あいら!!」

今までにないほどの勢いで、おれは玄関のドアを開けた。

「あっ、お兄ちゃん!? 昨日はどこに――」

「母さん、あいは!?!」

一瞬怒ったような表情を見せた母さんは、しかしおれの気迫に押されたのか、目を丸くして、リビングの正面のふすまを指差した。

「多分、和室に……」

「あいら!!」

勢いよく和室に入ると、すぐ目の前にあいが座っていた。

膝を立てて、お気に入りのDSに釘付けで。

スパン、というふすまの音にも気付いていないかのように、顔をあげることもさえない。

「あっ、あいら?」

おれがしゃがんで目線の高さをあいに合わせると、あいはよう

やくおれを視認して、

「あ、おにーちゃんだあ」

と言って、すぐまたDSに目を落とした。

いつもどおりのあいりだ。

あ、おにーちゃんだあ、と言うのも、おかえり、を言わないのも、いつもどおり。

心の内でほっとしてから、おれは自分がわからなくなった。

なんだおれ。

あいりが普通なのは、当たり前じゃないか。

あいりは別に、何があつたってどうもしない。どうかする理由が無い。

「一体どうしたの、お兄ちゃん？」

背後からの声に振り向くと、母さんが心配そうにおれを見つめていた。

「あ……ええと、その、ごめん母さん、勝手に家抜け出して」

「うん、まあそれは確かに、あたしなりにかなり心配したし、お父さんは激怒してそれを宥めるのにも相当苦労したけどさ、ていうか、何があつたの？昨日はどこに泊まったの？しかも何、その急ぎようは」

なんだかとっても非難されているようだが、おれはどこまで正直に話すべきなのかを考えるのに必死だった。

「ええと、話すと長くなっちゃうんだけど」

「手短にお願ひ」

「面倒……な所は、はしょっていい？」

「おっけー」

よし、許可を得た。

「昨日、ちょっとだけ息抜きしたくて、みんなとカラオケ行っただ」

「うん、息抜きは大事だもんね」

「そんでね、ちょっとハメ外しすぎちゃって」

「うんうん、よくあるよねえはしやぎすぎちゃうコトって」

「思ってたより遅くなっちゃって、今帰っても父さんが入れてくれないだろうって思ってた」

「そだね、入れてもらえなかっただろね、賢い賢い」

「だから、リヨウさんが泊めてくれるって言うから、泊まった」

「リヨウくん？ ああ、なるほどなるほどなるほどねえ」

適当に相槌を打ちながらおれの話聞いていた母さんは、納得したようにこくこくと頷き、にぱっとあいきりみたいに笑った。

「ま、リヨウくんトコなら大丈夫だね」

物分かりの良い母親で助かった。

「そんで？」

「ん？」

「急いでた理由は？」

そう訊かれたおれは、少し考えてから、一つの結論に至り、答えた。

「特には無いかな」

「そう」

そうなのだ。考えてみたけど、どうして自分がさっきまであんなに急いでいたのか、さっぱりわからないのだ。

なんとなく。

なんとなく、すぐに帰らなきゃいけないような、帰りたいような気がして。

ああそうだ、おれはあいきりに謝ろうとしていたのかもしれない。

けどそうだとしても、何を謝ろうとしていたのかも忘れちゃった。

吉原なんかとキスしちゃってごめんね、おれはあいきりが好きなのに、それとも、

図書室で女の子に手え振られて浮かれたりしてごめんね、おれが好きなのはあいきりなのに。

それとも、

あの日いきなりキスしちゃってごめんね、あいきりの気持ちも聞かないのに。

それとも、

日野のこと可愛いとか思っでごめんね、世界で一番可愛いのはあいりなのにな。

それとも、

一週間くらい前にあいりのいちご大福知らずに食べちゃってごめんね、せつかくあいりが楽しみにとっておいたのに。

それとも、

それとも、

それとも。

思い当たる節が多すぎてわからない。

振り返ると、相変わらずあいりはDSに夢中で、和室の窓を背にタッチペンを踊らせている。

おれはあいりに、何を謝ればいいんだろう。

おれは一体、何を間違っているんだろう。

あいりに聞いたら——答えてくれるだろうか？

月曜日です。

いつもの通学路を歩いていると、学校の数十メートル前で吉原とばったり出会ったので、

「おはよ、吉原」

「ああ、神波、おはよう」

「昨日、大丈夫だった？」

「まあ、なんとか。そっちは？」

「まあ、なんとか」

「そうか。ところで神波」

「なあに？」

「お前の家からうちまで、歩いてもそんなに時間かからない距離だったけど」

「ふうん、そうなんだ」

「……………」

「ん？」

「…………いや、やっぱりいい」

「何？ 気になるじゃん」

「別に、なんでもない」

「そう？」

という会話をしながら二人で校門をくぐり、少し歩いたところで、おれは一人の女子生徒と思いきりぶつかった。

「わっ、ごめ…………」

しりもちをついた彼女に手を差しのべると同時に、その女子生徒が知っている顔だということに気付いた。

「あれ、日野？ ごめん、大丈夫だった？」

日野はおれを見上げる。心なしか顔色が悪い。

「…………ええと、どっか痛い？」

しゃがんで顔を覗き込むと、日野はその目に、涙を浮かべた。
え、どうしよう、おれが泣かせた？

「ご……ごめんね日野、あつ、保健室行く？」

せきを切ったようにぼろぼろと泣き出した日野に、おれはオロオロしながら日野に話しかけるが、やはり日野は答えるどころか泣き止む様子も無いため、おれは困り果てて吉原を振り返った。吉原は、眉をひそめて首をかしげるだけで、やはり助けてはくれない。薄情者め。

「あの、あのさ日野、黙ってたならなんにもわかんないよ？どうしたの、どこが痛いのか？」

日野はおれのことが見えているのかいないのか、訊ねるおれにぶんぶんと首を振り、絞り出すような声で言った。

「ち……ちがうの、チェリー……わかってる、わかってるの、この世、には、いろんな人が、いるってこと、わかってる、いろんな、人がいていい、じ……時代なんだよね。うん、わかっ、てるんだ、けど、でもやっぱり、ショック、ていうか」

……………。

日野が、壊れた？

「チェリーが……うん、知ってたんだ、チェリーに普通の恋はできないんだろうなって、なんとなく察してたんだよ？でも、でもでももお、やっぱ、納得、できなくて、どうあったって、あた、あたしじゃムリなんだ、って、突きつけられたら、つらいんだよお！！」
そう叫んで、ぱっと立ち上がったかと思うと、日野は全速力で校舎に走って行ってしまった。

「ひ……日野！？ちよっ……ええ？何、今の、えええ？」

わけもわからないまま吉原を見ると、吉原は何を思ってたか、おどけるように肩を竦めた。

さっきの日野の奇行によってか、もしくはその他の原因によってかは不明だが、先程から、昇降口前の掲示板を見ていた生徒たちが、おれと吉原を見比べては声をひそめて何か話している。

一体何がどうなっているのだろう。

とりあえずのろのろと昇降口に向かうと、掲示板の前で群れる生徒たちの中に、宇垣を見つけた。

おれが宇垣に気付くより先に、宇垣はおれに気付いていたらしく、こちらへ向かって、必死で人波をかきわけて出てきた。その様子がなんだかおかしくて、おれはけらけらと笑ったが、ようやくおれのもとに辿り着いた宇垣は、いつになく真剣な表情でおれに言った。

「笑ってる場合じゃないって、ヤバイよ!!」

「ふええ？」

おれがのんきに首をかしげるのとほぼ同時に、宇垣はおれの手首をむんずと掴んで、ずるずると掲示板前の人混みの中に連れて行こうとしやがった。

嫌だ。そんなの嫌だ。絶対に嫌だ。あの人混みに飛び込むなんて絶対に嫌だ。そんな勇氣、おれには無いんだ。

「わっ、待って、宇垣、まだ心の準備が」

おれはそれなりに頑張ったが、すぐに抵抗するのを止めた。

なぜか宇垣とおれが人混みに入って行くと、その人の群れは綺麗に両側に避けたのだ。

その光景に、ふと卒業式の花道を思い出した。

そういや中学の卒業式の日、2年生の女の子に、第二ボタンではなく名札をくださいとせがまれ、軽い気持ちであればたら、数日後の登校日にかなり困ったことがあったわけ。

道を開けた生徒たちに、おれがぼんやりしていると、不意に宇垣は足を止めた。掲示板の前に到着したからだ。

おれが少し見上げるくらいの位置、ちょうど吉原の顔ぐらいの高さに、報道部の校内新聞が貼ってある。

その中でひととき目立つ記事の写真に、おれは言葉を失った。

「…………ええと」

これは何。

「…………ええっとお」

おれをここまで連れてきた宇垣は、おれにどのような反応を期待しているのだろう。

隣にいる宇垣を見ると、宇垣は困ったようにおれを見つめ返した。ヤバイよ。

宇垣はそう言ったけれど、これ、もう、あの、ヤバイなんてモンじゃなくね？

背後からの足音に、おれははっとして、結構無理に新聞を隠した。するとやはり不自然に見えたのだろう、吉原は訝しげにおれを睨んで、その高い身長を生かし（ちくしょーどうせおれはちびですよ）、その新聞を、その写真を、見てしまった。

数瞬の瞠目。

数秒の沈黙。

そして、

「ふ……ふふ、ふふふふ………」

吉原は、笑い出した。

「よっ………よしは」

おれが吉原の名前を呼び終わらないうちに、吉原の長い右腕は新聞に伸び、乱暴に掲示板から引き剥がした。

「ふふ……あの女狐え………」

怒っている。

吉原は今までにないほど怒っている。

「あ、あのさ、こういうのって、一昔前のマンガとかで、よくある、よねえ………」

おれは必死で吉原を宥めようとするが、吉原の耳におれの言葉は届いていないようだ。

昨夜の憤る父さんと、それを宥める母さんは、こんなかんじだったのかもしれない。母さんごめん。

「ぜってえ許さねえ」

一段と低い吉原の声に、おれはびくつとした。隣で宇垣も同じ反応をしたようだ。

剥がした新聞をくしゃくしゃに握って、吉原はきびすを返し、大股で校舎へと向かった。

「ま……待って、吉原、どこ行くのっ？」

吉原に聞くと、ぼすつ、とおれは吉原にぶつかつた。急に吉原が立ち止まったからである。

恐る恐る吉原を見上げると、吉原は振り返らずにこう言った。

「俺に対してこんな趣味に走った嫌がらせをしようとするのは、この学校に一人しかない」

……………。

恐い。

おれが吉原に怒られた時だって、こんなに恐いとは思わなかったのに。

そう、これは殺気だ。

吉原は殺気立っているのだ。

当たり前だ、おれだってこんな報道されたら困る。やっと自分がモテてると気付いたばかりだというのに、これではもう女子生徒たちに逃げられてしまうではないか。

とかいうおれの邪な考えとは違い、吉原の場合、吉原の心で一番大事な部分、つまり、プライド、というものに、意図的なのである、かなり深い傷を付けられたのである。

可哀想な吉原。

そしてもっと可哀想なおれ。

吉原は、俺に対して、と言ったのだ。それは、これを書いた人間は、吉原をはめようとして書いた、という意味である。

ということは、おれはとぼちりをくらった、ってことだろ？
なんか泣きたくなってきた。

「お前も来いよ」

さっき宇垣がおれにしたように、吉原もおれの手首を掴んだ。宇垣の時と違ったのは、背後から生徒たちの歓声上がったことである。
振り返ると、掲示板の前にいた生徒たちみんなが、おれと吉原に注

目していた。当然、なのだろう。あんな新聞記事を読んではまったのだから。

しかし女子生徒たちのあの嬉しそうな顔は一体何だ。

おれと吉原を好奇の目で見ていた生徒たちに、吉原はギロリと一睨みした。生徒たちは一瞬凍り付いて、数人の勇気ある愚か者を除いたみんなが目を逸らした。

「ち……ちよっと待ってよ吉原！どこに行くの？」

「決まってるだろう」

吉原は、握っていた新聞を開いておれに見せた。

「こんなことが可能で、しかも実行する人間の所だ。判るだろう？」
こんなこと。

こんな写真を撮れて、且つこれを人に見せようとする人間。

土曜日の夜、おれや吉原とカラオケに行った人間。

「まさか……」

宇垣は違う。さっきのリアクションからして、宇垣じゃない。日野も違う。何より二人は、写真なんて撮れるほどしっかりしてなかった。

あの場で一番、酔いが回っていなかったのは。

「……………望月？」

こんな、

おれと吉原が、でろでろに酔っ払って、そのノリでキスなんかしちゃってる、そんな写真を。

あの場で撮影できたのは、望月しかないのだ。

「なんで、望月が？」

一体何がどうなっているのだろう。

「ああ、おはよ、よっしいにチェリー」

望月は何の悪びれた様子も無く、爽やかですがすがしい朝の笑顔で、おれと吉原に手を振った。

が、こちらは、というより吉原は、望月のような笑顔とはいかず、むしろ、なんというか、

「……………これは何だ」

般若？

「んー？」

望月の席は窓際だった。イスに深く座り、背もたれと机に手を乗せて窓にもたれかかる、という非常に行儀の悪い座り方をする望月の机に、吉原が例の新聞を、ばんっ、と叩きつけた。

「これは何だ、と聞いている」

静かだがトゲの生えまくりな吉原の口調に、いっこうに怯む様子も無く、望月はにっこりと笑った。

「報道部の新聞ね」

「見ればわかる。この写真のことを聞いているんだがな、望月千浪？」

望月の下の名前って、千浪っていうのか。

「これが事実なら、報道部設立以来の大スクープよねえ。理系クラスの人気ナンバーワン男子である吉原くんと、特進クラスの人気ナンバーワン男子であるチェリーの熱愛発覚？」

「これは事実じゃない」

「そうだよ、おれ別に人気ナンバーワンとかじゃないし」

「いや……………そこは合ってるが」

「ええ？なんで？」

「なんでって……………あー、後でいいか神波？」

おれが首をかしげると、吉原はため息をついて望月に向き直った。

「とにかくこれは事実無根だ。報道部に撤回させろ」

「事実でしょ？この写真が証拠。合成も何もしてないよ、コレ」

「写真を撮ったのはお前だろう？」

「わかってんじゃない」

望月はさらっと自供した。開き直った、と表現したほうが正確かもしれない。

こんなに恐い吉原を前にしてもその態度、もう拍手さえ送りたくなる。

「あたしこの目で見たもん、よっしいとチェリーのキスシーン」

吉原が拳を固めたのをおれは感じた。けれど相手は女なのだから、さすがに手は出せないのだろう、吉原は深呼吸をしてから、再び望月に問うた。

「どうしてこんなことを？」

「どうしてって？」

望月はきょとんと吉原を見上げた。

「報道部の部長はあたしの友達だよ？友達と噂話するのに、特に理由はないでしょ？」

「ふざけるなよ」

吉原の声がまた低くなった。

……………

ええと、整理しよう。

土曜日の夜、おれや吉原が酔っ払ったとき、宇垣や日野も酔ってたけど、望月はそこまでぐらぐらじゃなくて、それでカメラを持っていた？

「え、望月どこにカメラなんて持ってたのさ？」

「あら、隠し撮り用のデジカメぐらい乙女のたしなみよん」

「そうなの！？」

「神波に嘘を教えるな、信じるから」

「なんだ嘘かあ、びっくりしたあ」

「ふふ。生写真ってね、結構おこづかい稼ぎになんの。特によっし

いとかチェリーぐらいのレベルになるとねえ」

「お前っ、神波まで……節操という言葉を知れ！」

「ふっ、お断り。あ、ちなみに文系クラスの紅ノ宮くんの写真もかなり売れますよー」

「黙れ望月」

「なんでおれまで撮るのさ？」

「ちよっ、神波、お前もちよっと黙って」

というかんじで相当騒いでいると、だんだん人が集まってきた。とはいえやはり吉原が恐いのか、皆遠巻きに見るばかりだ。廊下にも他のクラスの生徒たちが群れをなしている。

「ねえ吉原」

「どうした？」

「あのさ、」

耳打ちしようと吉原に顔を近付けると、それだけで周囲の女子生徒たちがどよめいた。なんなんだよ、まったく。

「どうするの？酒飲んで酔ってたからしょうがない、なんて言い訳できないし」

「……わかってるさ、そんなこと。けどこのままじゃお前、俺と付き合ってることになるぞ？」

「それは困る」

「俺もだ。だから望月にこうして撤回を求めているんです、わかってんのか神波？」

「ええと、うん」

「何だその『ええと』は」

「撤回なんてしたって、どうせウワサは消えないと思うよ、よっしい？」

おれたちに割って入った望月を見ると、いつものあの含みのありげな笑みを見せた。

「別にいいじゃないっすかよっしいくん、人の噂もなんとやらと言いますし？」

「てめえが言うとかムカつくんだよいちいち俺に嫌がらせしやがって」

「違う違う、その顔が見たいだけなのさあたしは」

「つまり嫌がらせしたいんじゃないやねえか!!」

ああ、吉原の口調が荒い。

「でも静かに怒ってる方が恐いよ吉原」

「てめえは黙ってろ」

「うにゃ」

吉原に一蹴され、おれは小さくなって二人を見守ることにした。

……なんでおれここに来たんだっけ。

そうだ、吉原に引っ張って来られたんじゃないか。

……なんかもうやだ。

なんでおれがこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

なんで吉原はこんなに短気なんだ。理系クラスの吉原といえば、なんか、クールで理知的で完璧でちよつと近寄りがたい美形、みたいな、そういう設定の人なんじゃねえの？

それは吉原の、単なる外面なの？

……なんて。

そんなわけない、よな。

吉原は、出会った時から、そんな完璧なんかじゃなかったじゃないか。

見た目はそりゃあ噂通りだけど、でも性格は、イメージと全然違って、ちよつと何かあったらすぐ怒鳴るし、楽しければ笑うし、おれが真剣に悩んでたら優しく励ましてくれるし、酔うと笑うわ脱がすわキスするわでぼろぼろだし、ツツコミは無意味に激しい。

所詮噂なんてそんなもので、イメージなんて嘘っぱちで、本当のその人なんか完全無視で。

実際にその人と話せば、そんなこと、すぐに解るのに。

「吉原」

「ん？」

「もういいじゃん」

吉原の袖を引っ張ってそう言った。

すぐに、何言っただよ、って、返ってくる、と思ったのに。

吉原はおもむろに腕を下ろした。

「夏休み挟んだら、どうせ皆忘れるだろうし、それに……」
信じたい奴は信じればいい。

ほんとおれのことが解ってる人なら、そんなことあり得ないって、
今まで通り接してくれるはずだ。

だから、いいや。

「もう、チャイム鳴るから、おれ、教室、帰るね？」
笑ってみせると、吉原は小さく息を吐いた。

「……そうか」

吉原が何を考えているのか、やっぱりわからない。
人の心を読む力を手に入れたら、真っ先に彼の心を読もう。

これは想定外だった。

本当はこんなはずじゃなかったんだ。

ほら、宇垣はともかくとして、クラスの皆は基本的に、おれの友達じゃん。

なのに、誰一人おれの無実を信じてくれないっていう、この状況。

「まあ……しょうがねえよ、それは……チェリーもだけど、吉原にだって、あんなモテんのに彼女いないってんだから」

今まで吉原が、何人ものマドンナを振ってきたのが、一つの原因らしい。

確かに男が好きで、恋人までいたなら、そりゃあ、どんな美女に告白されても、OKはしないだろうけど。

おれが恋もキスも未経験だったっていうのも、女はダメでそれを隠すためにそういうことにしておいた、とかいう理由があれば、他人からすれば充分納得のいくことなのかもしれない。

「宇垣はおれの言うこと信じてくれるんだよね？」

「ん？ そりゃ……、酔ったノリで、なんだろう？」

「うん」

「まあ、俺もその場で一緒にべろんべろんになってたわけだし」

そうだよな。

そう考えるのが通常なはずなのだ。

なのに、だ。

「……あの日野の態度は一体何なんだよ」

さっきからおれと目を合わせようとしない。

それどころか、話しかけてもわざとらしく無視するし、それでも話そうと追いかけたら、力の限り逃げるのである。

「ああ……なんかイライラする……おれが何したってんだよお」

「吉原とキスしたんだろ。……ごめんなさい」

きつと睨むと、宇垣は情けなく頭を下げた。

そういえば宇垣は、どうしてここにいるのだろう。

いつも日野と行動、というか日野についてまわっている、ような気がしていたのだが。

「宇垣さあ」

「ん？」

「日野のトコに行かないの？」

「はっ？」

おれが言うと、宇垣は驚いたように声を上げた。

「……チェリー……」

「ん？……ってえ！？」

宇垣にでこぴんされ、おれは大声を出してしまった。クラスメイトたちの視線が、一斉におれと宇垣に注がれた。……日野以外は。

「チェリーのくせに生意気なんだよッ！！」

「うゝ……生意気って何がだよ……」

涙目になりつつ言うと、宇垣はもう一度、チェリーのくせに、と小さく呟いた。

「……チェリーのくせに、か。

はーあ。

なんでもチェリーというおれのあだ名も、吉原が言うにはまずかったらしいじゃないか。

「知らないのか？チェリーボーイって、英語の俗語で、童貞の他にホモって意味もあるんだ」

とか言われても納得できねえ。

そんなこと、おれは吉原に聞くまでまったく知らなかった。

それどころか、チェリーというあだ名も、おれが自分で、おれはチェリーだぜいえい、なんて言ったわけではなく、いつのまにか周りからそう呼ばれていただけなのである。

だから、チェリーにどんな意味が込められてたって、おれが知った

ことではないのだ。

なのに生徒たちときたら、チェリーってのはつまりそういった意味だったんだな、みたいな雰囲気ですよ。

意味わかんねえ。

「チェリー、」

「だから別におれチェリーなんて呼ばれようと努力したことなんか一度もないんですう!!」

突然肩を叩かれ、おれはうんざりと振り返った。
が、

「……う？麻生？」

おれの肩を叩いたのは、噂を聞いて真相を確かめに来た他クラスの生徒ではなく、おれの図書委員のパートナー、麻生だった。

この前は目の前で名前間違えてごめんね。

あと今も驚かせたみたいでごめん。

「あの、えっとね、今日、チェリー、当番、だよね？」

ゆったり、というよりゆっくり、というよりゆうっくりな麻生独特のペースは、あいのりの喋り方みたいで、おれは結構好きだ。

けれど日野はあんまり好きではないらしく、麻生がおれに話しかけるといつも、気付くとどこかへ消えていた。

そういえばそんなときも、宇垣は日野についていくことはなかったっけ。

「ううん、今日は月曜日だから、当番は吉原だよ」

「吉原くん、なの？そっか、残念。」

「どうかした？」

「あ、ちょっとだけ、お話、したかったんだけど、当番じゃ、ないなら、別に、いいの。今日じゃなくても、いいから。」

「話なら今でもいいけど」

「ううん、できたら、図書室、みたいな、静かな場所、が、いいし、時間、取るほどの話でも、ないから、当番しながら、とか、でも、平気だし。明日は、チェリー、当番？」

「明日は吉原と二人で、かな」

「二人？そっか、なら、明日で、いいよ。」

「ん、わかった」

麻生の、小さくてか細いのに聞き取りやすい言葉に、おれが笑ってうなずくと、麻生も微笑んで、そのまま自分の席に戻った。

「麻生はおれのこと信じてくれてるのかな？」

「……さあ……？」

宇垣は首をかしげた。

相変わらずテンションが低いな、宇垣にしては。

——おれと二人だから？

そういえばこの前も、おれと二人で登校してる時、こんなかんじでテンションが低かったのに、日野が来た途端に元気になったし。

……おれ、宇垣に、嫌われ……いや、いやいやいやいや、そんなにおれがイヤなら、さっさと日野の方に行くはずだし、今おれの方にいるってことは、ねっ？

宇垣を見上げると、妙にばっちり目が合って、

「俺は信じるって言っただろ」

と言われた。

「うん。まあ宇垣にだけ信じられてもアレだけどね」

「うわっ、油断したトコに来るか、おのれチェリーめッ！」

おお。

いつもほどではなくても、宇垣の反応が期待通りで、おれはけけららと笑ってみた。

おれに、マジで吉原と付き合ってるの、という意味の質問をしてくるやつは、必ずと言っていいほど、質問ではなく確認のつもりで訊いている。それは今日一日でよくわかった。

「あっ、チェリー!!」

やつらは必ずそう叫んでおれにかけより、

「あのさ、理系クラスの吉原と付き合ってるって本当？」

と聞いてくるくせに、おれが否定すると、

「そんな隠さなかったっていいんだよ？」

とバシバシおれの背中を叩いてとっと逃げていく。

人の話を聞け。

思い込みで話をするな。

おれがいくら違うと言っても、それを信じてくれた人間は一人もいなかった。

しかも、この噂を面白がる人間ばかりではなく、どういうことかという、まあ、いわゆる、ファン、なのであろう。吉原の。

彼女らはつかつかとおれのもとへ早歩きで来て、

「特進クラスのチェリー……」

とおれをまじまじと見つめ、

「言っておきますけれどねっ、あたし、男には絶対に負けませんか!」

と高々に宣戦布告したかと思うと、くるりときびすを返し、それはもう全力疾走である。

速い。

人差し指でおれを指したり、白い手袋をおれに投げつけたりと、言葉や行動は実に様々だが、彼女らが吉原にメロメロであるということは共通しており、おれはそれをひしひしと感じて、その度になぜか罪悪感を覚えるのだった。

勘弁してくれよ。

また、宣戦布告はせずとも、おれの目の前でいきなり号泣し出して、「今までずっと、チェリーのこと信じてたのにい！」

とかなんとか、いや今のおれを信じてくれよ、と言いたくなるようなことを叫んだのち、やはり全力疾走で逃げていく生徒もいて、まだ昼休みだというのに、すでにおれは、めっちゃくちゃ疲れている。まだ昼休み。

先週までのおれなら、よっしゃもう昼休みだ、これで一日は終わったも同然だぜ、と思っていたのに、今日は、まだ昼休み、である。それくらい疲れている。

現在進行形で疲れている。

「確かに貴方、中々綺麗な顔立ちをしていらっしゃるけど、私、遠慮はいたしませんからね」

どこのお嬢様かというような、刺々しくもご丁寧な言葉だが、やはり今日だけで何度も聞いた宣戦布告だ。

「……あのさ。おれ、吉原とはただの友達で」

「ではチェリーさん、ご機嫌よう」

……………。

そういや今の時間、ごきげんようやってるんだよな。今日は当たり前出るかなあ？

なんちって、現実からの逃避行。もちろん道連れは吉原だ。

いや、吉原の道連れがおれか？

まあどっちでもいいや。

ていうかもうどうでもいいかも。

……………。

ってだめだめだめだめ、諦めちゃダメだ。

危うく自分に流される所だった。

吉原には今朝以来会ってないけど、多分吉原も、おれと同じくらい疲れているはずなのだ。

おれが諦めて否定するのを止めてしまったら、困るのは吉原なんだ。

だから、がんばらなきゃ。

あ、いや、宣戦布告が無い分、吉原はおれほど疲れていないのか？
ん？

もしかしておれのほうが余計にがんばってんのか？

……不公平だ。

そんなのって不公平だ吉原に文句言ってこなきゃ。

とまあそんなかんじで、なんとなく使命感に駆り立てられたおれの足は、無意識のうちに、図書室へと向かっていた。

カウンターの向こう側で、吉原は新しい本に夢中だった。

その姿の格好良さと、読書中の人間独特の近寄りがたい雰囲気、一瞬声をかけるのをためらったおれは、その一瞬がまずかった、数人の女子生徒に気付かれ、ああどうしよう、とおろおろしているのに読書中の吉原は全く気付かない。

驚異的、というより脅威的な集中力。

実は気付かないふりしてるだけだったりして。

「ねっ、吉原くんに会いに来たの？」

にやにやと笑いながら尋ねてくるのは、ネクタイの色から推測するに三年生の、少しオトナっぽいお姉さんだった。

「いや、まあ、ええと」

吉原に会いに。

それはそのとおりなのだが、ここで簡単に肯定してしまつてよいものかと、聡明なおれは言葉を濁すが、女というのはなんと面倒で自分勝手な生き物なのだろう、まったくもう。

「やっぱりそうなんだあ？」

と自分のいいように解釈し、また心底嬉しそうにはしゃぐので、おれとしてはやはり、そこまで喜ばれちゃったら、ほら、否定とかできないじゃん。

「う……あう」

「あつ、そうよねーっ、大丈夫よチェリーくん、あたしたち、二人

の邪魔するつもりはさらさら無いの！ほらあ、気にしないでいってらっしゃい♪」

かなり強い力で背中を押されたおれは、何がそうよねーっなのだからよくわからないまま、仕方なくのろのろと吉原に近寄った。しかし吉原は相変わらず本の世界で、おれに気付く様子は無い。

ほら愛が無いでしょ、とお姉さんたちを振り返るも、ウインクされるだけだった。なんだそれ。

「よ……吉原？」

「うん？…ああ、お前か……」

おれを見上げた吉原は、露骨に嫌そうな顔をした。

「なんで来たんだよバカ……」

「ぼっ……ごめん」

バカ、と言われたことに反論できなかったのは、お姉さんの期待を裏切れないおれは本当にバカなのかもしれない、と思ってしまうからだった。

でもそれを言ったら

「自覚はあるんだな」

なんて言われてしまいそうだから言わない。

「あんな神波」

「うん？」

吉原が声をひそめ、反射的に顔を近づけようとしたが、お姉さんたちと目があって、そんなことをしてはお姉さんたちの思うつぼである、とおれは賢明な判断を下し、しゃがんでカウンターの高さに視線を合わせるだけにとどめた。

「今おれたちが一緒にいるのはまずいってのは、お前でもわかるよな？」

「まあね」

「何だその得意気なかんじ。わかってんなら来んなよ」

「ええ？それじゃあおれは図書室に来ることも許されないのかあ？」

「俺が当番でここにいる間はな」

即答されてしまった。

本当は吉原を目的に来たので、長々と文句は言えないが、なんだか理不尽な気がする。

「じゃあ明日も？麻生と約束しちゃったんだけど」

「約束って、何の？」

「なんかね、話がしたいって。明日はおれ当番だから、その時話そうって」

「昼休み？放課後？」

「ええと、それは決めてないと思う」

「じゃあ明日の昼休みはお前が当番な。俺は放課後やるから」

おれが答えると、吉原は迷わずそう言った。

「吉原、放課後でいいの？」

おれだったら絶対に、早く帰りたいから、迷わず昼休みを取るのに。

「遅くなるとバスが無くなるんだろ？」

「え？バス？」

吉原が急におかしなことを言い出すので、おれはつい聞き返してしまった。

そう、おれは忘れていたのだ。

「……バス通じゃなかったのか？」

「何言っ……あ」

数日前、放課後まで残りたくないがためについた嘘、咄嗟に言ってしまった言い訳を。

「ええと、うん、そう、そうだよ。ありがと吉原」

いぶかしげにする吉原に、精一杯笑顔を作って、半ば逃げるように図書室の出口に向かった。

出るときにすれ違ったお姉さんの目は、色々なことを語りすぎていた。愛想笑いをしようとして失敗し、おれは下を向いて歩くことにした。

そのせいで途中、この間名前を思い出せなかったイケメンとぶつかったけれど、謝る前に逃げられた。

どうしたんだろう。

玄関の扉を開ける。

そして閉める。

「あ、おかえり、お兄ちゃん」

「合格!!」

おれが嬉々として叫ぶと、ごく自然にリビングから出てきた母親は、きよとん顔でおれに尋ねた。

「……何に？」

「よかったよ母さん、今のはよかった！」

「何が？」

「ああよかった、本当によかった、一週間諦めずに言い続けた甲斐があったよ母さんっ」

「何を？」

長かった……とても長かった、この一週間は。

毎帰宅時、今日こそはちゃんとこの母親が扉の開閉音に気付いてくれるだろうか、とどきどきしながら扉を開けては我が母に絶望したものだっただ。

それが、今日、この日、ようやく！

「これで神波家は安泰だ！」

「……………そう、よかったね。あ、ご飯7時ごろにはできるから、もう少し待ってねえ」

言いながらすでに母さんは、玄関の前を通り過ぎ、そのまま和室に入っていた。

「うんっ、あ、ただいま！」

おかえり、の返事をしていなかったことに気づき、おれは和室に聞こえるように大きな声で言った。

「あいりっ、ただいまぁ!!」

これからの平穏な神波家に思いを馳せながら、おれは自分でも驚く

ほど爽やかに、リビングに突入した、が、

「……おにーちゃんだあ」

ちらともおれに目を向けることなく、あいりは酷いローテンションで呟くように言った。

いや、これはやはりいつものことなのだ。むしろ今日は、ゲームをしているのに気付いてくれたのだから、いつもより良い方なのかもしれない。

「ええと、着替えてくる」

あいりは何も答えなかったが、おれも答えてもらうつもりはなかった。返事を待たずにリビングを出た。

二階に上がり、制服のままベッドに寝転がって、赤いネクタイを緩めながら、今日のことを思い出し、おれは深くため息をついた。

久々の厄日だった。

今年に入って一番運勢の悪い日だったかもしれない。

どうしてこんなことになってしまったのか。

ああそうだ、一番悪いのはあの胡散臭い新聞部の報道を信じてしまった皆だ。まったくもう。

もっと辿れば、あんな新聞を作成し掲示板に貼り付け晒した新聞部が諸悪の根源ということになるが。

もっと辿れば、あんな写真を新聞部に提供した望月が諸悪の根源ということになるが。

もっと辿れば、あの場、あのカラオケに、望月なんて誘ってしまった、

………。

「おれじゃん」

おれか？

悪いのはおれなのか？

いや、けど、あんなノリでキスとかしやがった吉原も悪い。

……あれ、でも今考えるとなんかおれからしたような気が……。

けどあそこに吉原さえいなければ、こんなことにはならなかった。

だから悪いのは、カラオケに吉原を誘ってしまった、

.....。

「おれじゃん」

おれか？

全部おれが悪いのか？

いや、けど、元々吉原を誘おうと言い出したのは日野だったはずだ。

「三人じゃなんとなく寂しいね」

「そうかな？三人で充分だと思うけど」

「でも缶蹴りとカラオケは人数多い方が楽しいもん。ねえチェリー、だれかもう一人か二人、誘わない？」

「え？宇垣のほうが顔広くない？」

「そうでもないでしょ。ね、宇垣くん？」

「そっ.....そっすね！」

「宇垣ちよい泣いてない？」

「最近チェリー、誰と仲良い？」

「んつと.....最近.....あつ、吉原？」

「じゃあ吉原くんも誘おうよ！」

「わかった、じゃあ今度聞いてみるね」

「うん、お願いねー」

（回想終了）

.....。

「おれじゃん！」

おれか？

全てはおれが原因なのか？

そうなのだ、冷静に考えてみると、カラオケ参加者の追加候補に吉原を挙げたのも、さらに望月を勝手に誘ったのも、さらに酒なんか飲んで酔って吉原にキスなんてしたのも、みんなみんな、おれなのだった。

これはまさしく自業自得というやつであり、当初吉原のせいだと思われるれていた事実も、元はといえばおれのせいで、だから、おれが吉原の道連れなのではなく、吉原がおれの道連れだったのである。
ごめん吉原。

「お兄ちゃん？ ご飯いらないのー？」

「いつ、いるよ！！」

階下からの母親の声に、おれは慌てて返事をし、制服のままで階段をかけおりた。

通常なら冗談だと思われる発言も、神波家の女性陣は通常でないため、冗談じゃない事態になってしまふこともしばしばあるのだ。

おそらく今の母さんの言葉も、半分は冗談だったかもしれないが、おれが返事をしなければ、当然のごとくあいりと二人でおれの分まで食べ尽くしてしまったに違いない。

結構前にもそんなことあったし。

「お兄ちゃん、まだ着替えてなかったの？」

リビングに再入場したおれに、母さんは一瞥してから問うた。おそらくその質問に、大した意味は無いのだろう。

「ん、ちよつと考え事してて」

「ふうん。どうでもいいけどさ、若いうちから悩みすぎちゃだめだよ？ 将来ハゲちゃうから」

「わかったわかった」

適当に返事をしながら、食卓の上に二人分のナイフと三人分のフォークを揃えるおれに、母さんはさして興味も無さげだった。

息子の悩みにも関心を示さない母親ってどうなの。

まあ、こうでもなきゃ、あいりの母親なんて務まらないか。

いや、逆に、この母親に育てられたからあいりはこうなったのか？

「……でもそしたらおれだってあいりみたくなっちゃうよな」

「あ、おにーちゃん」

おれの独り言は聞こえなかったらしく、あいりは反応することなく、ゲームから目を離さずに訊いてきた。

「おにーちゃんさあ、もしウチにかえれなくなったりしたトキ、とめてもらえるアテってある？」

「へ？」

相変わらず見事なまでに突拍子が無え。

「うーん……リョウさんに頼るわけにもいかないしなあ……宇垣とか？」

「あー、うがきクンはパス」

パスされた哀れな宇垣以外に、おれなんて泊めてくれる人、いるのだろうか。

「ええと……あ、吉原なら、頼めばOKしてくれるかな？」

吉原、意外と押しに弱いし。

と、そこまで考えて、しまった、と気付いた。

これでは数日前のおれの二の舞ではないか。

しかしそれは仕方無いことだった。なぜならすでに吉原は、おれの中で時の人となってしまっているのだから。

「よしはら？だあれ？」

「お兄ちゃんにそんな友達いたっけ？」

口を挟んできた母さんと、質問している身でありながらゲームをやめようとしないうちを交互に見て、

「最近できた友達だよ」

と答えた。

友達、でいいんだよな？

「最近できた友達なのに、泊めてくれんの？」

簡単でいて手抜きに見えない、今流行りのなんとかという人が紹介していたという、特製オリジナルハンバーグを並べながら、母さんは首をかしげた。

あいのりのおかしい質問にはツツコミ無しなのに、なんでそんなことにツツコんでくるんだ、この母親は。

「うん、多分。あーでも今のタイミングだとちょっと厳しいかもなあ」

「今のタイミングだと？どうして？」

「いや、ちょっとね、色々あって」

「ふうん、そなんだ。あいり、ご飯食べよ」

「うんわかったあ」

うなずきつつもやはりゲームをやめる気配の無いあいりをよそに、母さんはさっさとハンバーグを食べだした。またいただきますを忘れていやがる。

「いただきます。……で、いきなりどうしたの、あいり？まさかとは思うけど、おれがウチに帰れなくなるような、おれでも知らない大事な情報を握ってたりはしないよな？」

「うーん……んーう、しないでもないかもねえ？」

DSの画面をタッチペンでぐりぐりしながら、あいりはのろのろと食卓についた。そういえば、いつのまにあいりのDSは、もとのぽかぽかする姿に戻ったのだろう。

「んーっ？なにになにあいりちゃん、何その意味深なかんじの言い方？」

「母さん、あいりはいいつも意味深だよ」

「うふふー」

おれが母さんに言うと、あいりはいつものようににぱっと、しかしどこか含みありげに笑った。

まるで望月みたいに。

「……どうせ意味は無いんだろ？」

「うふふー」

一抹の不安を隠しながら訊くが、あいりは同じような笑みで答え、逆手に握ったピカチュウのフォークをハンバーグに刺して、豪快にかぶりついた。

「ねえ、このハンバーグどお？美味？」

「ん、まあ、おれは好きかな」

「びみびみー」

「そう？よかったあ」

父さんが見たら気絶しそうなぐらいに行儀の悪いあいりの食べ方にも、母さんは何も言わずに、初めて作った料理の評価に喜んだりなんかしている。

ゆるい。

このゆるさがあいを育てたのか。

「あ、そうだお兄ちゃん」

「ん？」

「明日ね、なんか役員会あるらしくて。だから晩ごはん、あいと二人だけだけど、お願いできる？」

「また？この前もじゃなかったっけ」

「そうなんだよねえ。まああたしも一応委員の一人なわけだし、参加しないわけにもいかないから」

母さんもきつとおれと一緒に、推薦で面倒な役を押し付けられたのだろう。やっぱ親子だなあ。

「そんなわけだから、よろしくね、お兄ちゃん」

「了解」

おれが言うと、母さんはあいまいたいにぱつと笑った。

そういや先週の役員会の日の晩ごはんも、弁当だったけどハンバーグだったな、と思った。

隣ではあいが、ぼろぼろになったハンバーグを弄んでいる。

吉原がおれの中で時の人となっているように、おれもまた、全校生徒の中で時の人となってしまうているらしい。

今まではまだ二年生の間だけの知名度であったのに、昨日だけで噂は一気に校内を駆け巡り、おれに対する皆の認識を歪めた。嫌な現実だった。

現実から目を逸らしてはならない、といくら自分に言い聞かせても、もう、なんというか、やだ。もうやだ。こんな現実の中で生きるくらいなら夢の世界から帰れなくなるほうがまだ。ちくしょう。

「チェリー、大丈夫？ 大変そう、だね。」

麻生のふわふわした声が、おれの耳元でそう言った。

大変そう、なのではない。

大変なのである。

「まあね……あ、ところで麻生、話って何？」

昼休みの図書室。今日はいつもより人が多い。

というか、入口で回れ右する生徒が多い。

特に女子生徒が。

ああ、だんだんわかってきた。

彼女らはおれと吉原が二人で当番するのか確かめに来たのだ。

しかし残念だったな、おれと吉原は事前に打ち合わせをし、二人で当番をすることのないようにしてあるのである。ふふふ。大いにがっかりしたまえ。

「ええと、ね、チェリーって、妹ちゃん、いたよね？」

「あ、うん、いるよ」

あいりについて麻生に話したこと、あったっけ？

「あのね、まーくんがね、この前、家出、しちゃったんだけど、」

「まーくん？」

「うちの、お兄ちゃん。」

「へえ……」

麻生に兄ちゃんなんていたのか。初耳だ。

しかもまーくん……。

それって、おれがあいりに、チェリー、なんて呼ばれてるようなものだろう？

……………。

まあ、悪い気はしないかもしれないけど。仲良しさんってかんじで。

「お兄ちゃん、て、家出、するとき、どんなところに行くのかな、って、思っ、て、ね？」

「……………はあ、お兄ちゃん、ですか」

それは、人によるんじゃないかねえの？

「まーくんね、ちよっとだけ、子供っぽい、ので、チェリーだったら、丁度いい、かな、って。」

どういう意味だ。

おれが子供っぽいと言いたいのか？

……なんちゃって。

いかんいかん、なんかおれイライラしてる。

これはよくない。麻生に当たっても仕方がないのに。

「んつと、ね、うちが、悪くって。その、まーくんのね、プリンを、ね、うちが、食べちゃった、から。」

「うんうん」

「あ、けど、ね、食べていい、って、言ったのは、あっくん、なんだ、けど。」

「あっくん？ それもお兄ちゃん？」

「あ、うん、うちのお兄ちゃん、で、まーくんの、弟、だよ。」

「三兄妹なんだ？」

「そだよ。」

にこ、と麻生は笑った。

喋り方とかは子供みたいに拙いくせに、笑顔は大人っぽいよな、麻生って。

「そっかあ、麻生がプリン食べたから、まーくんは怒って出ていったんだ」

「うん、多分。」

それはまあ、麻生とあつくくんが悪いわな。

と言いかけて、麻生が傷つくかなあと思いつくのをやめた。

「けどさ、おれまーくんのこと全然知らないから、どこに行くだろうとか、そんなんわかんないよ」

「……そっか。」

麻生はそう言ったが、さして残念そうでもなかった。最初から期待してなどいなかったのかもしれない。

「まーくん、」

ただ、

麻生はちよつとだけ、寂しそうな顔をした。

「うちのこと、キライになった、のかな？」

「それは無いよ！」
と、

即答すると、即すぎたらしく、麻生は驚いたようにした。

麻生だから、結構、わかりにくいけど。

結構わかりにくいけど、

それでも、麻生が嬉しそうな顔に変わった、ということは、おれにもわかった。

「ねえ、チェリー、」

言いながら麻生は、ふと視線をおれから外した。

「んー？」

「妹ちゃん、可愛い？」

「そりゃあもう！」

胸を張って答えると、

「……ふふ。」

と麻生は笑った。

「ん？何？」

「ううん……うちも、」

ふるふると首を振って、イスの上なのに、麻生は膝を抱えた。かの天才探偵とは似ても似つかないけれど。

「うちも、まーくんとあつくんに、チェリーの妹ちゃん、みたいに、思われてたら、いいな、って、思ってる。」

おれもだ。

と、言いたかった。

おれもあいに、まーくんやあつくんみたいに思われてたらいいな、と思う。

けどそれは、やっぱり難しいかな？

だってあいにだし。

「そんなの当たり前だよ」

「え？」

麻生がこっちを向いたので、おれと麻生は目が合った。

「妹が可愛くないお兄ちゃんなんて、いないんだよ」

「………そっか。」

「そうだよっ」

うなづく麻生に、おれは肯定した。おれにとってそれは、息をするみたいに当たり前のことだからだ。

「ねえ、チェリー、」

「うん？」

「ありがと。」当たり前のことを言っただけなのに、麻生は安心してように言った。

「うんっ」

おれの言葉で麻生が元気になった。

そう思うと、なんとなくすごく嬉しかった。

「ねえ、チェリー、」

「ん？」

「これ、あげる。」

麻生はそう言って、一枚の紙を差し出した。

あらら、これはもしや、相談に乗ってくれたお礼、みたいな？
とちょっと期待してしまったのだが、それはそんな可愛いものでは
なかった。

『2年7組 神波 さん

カラフル の返却期限が過ぎています。至急返却して下さい。

担当 麻生紗希』

「……………え、何コレ」

「督促状。」

……………。

返却って、何を？

カラフルを。

カラフルってなんだっけ。

なんか聞いたことある気がするんだけど、ううむ、忘れちゃったぜ
え。

「本の、だよ。チェリー、まだ、返してない、でしょ。」

「本？おれ麻生に本なんて借りたっけ？」

「違うよ、うちじゃなくて、ここ、だよ。」

……………ここ？

ここって、

ここってどこ、っていったら、そりゃあ、ここなわけで、それは少
し推理するだけで容易に理解することができるのだけど、だがしか
し一つだけ、ものすごく重大な否定材料が存在するため、いやそれ
はありえん、とおれが判断するに充分すぎるその材料を、軽い抵抗
のつもりで、おれは麻生に言った。

「おれ図書室で本借りたことないよ」

「それはチェリーが忘れているだけだよ。」

たちまち打破された。

「だって、日付、一年前だもん。」

大分昔だった。

「けどおれ本当に借りた覚え無いよ？」

「だって、チェリー、大事なことほどすぐ忘れちゃうでしょ。」
「う」

ことごとく言い返されてしまったおれは、真理を突かれているぶんが悪く、言葉に詰まって口をつぐんだ。

「うちも、これが、お仕事、だから。」

カラフル。

家に無かったらマジでどうしよう。

おれが真剣に、弁償するとしたらいくらになるんだろう、と悩み始めたその時、

その声は、聞こえた。

「ねー来てみなよ、本当に女のコがいるんだって、南中の制服着たすっごいカワイイ小学生!」

「だから、それ小学生じゃなくて中学生なんじゃないの?」

「だってどう見ても4年生くらいにしか見えないよ? あんなちっちゃい中学生いないって!」

「……………あいり?」

おれは一瞬、絶対にあり得ないことを考えた。

いや無い、それは無い。

おれがカラフルを借りているという説より、まーくんが麻生を嫌いになるより、もっともつとありえない。

だって今の時間、

平日の昼間だぞ?

「だいたいさ、こんな時間に小学生や中学生が、なんで高校にいるのさ」

そうだよ。

中学生のあいりは、当然、学校に行っている、に、決まってるじゃないか。

けど、

「知らないよそんなのオ。ねえ一緒に行こうよー」
でも、

「ハイハイ。で、どこだっけ、そのコがいるのは……3階？」

小学4年生に見えるくらい小さくてすごいカワイイ南中の女の子？
そんなの、

あいに以外に、ありえないし。

麻生の呼び止める声も、すれ違う生徒たちの驚く声も無視して、おれは長い廊下を、全力で駆け抜けた。

歩き慣れた廊下のはずなのに、なんだか妙な感じがする。こんなに長かったっけ？

「――あいり！」

3階にようやくたどり着いて、

「あ、おにーちゃんだあ」

いつものようににぱっと笑うあいりを、視界に入れた。

あいり。あいりあいりあいり。おれが間違えるはずもない、おれの可愛いあいりだ。あいり。どうしてこんな時間にこんなところに。

……うふ、可愛いなああいり。……じゃねえよ、ええと、学校、中学校はどうしたんだ？

南中はおれも通っていたからわかる、まあおれの記憶が正しければという条件も必要になるが、今の時間南中は、そろそろ5限の予鈴が鳴る頃である。授業始まっちゃうよあいり。しかも5限は体育だから着替えてしかも体育館に移動までしなきゃいけないんだよ。こんなところで油売ってる暇は無いんだよ。

なんて、なんでおれ自分の5限の授業憶えてないくせにあいりのは憶えてるんだよ、記憶力はもっと有効に使っての。まああいりのことを憶えるのに無効なことなどないのだろうけど。

「あ……あいり……ええと、なん……なんで？」

とりあえず、きいてみた。

無駄だということくらい、わかってはいたけれど。

「うーん、なんでだろうね？」

あいりの口調はおちよくなるようで、なのに本当に不思議そうな顔だ

った。

「じゃあ、ええと、学校は？」

「うーん、どうしたんだろ？」

訂正、おちよくるよう、なのではなく、おちよくっているのである。
あの女子生徒が言うとおり、小学生にしか見えない中学3年生は、
円らな瞳をおれに向けて首をかしげた。

「おにーちゃんは？なにをそんなにいそいでいるの？」

ゆっくりだけど息継ぎはしない、少し舌足らずな、普段通りのあいの喋り方。

「……さあ……なんでだろな」

あいの台詞を真似てようやく、自分が息を弾ませているのがわかった。

図書室からここまで、たったそれだけの距離を全力で走っただけなのに。

「うん、ま、ヒトのこーどーのりゆうなんてそんなもんだよねえ」

「あー……、そだね」

けどそれは、今この時間にあいりが中学校ではなく高校にいる理由にはならないだろう。

「……あいり」

「んー？」

「帰りなさい、学校に」

おれがため息とともに言うと、あいりは、

「なにいつてるの、おにーちゃん？ここがガッコーだよ」

と相も変わらず白々しく答えやがるのだった。

「ここは高校だろ。あいりはまだ中学生なんだから、中学校に帰るんだ」

「やだよ、せっかくここまできたんだもん、もちよつとあそんでから」

「だめだ。帰りなさい」

おれとあいりが他愛の無い兄妹の会話を繰り返しているうちに、人

だかりは随分と綺麗に、おれとあいりの間に花道を作ってくれていた。道を開けた観客の間を通って、おれはあいりに歩み寄る。

「やだあ」

「やだじゃない、帰——」

そう、おれは油断していたのである。

あいりの細い腕を掴んだおれは、ひどく久々に、

あいりの暴力を、喰らった。

観客は一斉に声を上げた。無理も無い、こんないたいけな少女が、こうも容赦無く、優しい兄の腹に肘打ちなんぞを入れるなんて、あいを知る宇垣以外に、誰が予想できただろう。

「あいりはまだもくてきをはたしてないんだよー」

畜生、なんでだろねとか言っときながらちゃんと目的ってもんがあるんじゃないか。嘘ばっか言いやがって。

よろめくおれを余所に、あいりはきよろきよろと周囲を見回した。何かを探しているようだが、何も探していないのかもしれない。

「うー……あいり……」

「チェリー」

がし、と、

倒れかけたおれは、後ろから誰かに抱き込まれた。

おれの身体を支え、おれのあだ名を呼んだハスキーボイスは、

「おお……津田ちゃん」

そうだ、今日の5限はたしか、彼女の教える日本史だった。

「いよう、やっとなあたしの名前覚えてくれたかい」

「やだなあ、おれが津田ちゃんの名前を間違えたことなんてちよつとしかないでしょ」

「ちよつとじゃねえよ、大有りだよ」

「大有りかあ」

束ねた髪に伊達眼鏡、真っ赤なジャージに薄いメイクという、某極

道先生をフルに意識したナリをしているそのかつちよいい教師は、挨拶もそこそこに、きよろきよろどころかぐるぐるし出したあいを
見て、

「ところでチェリー、あの美少女は一体何だい」

と眉をひそめた。

「あいりだよ。可愛いでしょ」

「自慢はいらん。えー、あ、最終兵器的な？最終兵器彼女のな？」

「元ネタはわかんないけどさ、あいりは最終でも兵器でも彼女でもないよ」

「そおか？チェリーに一撃をお見舞いできちゃうくらいだから、相
当なのかなあと思ったんだけどな。あ、そういやお前身体大丈夫か
？」

「心配するの遅いよね……まあ大丈夫だけどさ。慣れてるし」

「慣れてんのか……どんな日常をおくってんだよお前は」

「んー、や、最近はこのうのなかったんだけどさ」

言ってしまったから、あれ、そういえば最近っていつからいつまで
のことを言うんだったつけ、と考えた。

「おにーちゃん」

と、

あいりはおれに駆け寄ってきた。

それを確認した津田ちゃんは、ひいとおれから一歩離れた。巻き
添えはごめんだぜ、という彼女の心の声が聞こえた気がする。

「あいりはひとをさがしているのだ」

「……人？」

「よしはらクン」

あいりはいたずらっぽく、にぱっと笑った。

「……吉原？」

「おにーちゃんはいつからヒトのゆうことをやたらとくりかえすう
つーしいキャラになったの」

「……ごめん」

「よしはらクンはどこ？」

しゃがみこみ上目遣いで、それはもうとびきり可愛く、あいりはおれに尋ねた。

どうしよう。

是非ともあいりに吉原を差し出したい。

「でもなんで吉原なの？」

「どうしてもおはなししないといけないことがあるんだよ」

「お……お話？」

あ、また繰り返しちゃった、とおれが考えると同時に、あいりにはぱっと笑って、

「おにーちゃんにはカンケーないはなしだよ」

おれを、突き放した。

多分、周りで見ていた津田ちゃんや生徒たちには、わからなかっただろうけど、

おれにとってそれは、酷く冷たい言葉だった。

「おーい美少女、ちよいといいかい？」

津田ちゃんが口をはさむと、あいりは津田ちゃんを見上げた。あいりは自分が美少女だと自覚しているのだ、と、おれは今初めて知った。

だが、おれの頭の中は、それどころではなかった。

「お嬢さんのお探しになっている吉原クンとやらは、もしやこの少年のことかい？」

津田ちゃんの小さい体に比べて、だいぶ大きな吉原の首根っこを、津田ちゃんは人混みの中から掴み、引っ張って来たのである。

吉原は観念したように、大人しく津田ちゃんに引きずられていた。いつものおれなら、そんな可笑しな光景に、けらけらと笑えたかもしれない。

けれどおれは、笑えなかった。

あいりが吉原に何かを言うのも、吉原があいりに何かを答えるのも、おれの耳には入らなかった。

おれはようやく、あることを思い出していた。

その時になって、ようやくと。

それは本当に、どうしようもなく、遅すぎるものだった。

そう、

吉原もあいりのことが好きだったのである。

「……………あいは？」

なるべく感情を抑えようとしたら、思ったよりも低い声が出た。吉原はおれと目を合わせようとはしない。それが余計に、おれの心をもやもやさせた。

「帰ったよ」

おれには何も言わないで。

本当にあいは、吉原に会うためだけに来たのだ。

「あいら、ええと、何だって？」

「うん？ ……ああ、まあ……」

うう……その曖昧なかんじが、なんか、好かんのだ。

「まあって？ あいら、吉原に何か用があったんでしょ？」

「用があったっていうか……たいしたことでは……あ、神波、すまん、前に言ったこと、訂正する」

「え？」

「あいらが……」

そこまで言って吉原は、周囲のギャラリィを見て眉をひそめた。

それとほぼ同時に、おれは吉原が話を逸らしたことに気付いたが、あいらが、の続きが気になって黙っていた。

「あいらが、お前を拒否できなかった、とか言ったこと」

吉原は声をひそめ、おれに耳打ちした。

そんなこと言ったっけ？

「あの子が拒否できなかったなんて、なんというか、……………ありえないな」

「あいらは嫌ならイヤって言うよ」

「だろうな。というより、イヤの一言で済むのか？ ……あんな攻撃的な子だとは思わなかった」

攻撃的な子。

おれへの肘打ちのことを言っているのか、それとも吉原も同じような暴力を受けたのか。

「お前、大丈夫だったか？モロにくらってたけど」

「……別に、ヘーキ」

「……何怒ってんだよ」

「別に怒ってないもん」

ため息混じりの吉原の声に、おれは少しだけムキになって言い返した。

吉原はおれを子供扱いする。

子供だと思っているに違いない。吉原のおれに対する言葉はいちいち、子供をあやすみたいにお優しい。おれを見る目だって、子供か弟でも見るようで、前からずっと、

「……前からずっと気に入らなかったんだよ」

「………うん？」

「どうせおれはさあ」

堰を切ったように、とはこういうことを言うのだろう。

「どうせおれはチェリーだよ、天然記念物で絶滅危惧種で、ガキで幼稚で子供だよ！」

「………は？」

目を丸くする吉原に、おれの苛々は頂点に達した。彼には自覚さえ無いのである、おれを子供扱いしているという自覚さえ。

「どうせおれは！吉原みたいにかっこよくないし、吉原みたいに頭よくないし、吉原みたいに大人じゃないし、吉原みたいに格好よくゴールも決められないし、吉原みたいにはぱっと本の貸出しもできないし、吉原ほど色んなこと知ってたりしないし、吉原ほど歌も上手くないし、人の名前は間違えるわ、元々無いへそくりを探し回るわ、知らなかったとはいえ酒まで飲むわ、しかも酔って男とキスカしちゃうわ、そりやもうおれは人として最悪と言えるかもしれないけどさ！！」

「え……ちよっと待て神波、もしかしてあの写真、本当に合成とか

じゃなくて、おれら、本当にしたのか？」

「今そんな話してないだろ！！」

「いや、でもここ結構重要なポイントだぞ」

「何だよここテストに出るからノートにメモっとけよみたいな！出ないじゃん！！」

「そりゃテストなんかに出やがったら人権侵害以外の何物でもないけど」

「おれだってさあ！！」

つい吉原の胸ぐらを掴むと、吉原は驚いたようにおれを見下ろした。

「おれだって……吉原みたいに、なんでもできるようになりたい……」

ああ、

これがおれの本音なのだ。

羨ましいのである。

吉原は少女マンガに出てきそうなくらいに完璧で、だから、あいらだって、

おれなんかよりも、吉原を選ぶに決まってる。

「吉原は、ずるいよ」

“完璧”そのものを、こうもまざまざと見せられてしまったら、おれじゃなくなっちゃって、めっちゃくちゃへこむだろ。

「……ずるいのはどっちだよ」

と、

吉原は呟いた。

「……お前」

胸ぐらを掴み返され、おれは戸惑い、吉原を見上げた。

「お前は一体、どれだけ努力してるって言うんだよ？」

「………え？」

迫力と声の温度差におれは、自分がびくっとするのを感じた。

「ど……りよく？」

「何が俺みたいになりたいだよ、ロクに努力もしてないくせに」
憎悪？

嫌悪？

敵意？

吉原の言葉に何が込められているのか、わからない。

「何にも努力しないくせに何だってこなす……何なんだよお前、何がずるんだよ……馬鹿にしてんのか？」

「よ……吉原？」

「俺の方が何倍も努力してんだよ……本当なら、もっと差が出てもいいくらいだ」

低く冷たい声は、俺のすぐそばでそう言った。

「っ……放せよ、吉原」

おれを見下ろす吉原は、おれを侮蔑するみたいな目をしていた。

そんな吉原の態度が、
なんだか無性に悲しくて。

「吉原なんか嫌いだ」

まるで心に無いことさえ、
口からあふれた。

ぱちん、

と乾いた音。

左頬に痛み。

——ひらてうち？

「な……にすんだよ」

吉原に叩かれた。

こんな痛み、どうってことない、はず、なのに。

「……………」

吉原ははっとしたように手を引っ込めて、おもむろにおれを解放した、が、すぐに吉原の目は、もとの冷たいものに戻ってしまった。

「……………」

ぶん、とおれの拳が宙を掻いた。かわされたことに驚く間も無い。

反射的に反撃しようとする吉原の一撃は、おれの頬をかすめた。

「な……何、ケンカ？」

「吉原とチェリーが？」

「うん？ 痴話喧嘩？」

「先に手え出したのは吉原くんで……」

「その前にチェリーが……」

周りがなんだか騒がしくなりはじめたが、おれにそんなのを気にする余裕は無かった。

「ま……待て、かん——」

吉原の言葉は途中で途切れた。

少しだけ焦りの表情を見せた彼の腹、丁度おれがあいりに肘をもらった位置に、おれは思いつき、回し蹴りを入れたのだ。

「っ…………ぐ、う」

「あっ」

よろめく吉原の気持ちはよく解った。

おれもさっき、半端なくキツかったから。

「…………ええと……」

吉原とはいえ、あのでたらめな攻防の動きは、おそらく素人だろう。素人相手にあんな的確な蹴りを入れてしまったことに若干の申し訳なさを覚えながら、しかしここで謝るのもなんとなくカッコ悪い気がする、などという考えも頭をよぎり、どうすることもできなくなつたおれは、一瞬おろおろしてから、

「い……いーだっ！」

と言いついて、逃げた。

振り返らなかつたから、吉原がどんな顔をしていたかはわからな

ったけれど、追ってこなかったってことは、つまり、そんな顔をしていたのだろう。

図書室に行けるわけがなかった。

図書室じゃ、放課後に吉原と出くわすということはわかっているから。

家にも帰れなかった。

今あいに会うのは、なんとなくためらわれたから。

だから、2年にもなって調理室の場所も判らないおれがたどり着くことのできた、数少ないサボりの定番の場所は、屋上だった。

実は屋上に来るのは、入学してから今日で二度目だ。ここにお世話になることが、おれにはほとんどないのである。

屋上に足を踏み入れると同時に、昼休みの終わりを知らせるチャイムが鳴ったが、もとより授業に出る気も皆無で、だからおれは気にせず、そのまま屋上をぐるりと一周してみようかしら、などと探検気分でいた、が、

「あれ……先客？」

入口からは見えにくい場所、そびえるフェンスの向こう側に、一人の男子生徒が立っていた。

「何してんの、授業始まったよ？」

おそらく彼もおれと同じで、授業に出る気はさらさら無いのだろうが、一応、彼に駆け寄り、声をかけてみた。

「…………と、あれ？」

振り返ったのは、見たことのある顔。

昨日すれ違いざまにぶつかってしまった、あのイケメンである。

「あー、あの時の」

「な……………なんで」

おれが彼を指差すと、彼はおれよりも数倍驚いたような顔をした。

「?…………ええと、そっち側、行ってもいい？」

なぜか呆然とする彼に、おれはとりあえず尋ねた。

そっち側、とは、もちろんフェンスの向こう側のことだ。

安全のために設置してあるそれも、高校生なら誰だって簡単に飛び越えることが可能なため、その意味を果たしていないということになる。

彼は少しだけ躊躇してから、

「……………どうぞ」

と頷いた。おれはそれを聞くより先に、フェンスをよじ上っていた。

「どーもっ」

フェンスの上から見下ろすと、一層地上と屋上との距離を感じた。人一人が座るにも充分なはずのフェンスと淵の幅が、妙に狭く思える。

そんな狭い足場に華麗に着地したおれは、フェンスを背に立つ彼の隣に腰掛け、足を外に投げ出した。それに続いて彼も座る。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あ、あのさっ」

沈黙に堪えきれずに、おれは彼に無理矢理話しかけた。話す内容さえ決めていないのに。

「ここ、いいトコだねっ？」

「え？……………は、はい、そうですね」

同じ学年のはずなのに敬語で答える彼。

……………。

……………。

「ええとっ、ここ、よく来るの！？」

「いえ……………あ、いえ……………その……………最近は、よく」

「へえー、そうなんだ」

「はい」

「……………」

「……………」

続かない。

会話が続かない。

なんか、なんというか、うるさい宇垣やツツコんでくれる吉原と一緒にいたら、次々と話が積み重なっていくのに……やはりおれは話し下手なのだろうか？

とおれが少しずつ落ち込み始めていると、

「あの」

と、彼から積極的に声を発してくれた。

「んっ、何？」

「その……ひとつ、聞きたいことがあるのですが」
聞きたいこと？

なんだろう。

「あの、その……」

「？」

彼の表情が大袈裟なほど真剣で、おれは首をかしげた。
彼は意を決したように、おれを見据えてこう言った。

「絶対に、100%、叶うはずの無い恋をしたとして……それは、諦めるべきなのでしょうか」

絶対に、

叶うはずの無い恋？

「あ、いえ、その、まだ恋と決まったわけではないのですが」

「それってどんな？」

「え、ど……どんな？」

「どんな恋なの？どうして叶わないの？勝ち目の無い恋敵がいるとか？それとも相手の性格からして叶わないだろうみたいなこと？それとももっと根本的に？」

たとえば、

妹だったりとか。

「その……どれも、ですが、やはり一番大きいのは」

彼が顔を逸らして初めて、おれは彼に詰め寄りすぎていたことに気付いた。

「……好きになってはいけない……なるべきでない相手、といいま
すか」

それはまさに、

今おれが苦しめられているような恋じゃないか。

「……そんなの」

声が、震える。

「そんなの、絶対に諦めんなよ!!」

自分に言い聞かせるみたいに、

おれは彼に怒鳴った。

「諦めちゃだめだよそれは……周りからどう言われたって、相手に
どう思われたってさ」

たとえあირიが、吉原を選ぶに決まってるとしても。

「あんたがその人のことほんとに好きなら、その気持ちを嘘にしち
やだめだ!」

おれはあირიが好きだ。

「……しちゃいけない恋なんて、ないんだから、さ」

好きで、いいんだ。

だから。

「だから、諦めんなよ」

おれも、諦めないから。

「は……はい」

「うん、そうだよ、ちゃんと頑張れよ!」

「は……はい」

「そりゃ、周りの人間たちは変な目で見てくるかもしれないけどさ、
ほら、あ、そうだ、親とかに反対されたなら、駆け落ちでも――」

……………。

駆け落ち？

「……そっか」

駆け落ちか。

駆け落ちか！

「そっか、そっかそっかそっか、そっかあその手があったかあ！！」

「は？あ………あの」

「いやいやいやいや、ありがとうねイケメンくん！うん、ホントありがとう！！」

「は？あ………はい」

彼の肩をつかんで揺さぶると、彼は危うく落ちそうになり、がしゅん、とフェンスを掴んだ。しかし閃いてしまったおれはそんなことおかまいなしに、

「ありがとなあ！！」

と言って、そのまま勢いでフェンスをぴよいと飛び越え、屋内へ入ろうとして、ぴた、と止まった。

「あのさ、ひとつだけ質問、いい？」

「はい？」

フェンス越しにおれは彼に、一番気になっていたことを聞いた。

「名前、なんていうの？」

一瞬、

彼は瞠目して、

「………なる」

と、答えた。

「なる？」

変わった名前だな、と思った。

ここでひとつ昔話をしよう。

むかしむかしあるところに、アイリスの花のような少女がいました。少女は見る者を残らず魅了してしまうほどに可愛らしく、しかしその小さな赤い唇でつむぐ言葉は冷たいトゲに覆われていました。

少女には兄が一人いました。兄はまだ子供でしたが、妹であるその可愛い少女を、子供なりに一生懸命に愛していました。少女の方は兄を愛していたのか、それはわかりませんが、決して誰にもなつかなかった少女ですから、きっと兄にも本当はなついていなかったでしょう。それでも兄は妹を大切に可愛がっていました。

ある日少女は兄に尋ねました。

「ねえおにーちゃん、どうしてひとにはふたつあるのかなあ？かしこいひとと、おろかなひと」

そう口にする少女は、考えるまでもなく前者に属す子供でした。そして兄は、自分がどちらに属すのかも判別できない子供でした。

兄は少女の問いに、懸命に考えて答えました。すると少女は、いつものようににぱっと笑って、

「じゃああいはこいをしてはいけないんだね」と無邪気に言いました。

「だってあირი、おろかなひとにはなりたくないもん」

兄はどう答えるべきか迷いました。少女の言うことに間違いなどひとつもありませんでしたが、それでもなんとなく、肯定してはいけないような気がしたのです。

だから、

だから兄は、どう答えることもできずに、口ごもるばかりでした。その姿は紛れもなく、恋をしてもなお愚か者でいつづけるであろう種類の愚者でした。

ノブに触れる前に、一瞬だけためらって。

「……………ただいまぁ……………」

と、

イタズラの見つかった子供みたいに、おれはそろそろと家に入った。いつものように父さんは帰りが遅いし、母さんは役員会。

つまり今、この家にいるのは、

「あ、おにーちゃんだぁ」

あいりと、おれだけである。

「ただいま、あいり」

一瞬だけおれを見て、すぐにDSに目を戻したあいりに、おれはもう一度言った。

言おう。

がんばって言おう。

何度だって頭の中でシュミレーションしたじゃないか。

「……………あのさ、あいり」

「おにーちゃん、あいりはおなかがすいたのだ」

「ハイ、今用意します」

ばかばかおれのばか、なんでこうもあいりに弱いんだこんちくしょう。ていうかあいりはわざとおれにこの話をさせまいとしているのではないのか？

「あいり」

「ん？」

「真面目な話をしよう」

「おにーちゃんのマジメはほんとにマジメなのかなあ？」

「そんなの決まってるだろ、あいりも真面目に聞いて？」

「おにーちゃんはマジメにごはんつくって？」

「いや、だからねあいり」

「あうー……………おなかがすきすぎて……………みみが、とおくなってきちゃ

……………くー……………」

「いや、寝るなって」

「いや、ごはんつくれって」

あいりは頑なに話を聞くのを拒んだ。もしかしたら本当にお腹が空きすぎて耳が遠くなっているのかもしれないが、あいりのことだから意図的に話題を操作しているとも考えられる。

「わかったよ……じゃあご飯食べたら話聞いてね？」

「はあい」

あいりはお手本のようなよいお返事をしたけれど、あいりのことだからきつと、食べる間にさっぱり忘れてしまうだろう。

けど食べてる間に言うのもなあ……。

「ナポリタンだね？ えへへー、ピーマンいれないでねっ」

「だめだよ。ちゃんと野菜も食べなさい」

「えー」

「じゃないと大きくなれないぞ」

「やだよ、せっかくこれで15まできたんだから、しぬまでこのままでもいいもん」

背後からのあいりの言葉に、おれは振り向いた。

小さな身体を、あいりは気に入っているのか？

そりゃあ確かに、現代日本においての小人割引というものは、少子高齢化社会とはいえ非常にメジャーな言葉である。電車でも映画でも、見た目が子供であるというだけで半額やそちらで利用できてしまうのだ。あいりがその矮軀を手放したがるらないのも頷ける。

けれど。

「そんなんじゃないか困るんじゃないか？」

「こまらないよお」

その即答さ加減は一体何なのだろう。

困ることが無いと断言できる、その根拠は一体どこにあるのだろう。

「本当に？絶対に困らない？」

と、おれがあいりに尋ねると、

あいりが、おれを睨んだ。

ああ、今のは確かにしつこかった。あいらがイラつくのも当然で、むしろその反応が無ければ、おれはあいを心配していただろう。

けど、おれは一瞬、そんな当然のことに、怯んでしまった。

おれの動きがびくりと止まったのを見て、

あいらは満足そうに、にぱっと笑った。

「どうしてこまることがあるっていえるの？ どうせあいらはもうすぐしぬのに」

と、
分かりきったことでも言うように、あいらはそう言っただけだ。
「……………そんな」

解ってはいたのだ、あいらがそんな子だということくらい。
あいらは多分、明日の存在を信じたことなど一度も無いのだろう。
もしかすると自分は、次の瞬間息をしなくなるのかもしれない、と
あいらがそんな冷めた子だなんて、生まれたときから解っていたの
に。

「そんなこと、言うなよ」

腕は自然と、あいらの小さな小さな身体を抱き締めていた。

昔々にそうしたように。

こんなに愛しい妹を。

あいらが苦しがることのないように、力いっぱい加減して、ぎゅうと抱き締めていた。

「……………くるしいよ、おにーちゃん」

そんなはずは絶対に無いのに、あいらはそう言った。おそらく嘘なのだろう。あいらは人に抱き締められるのが苦手だから、そんな嘘をついて、それで解放を訴えているのだ。

やろうと思えば突き飛ばして自由になることも簡単だろうに。
優しい子だな、と、思った。

「なあ、あいら」

言おうとして言えなかった言葉は、気が付けばすんなりとつむがれていた。

まるであいりに好きだと言った、あのときのように。

「駆け落ちしよっか？」

おれには見えなかったけれど、きっとあいりはその瞬間も、相変わらずにぱつと笑っていたに違いない。

まるでクラスの友達に、一緒に帰ろうとでも言われたように、

「べつにいいよー」

あいりは答えたのだった。

あのあからさまな伏線はこのためだったのか。

と思いながら、おれは今、吉原の住むマンションへと歩いている。

左手はあいの右手と繋がっていて、数歩先には吉原もいる。

この奇妙な、いや必然的な組み合わせに、正直おれは、少し戸惑っているところだ。

それは遡ること数分前、おれとあいが駆け落ちを決心して、必要最低限の荷造りで家を脱出し、そうして、さて出発するか、と歩き出したそのときだった。

「……よ……しはら？」

夏とはいえ時刻は8時を回っていた。外は真っ暗で、そんな中に佇む吉原の姿は、顔を識別するのも困難だった。今思うとどうしてそれが吉原だと分かったのか不思議でならないが、とにかくおれはそのとき、人影にそう呼びかけた。すると人影は手を軽く上げて、

「よう、……遅かったな」

と言った。

その声は紛れもなく吉原のもので、おれは吉原に駆け寄って、駆け寄ってから彼と喧嘩していたことに気付いた。

一瞬気まずさを覚えたおれをよそに、あいはにぱっと笑って、

「じゃあ、いこっかあ」

と言って進んだ。手を引かれるままにおれがあいについていくと、吉原は何も言わずにあいの先を歩きだした。

「あの……行くなって、どこに？」

軽くタイミングを逃したことは無視して、おれは先に行く二人に尋ねた。といってもあいには返事を期待しておらず、やはり吉原が答えてくれた。

「決まってるだろう、俺の家だ」

俺の家。

吉原の家。

吉原の家？

なんで？

「行くところ、ないんだろ？」

うわ、ばれていやがる。

「ならうちに来ればいい」

「……え、もしかして吉原泊めてくれちゃうかんじってかんじ！？」

「なんだそれ、なんちゃって女子高生か？」

「おれは女子じゃねえよっ」

「ハイハイ」

むう。

吉原が冷たい。

いや、冷たいのはむしろ普段の、そしておれが期待していた、そんな知つとるわ、的なツツコミのほうなのであるが、なんというか、ハイハイだなんて軽くあしらうようなのは、なんか、寂しいじゃない、と、そこでまたやっと、吉原と喧嘩していたことに気付いた。

ははあ、吉原クンったら、ちょっとばかり気恥ずかしいのね、とおれが完全に調子に乗ろうとしたところで、

「おにーちゃん」

あいりがおれを呼んだ。

「何？」

「よかったねえ」

まるで風船を貰った子供に言うみたいに、あいりはそう言うてにぱつと笑った。

『おにーちゃんさあ、もしウチにかえれなくなったりしたとき、とめてもらえるアテってある？』

予測、していたのだろうか、あいりは、こうなることを。

おれは一瞬そう思っ、けれど、そんなはずはない、と否定した。
なぜならあいりがその質問をしたのは昨日、つまり、おれが駆け落ちを思いつくよりも前のことなのだから。

で、今に至るわけだが。

吉原は、貧乏でもなく金持ちでもない学生が一人で住むような、ごくごく普通のアパートに、おれとあいりを案内してくれた。

一人で住むような。

そう、吉原は一人暮らしだったのだ。

「実家は今どこにあるかわからん」
らしい。

なんというか、吉原家の事情がいまいち掴めない。

もしかしたら吉原自身も掴めていないのかもしれないが。

吉原の部屋は二階の真ん中の扉で、その左隣、一番奥の部屋には、おれらよりも少し歳上のお姉さんが住んでいるようだ。吉原が鍵を開けている間に、左隣の部屋から、綺麗なお姉さんが出てきて、にこ、と笑いかけられた。その笑顔はなんとなく、おれとあいりの考えをすべて見透かしているように見えて、おれはつい目を逸らした。すると目を逸らした一瞬の隙に、お姉さんは家の中に引っ込んでしまったようだった。

1Kのそのアパートは、贅沢にも風呂まで完備で、とりあえずおれは風呂を借りることにした。あいりと吉原を二人きりにするのはいかなものかと、ちらつと吉原を見ると、さすが吉原、そのアイコンタクトを上手に受け取り、

「無えよ」

と頼もしい言葉で返してくれた。

だからおれは、安心して風呂に入ってしまったのだ。

今思えばおれはその時、二人の手のひらの上で踊っていたのだと思う。

いや、もしかすると吉原も一緒に、あいりの手のひらの上で踊らさ

れていたのかもしれないけれど。

しかも社交ダンスみたいなお洒落なもんじゃない、どっかの民族の伝統の踊りみたいなのやつ。吉原がそんなのを踊っているのだと想像すると、なんか、アレだが。

吉原は自分の意思で踊らされていて、

おれは自分の意思で踊っているのだと思い込んでいたのだ。

本当、ばかみてえ。

「ねえ、なんで吉原、おれらのこと助けてくれるの？」

「……、は？」

おれがもつともな質問をすると、吉原は目を丸くした。

「な……なんでって」

おれは吉原がノートの上で走らせていたペンを止めたのを見て、

「やっぱり……あいりのため？」

と聞き直した。

「あいりのため？ いや……あいりのせいで、だな。……なんでこのタイミングで俺なんだか……」

「？……どういう意味？」

あいりのため、と、あいりのせい、と、どう違うのか、今すぐ辞書を引きたくなったが、おれは我慢して吉原の答えを待っていた。が、

「……気にするな。こっちの話だ」

などと、吉原ははぐらかしやがった。

「えっ、何？ なになになにに！？」

「うるせえよ、こっちは勉強してんだ。お前もぼーっとしてないで予習くらいしたらどうなんだ？」

「だって、教科書とか全部学校に置いてるし……」

「……え、まさか本当に何もしてないのか？ 復習は？ 数学とかさ、自分が当たるところぐらいやってるだろう？」

「えっ、吉原、誰がどの問題当たるとかわかるの！？」

「そりゃ、出席番号で……え？ 数学河野先生だよな？」

「うん。……次から吉原にどこ当たるか予言してもらお……」

「お前、もしかして、数学とか当てられたらその場で解くのか？」

「皆そうしてるんじゃないの？」

おれが聞くと、吉原は大げさにため息をついておれを睨んだ。

「な……何？」

「うるさい近寄るな。俺は努力しないで上にいるやつが大っ嫌いなんだよ」

「……………ん？」

それって、おれのことじゃないよね？

「……………その上自覚が無いときた。出来の良さを自慢する奴よりよっぽどタチが悪いな」

首を傾げるおれを見た吉原は、憎々しげにそう言っ、再び英文をノートに連ね出した。もう相手にしてくれなくなったかと、

「ねえ吉原あ」

と用もなく話しかけると、予想に反し吉原は

「ん？」

と、目をノートから離さないながらも、ちゃんと返事をしてくれた。声をかけたからには何か話さなければ、呼んでみただけー、などと今の吉原に言っ、しまっ、ては、俺らは付き合いたてのバカップルか、みたいなおかしなツツコミを入れられそうだから、おれは必死に考えて、

「ええと、昼間はごめんね？」

と謝ってみた。

「ああまっ、たくだな……………いや、確かに俺も、悪くはあっ、たんだが……………」

吉原は少し苛々したように言っ、たが、その苛々全部がおれに向かっているように思えなかつ、た。多分吉原は、あの時手を出したことを後悔しているのだろう。

「でも神波、あそこで『ずるい』は無いと思うぞ？あの場合にいた全員に殴られても仕方なかつ、たと思う」

「ええ？なんで？おれ皆の代弁したつもりだつ、たんだけど」

「皆の代弁したのはどう考えても俺のほうだろう。……………蹴りは痛かつ、たし」

「それは……………すみませんでした」

「……………いや、いい。先に手を出したのは俺だし。悪かつ、たな」

ちょっとだけ不機嫌そうに、吉原はそう言った。

悪いのはおれなのに。

「つつーかお前ら、兄妹そろってなんでそんな強いんだよ。経験者じゃないとは言わせんぞ」

「父さんが警察官なんだ」

「親の職業は関係ないだろう」

「そうかなあ？」

そういえば、どうしておれは空手を始めたんだっけ。

あირりが始めたから？

いや、あირりのほうが、空手を始めたのは遅いはずだ。

「なんでだっけなあ……」

おれが頭をかきながら考えているうちに、吉原は勉強を再開してしまった。大して興味も無かったらしい。おれは考えるのをやめて、吉原の並べる字を眺めることにした。

「あირりがつよくなつたのはさんさいのときからだよー」

と、唐突に背後から声がしたので振り返ると、髪が濡れたままのあირりが立っていた。

「3歳からだっけ？」

「うん。おにーちゃんはごさい」

「何の話だ？」

おれがごく自然にあირりの髪をタオルで拭きはじめるのと同時に、吉原はおれたちに尋ねた。

「おれら二人とも、11年前から始めたんだ、空手」

「おにーちゃんのほうがはじめたのははやいよ」

「うん、そうだよな」

「お前らさ」

吉原はおれとあირりを交互に見て、

「兄妹、なんだな」

と言った。

それは当たり前のことなんだけど、

なんとなく、悲しくなった。

「……はい、終わり」

吉原の言葉の意図を聞きたくなくて、話題を変えようとしたおれは、あいの髪を拭き終わったことにして、タオルをあいの肩にかけてやった。一瞬、いつもと違う石けんの匂いがふわりとした。

「吉原も風呂、入ってくれば？」

「いや、俺は……もう少しあとで」

吉原はなぜかあいを一瞥してから答えた。おれはそれを少し訝しく思いながら、

「……そっか」

と返した。

思えば、吉原は演技が、いや、嘘が下手なのかもしれない。

吉原のそんなところが、おれは好きなんだけど。

吉原は優しいから、こんな茶番に付き合ってくれたのだと思う。

あいのせいで、

それでいて、おれのために。

「桜世!!」

おれが一番畏れている人の声が、おれの名前を呼んだ。

「あ、おとーさんとおかーさん」

あいは吉原の部屋に飛び込んできた両親を見て、まるでそれを予想していたみたいに、あるいはそれを知っていたみたいに、当然のように、にぱっと笑った。

何が何だかわからなかった。

「桜世、あირ、歸るぞ!」

怒鳴り込んで来たその人は、あირの細い腕を掴んだ。はたから見たらあირの腕が折れてしまうのではないかと思われるほど、二人の力量差がそこにはあるように見えたが、あირの腕は見た目ほどやわじゃないから、そんなことで折れるはずもなく、また、父さんもやはり力を加減しているようだった。

「ごめんねー吉原くん、うちの子が迷惑かけちゃってさ」

「ああ、いえ、いいですよ。ええと……お姉さん、ですか？」

「やだなあもう、あたしなんてもうすぐ40だよ？オバサンだよオバサン！」

「はっ？よ……40？」

と、あირりたちの隣では母さんと吉原がのんきに年齢の話なんかにしている。確かに母さんは実年齢より若く見られがちだが、今驚くべきところはそこではないんじゃないのか吉原？

「なっ……何だよ、父さんも母さんも、いきなり押しかけてきて！」

「お兄ちゃんがそれ言う？」

「え……ええと、なんで吉原んち知ってるんだよ！」

「問うべきはそこじゃなくて、なんで居場所知ってたかでしょ？」
いちいち的確にツッコんでくる母さんに、おれは少々まごつきながら、

「そう、そうだよ母さん？なんでわかったのっ！」

と尋ねた。母さんは笑っただけで、質問には答えてくれなかった。

「よ……吉原あ」

吉原を見上げると、さっと目を逸らされて、おれはちょっとだけシヨックを受けた。

ほら見ろ、父さんと母さんが騒がしいから吉原に嫌われちゃったじゃないか。

「桜世……お前はまた他人様に迷惑かけて！」

「う……父さんには関係ないだろう」

ふいとそっぽを向くと、母さんがくすくす笑う声がしたので、おれは母さんを軽く睨んだ。けれど母さんはそんなことを気にする性格ではなく、にっこり笑顔で返されてしまった。

多分、いつまで経っても子供だとか思われたのだろう。

……………。

なんか、急に恥ずかしくなってきた。

「え……あれ？」

なんで？

なんでおれは駆け落ちなんてしようとしたんだっけ？

あირりが好きだから。

好きならこんなことに巻き込んでいいのか？

おれはあირりが好きで、だから駆け落ちだってできるような気がした。あირりと二人なら、何でもできる、と。

でも、あირりはどうなんだ？

あირりはおれのこと好きじゃないかもしれない。

あირりはおれなんか頼りにしてないのかもしれない。

なんでもできるとか思い込んでいるくせに、つい吉原を頼っちゃってるおれを、あირりはどう思っているのだろう。

子供。

ひとりじゃなんにもできない、浅はかな子供じゃないか。

これじゃあ、吉原に子供扱いされたって、言い返せない。

「あの……、神波？」

「吉原」

俯くおれの顔をのぞき込もうとした吉原に向き直って、おれは頭を下げた。

「ごめんなさい」

「……………、は？」

おれの突然の謝罪に、吉原は面食らったように声を上げ、戸惑いを

露わにした。何を謝っているのかわからないのかもしれない。

「か……神波？」

「迷惑かけて、ごめんね？」

もう一度謝ると、吉原は不思議そうな顔をしつつも、

「いや……、別にいいよ」

と小さく笑った。

それだけでおれはなんとなく安心して、あいりに目を移した。

あいりは、いつもどおり、にぱっと笑った。

「あいりも、ごめんな」

あいりの少し湿った髪を撫でると、あいりはちよつとだけ、首を傾げた。

可愛い。

「桜世」

静かで威厳があつて、まるで一昔前に流行っていた関白亭主の鏡みたいな父親の声が、おれを呼んだ。

そうして父さんは、おれに手を伸ばして、

「っ、……………」

……………。

…………、あれ？

殴られると思ったのに。

父さんは、たった今おれがあいりにしたみたいに、おれの頭を撫でただけだった。

「どうしてこんなことをしたのか、父さんは聞かん。家出をした理由はどうでもいい。だが、お前の可愛い妹まで巻き込むのは良くないな」

「わ……わかってるよ、父さん」

「ああ、そうみたいで、安心した」

父さんの、ああ、がどこか吉原に似ていて、おれは少しだけ可笑しく思えた。

「家出じゃなくてね、父さん、違うんだよ。ええと……ごめんなさ

い、おれ、なんにも考えてなかった」

視界の中央で父さんが、やっぱりそうか、という顔をして、視界の端で吉原が、やっぱりそうか、という顔をした。微妙に悔しかった。

「その……もう、こんなこと、しない……から」

しない、の後に、と思う、を言おうかどうか迷った末、言わないでおいた。多分、それが正解。

「ええと、だからね、父さん」

帰ろう。

それだけ、どうしても言えなかった。勝手に家出しようとして、それで勝手に自己解決して、迎えが来たから帰ろう、なんて、あまりにも身勝手すぎる。吉原にも父にも悪い気がして、おれが言葉を探すように視線を宙に泳がせていると、

ぎゅ、

と、突然右手を握られた。

「……あいり」

小学生のそのように小さすぎる両手は、放すまいとでも言うようにおれの手にしがみついていた。

「じゃ、かえろっか、おにーちゃん」

あいりはいつもと変わらぬ可愛い笑顔で、迷うことなくそう言った。

「……うん、そうだね」

どうやらおれはやっぱり、この小さい妹に、一生かかっても勝てないらしい。

「帰ろう、家に」

駆け落ちなんてするよりも、家で父さんと母さんと、そしてあいり

と一緒にいるほうが、ずっと楽しいから。

33とさんぶんのいち

で。

駆け落ち未遂事件で、おれとあいりの絆は深まった、とおれとしては思っていたのだが、あいりはというと、やはり以前とまったく変わらず、おれが学校から帰ってもDSiという新たなお友達に夢中で完全無視、いや、気付いてくれない。

それよりもおれは吉原のほうとより仲良くなったかんじで、また何かあればいつでも頼ってくれ、などと男前なことを言ってもらえたため、そのうちまた遠慮せずにお世話になろうと思っている。

数日も経った今、おれと吉原の噂は早くも立ち消えになって、いつものまにか何事もなかったかのように、昼休みにおれが母さんお手製のお弁当を広げていると、おれの正面を日野が陣取り、日野の隣を宇垣が陣取る、というお決まりの現象が起きるようになった。

日野がおれを避け始めたあの日から戻ってきた今までの中で（なるほどこれが最近か）、日野の中でどのような心の動きがあったのか、それはおれの知るところではない。日野が一人で納得して、おれと宇垣のもとへ戻ってきたのかもしれないし、誰かに説得されて戻ってきたのかもしれない。いくら考えてもわからないが、まあ、知らなくても損をすることはないだろう。

日野が戻ってきたことで宇垣のテンションは再びはるか高みにのぼり、今までどおりのにぎやかさを取り戻した。

いや、厳密に言うとなんかといくつか相違点があり、そのせいでさらににぎやかになったのだが、まあ、言うほどのことでもないの割愛。

とどのつまりは、おれに友達が増えたというだけのことだ。

「ねえ、日野」

「ん、なあに、チェリー？」

さくらんぼは柄まで食べる派の日野が、またさくらんぼを柄ごと口に放り込んだのを見て、

「さくらんぼ、いっこちようだい？」

とおれは言った。日野は快く頷いておれにさくらんぼを差し出し、宇垣が妙に羨ましそうにそれを見てくるので、そのさくらんぼをそのまま宇垣に渡して、

「もういっこ」

と言ってみた。まさか本当にふたつ目をもらえるとは思ってなかったんだけど。

「はいっ」

と日野がくれたさくらんぼを、おれは日野みたいに柄ごと口に放り込んだ。

実は種ごとのみこんで、舌を器用に使って柄を結んで、べっ、と手のひらに吐き出す。

柄はおれの唾液でべたべたになっていたが、その結び目の形の良さに、おれは心底満足した。

フォースキスは上手くできそうだ。

――，
CHERRY is the END.

33とさんぶんのいち（後書き）

こんにちは、もしくはこんばんは、もしくはおはようございます。まずはここまでチェリーのお話に付き合ってください。あなたに、感謝と、少しばかりの謝罪を。

本当は、こんなに長くなるはずじゃなかったのです。というより、こんなに長くなってしまったとは思っていなかった、が正しいかもしれません。……、ちゃんと終われてよかった。

私がこのお話を書き始めた当時、世間は空前のケータイ小説ブーム、新しい文学の誕生に賛否両論が新聞の上を飛び交っていました。

ケータイ小説とやらは、拙い文章、いちいち挟まれる句読点、必要以上の改行で読みにくいことこの上ない。ストーリーもどれも似たようなもので、いじめやらレイプやらで主人公は悲惨な運命に翻弄され、恋人はやたらと病魔におかされ死んでいく、“純愛”と“感動”を無闇に売りにしたノンフィクションばかりだ。

といった辛辣な内容の某評論家のインタビューを新聞で読み、ふむ、ならば私はそんなケータイ小説のイメージとはまったく逆のケータイ小説を書いてみようじゃないか、という思いつきから、このお話を書き始めました。

つまり私が最初から思い描いていた物語、句読点や改行がやけに少なくて読みにくい、いじめもレイプも病気もない、泣けもしなければ笑えもしない、ヤマもオチもイミもない、成就とは程遠い恋、作者とは程遠い主人公、現実にはありえない完全フィクション、よい子はマネしないでね、というぐだぐだ物語どおりに、このお話は一応の完結を果たしたわけです。

これできちんと完結しているつもりなのかと問われれば、それはどうとも言えませんが。

自己満足の賜物でしかないこのお話が完結という形を取れること自体、奇跡なのだから。

書いている途中の評価やコメントは励みになりました。もちろん読んでくださる方の存在だけでもそうでしたが、あのメッセージがあったからこそ、物語の終わりを迎えられるのだと思います。

そういえば、本を評価するにあたって、まず最初に“作品のテーマ”なるものをお探しになる方が多いのではないのでしょうか。その点で、このお話は不利でした。なにせテーマがない。当然です、思いつきで書かれた話に、明確なテーマなどあるはずがないのです。

しかしそれでもこのお話に作者からのメッセージを求める方がおられるのなら、仮にも作者の私は答えないわけにはいかないのかもしれない。

ええと、

じゃあ、

未成年者の飲酒の危険性について。

この物語はフィクションです。未成年者の飲酒は法律で禁止されています。お酒はハタチになってから。じゃないと大変なことになっちゃうぞ。

作者が言いたいのは、それだけです。

というわけで、つい長々と書いてしまいましたが、チェリーのお話はこれにて終了です。ちょいちょい張っておいた伏線は半分も回収できておりませんが、素人の書く小説だからと、笑って許して下さいください。

このお話の続き、チェリーの恋の行方はだれにもわかりません。チェリーは死ぬまであいに尽くすのかもわからないし、ある日ふと心変わりして、日野を好きになるかもわかりません。望月かもしれません。麻生ちゃんかもしれません。吉原かもしれません。私にもわからないのです。

だから、チェリーの未来を決められるのは、このお話の最後を見届けたあなただけ。

そんなあなたにもう一度、めいっぱいの感謝の気持ちを込めて。ありがとうございました。

2
0
0
8
年
1
2
月
の
の

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524c/>

CHERRY

2010年11月20日14時56分発行